
仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士

オンドゥル侍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士

【Zコード】

N1608W

【作者名】

オンドウル侍

【あらすじ】

民間軍事会社リトルウイングに所属する青年「アレン・クラウド」はある日家の中で一つのカードデッキを拾う。そして彼は、鏡の向こうの世界「ベンタラ」の事、そこを征服し次にグラールを狙う「ゼイビアックス将軍」の事を知る。大切な人が繋ぎ、守ってきたグラールをゼイビアックスの魔の手から守るために、アレンは「仮面ライダードラゴンナイト」となり、ベンタラの戦士「レン」と共に戦う事を決意する。

原作のストーリー沿いに行きつつ、所々改変をくわえてお送りいた

します。

世界観説明

グラール太陽系

母なる太陽と、3つの可住惑星からなる太陽系。太陽の名が『グラール』であると考えるのが自然だが、太陽系そのものをグラールと言う事が多い。SEED襲来のすぐあとにイルミナスが本格的に活動し、その脅威がさつたと思えば旧文明人の罠によつて危機に陥り、それを退けた直後にダークファルスが復活、さらにそれを凌いだと思えばゼイビアックスによる侵略など、とにかく事件に事欠かない。

ベンタラ

グラールと鏡映しになつてゐるパラレルワールドで、レンの故郷。そのため同じDNAを持つ人間が、グラールとベンタラに1人ずつ存在する。ゼイビアックスによつて住人が拉致されたため、現在は無人。

カーシュ

ユートが生まれ育つた少数民族ではなく、ゼイビアックスの母星。北軍と南軍に分かれての長きにわたる戦争で荒廃し、その再建に使うための労働力としてさらわれたベンタラの住人が使われている。

リトルウイング

アレンが所属する民間軍事会社。規模は小さいが基本的にはどんな仕事でも受けるのがウリ。亜空間事件を乗り切つてからは顧客もかなり増えたらしい。頻発する行方不明事件の調査を進めるが、モン

スターとの関連にまでは気付けていない。

ガーディアンズ

警察権を与えられた『民間警護会社』の中でも最大規模の組織。モンスターと行方不明事件の関連にいち早く気付いており、極秘調査を進めるための機関も設立されたといつづわさもある。

仮面ライダー

アドベントマスターことユーブロンが、ベンタラを守るためにライシューの技術を用いて開発した特殊強化戦闘システムおよびその使用者。全部で12が存在し、それに加えてユーブロン自らが変身したプロトタイプライダーを加えた13人で戦ってきた。ドラゴンナイト、ウイングナイト、アドベントマスターを除いたすべてのデッキはゼイビックスの手に渡つたと考えられる。

アドベントビースト

アドベントマスターが作り出したモンスターで、ライダーと契約をかわし力を与える存在。必ずそうしなければならない訳ではないが、倒したモンスターのエネルギーを与える事で強化することが可能。

モンスター

ゼイビックスが作り出した戦闘用の人工生物で、人間を拉致して要塞まで運ぶのが主な役目。ライダーと契約を交わすことは不可能。アドベントマスターはこれをもとにアドベントビーストを作り出したものと考えられる。

ベント

ライダーが敗北すると発動する機能。規定値を超えるダメージを受けると、そのライダーの意思を問わずに、二つの世界の狭間にある『アドベント空間』に強制転移する。アメリカでは放送コードが厳しく原作の様にライダーを死なせる事が出来ないため取り入れられた。

アドベント空間

ベントされたライダーが転送される先で、アドベントマスターが作り出した。元々は傷付き倒れたライダーを隔離し、後で回収するシェルター的な場所だったが、唯一アドベント空間と現実世界を行き来できるアドベントマスターが行方不明になつたため、牢獄同然の場所となつてしまつた。

ディメンジョンホール

グラールとベンタラを隔てるトンネルの様な物。アドベントサイトルはここに用意されている。

プロローグ

夜の駐車場。その女性は少し急いでいた。自分の車に向けて足早に歩いて行く。そこには事務所にいる管理人と彼女以外誰もいない。…周りの光景を反射して映している黒い車体から、彼女を見つめる異質な視線を除けばだが。

「きやあ！」

突如、その女性が現れた何者かに後ろから押さえられる。管理人はと言えば、よからぬことをされそうになつていて勘違いし、読んでいる雑誌越しに時々眼をやるだけ。

人の様に四肢が生えてはいるが、顔の無い赤い体。背中に背負つた巨大手裏剣。首元のコード。どう見ても、人間ではない。それが鏡から現れて、彼女を引きずりこもうとする。

と、その時だつた。突然飛び出した1台のバイクが女性をかわして赤い怪物だけをはね飛ばし、少し走つてから急停車する。

黒い車体のバイクだ。従来のホイールバイクと少し違つた変わったデザインだが、乗つている男に比べれば大したことは無い。

蝙蝠の様な鎧。腰に巻いた銀のベルトとそこから下がつたレイピア。

さつき撥ね飛ばした怪物が起き上がり、鏡の中から増援も現れる。数的にざつと15くらいか。男はレイピアを抜き放ち、勇躍怪物に飛びかかった。

流れるような剣技は怪物に攻撃の隙を与えない。しかしこの数が相手では少し無理がある。男はレイピアを納めるとベルトのバックルに手を伸ばし、一枚のカードを引き抜いてレイピアに取り付けられた器具に挿入した。

『SWORD VENT』

突如飛來した蝙蝠から男の手に、黒い槍が飛び込む。その槍を振りかざし、男は再び怪物たちに向かつていつた。

一撃の威力はさつきとはけた違ひに重い。横に薙ぎ払つた一撃に怪物のほとんどが斬り伏せられる。続けて1撃。2撃。その怪物は地面に倒れ伏すと、突然跡形もなく消え去つた。

「……大丈夫か？」

「え、ええ……」

男は女性を助け起こし、バイクの辺りまで来るとそこで立ち止まつた。管理人はと言えば、電話の受話器を握りしめている。と、管理人は自分の目を疑つた。男の体を囮うようにして一つのリングが浮かび、その姿が変わつたのだ。サングラスを掛け、革のジャケットを着た男だ。見た目から、歳はざつと20代後半と言つたところか。その男はバイクに跨り、ヘルメットをかぶると夜の街に消えていった。

「……マジかよ。」

管理人はそう咳き、事務所に足を向けた。

バイクに乗つて走る男の頭に、共鳴ともつかない音が響く。その男は前を見据え、言い放つた。

「KAMEN RIDER！」

プロローグ（後書き）

原作第1話の最初の方のシーンです。丸っぽそのまんまですが第2話からはちゃんとオリジナルシーンとかも出てきます。

第一話 鏡の向こうへ前編

「よっしゃあ！また勝った！」

「ああんもう！何で勝てないのよ！」

リゾート型コロニー、クラッド6。その居住区のある部屋でカードゲームに興じる一人組がいた。

アレン・クラウドとエミリア・パーシバルである。ただの仕事仲間…よりはお互いに親しいが、それでも恋人とかいう仲ではない。「ま、天性の才能ってやつかな？」

次の瞬間、アレンの頭上には幾つか星が舞っていた。ちなみに田の前にはいらだたしげに拳を構えるエミリア。

「ちょ・う・し・に・の・る・な…」

「すびばぜん。」

アレンが顔を押さえながら立ち上がる。

「…じゃ、あたしも帰らせてもらひつわ。」

「おひ。じゃあな。」

と、エミリアが部屋を出たのを見届けた直後、ふとベッドのわきに田をやつたアレンは、そこに見慣れないものが置いてあるのを見つけた。

「……カードデッキ？」

シンプルな黒く薄いケースに収められた数枚のカードだ。ためしに一枚ぬいてみた。『ＳＥＬＬ』と書かれている。裏面を返して見ると、始めてみる名前があつた。

「……アドベントカード？」

アレンはカードゲームに詳しかつたが、こんなカードは見たことが無い。買った覚えなどもちろん無かった。

何となくブランドに出て、カードデッキを人工太陽の光にかざしてみる。やはり、書いてある事は変わらない。と、ふと田の前を見たアレンは、そこに妙な物を見た。

彼の部屋はベランダ付きで、そこから繁華街が一望できるようになっていた。向かいには大きなオフィスビルがあり、窓は太陽を反射して巨大な鏡のようだった。その表面がさざ波だっている。

「？」

と、その波紋の中央から突然何かが飛び出してきた。

赤いドラゴンだった。それが、咆哮を挙げてアレンの方に向かつてきた。

「うわあ！」

両手で顔を庇うと、持っていたカードデッキから光の壁の様なものが現れ、アレンを守ってくれた。弾かれたドラゴンはそのまま壁面に舞い戻り、その中へと消えた。

「……なんだ？」

アレンは街に出ていた。何故かそうしなければいけない気がした。

しばらくして、アレンは裏路地を歩くエミリアを見つけた。別に怪しくは思わなかつた。その路地は彼女の行きつけの床屋への近道だつた。最近髪が伸びたと言つていたから、切りに行くのだろう。そう思つたその時だつた。道のわきに捨て置かれた古いテレビの画面から、何かが這い出でてきたのだ。赤い、人型の何かだ。それも2体はいる。

「お、オイ！」

エミリアがアレンの方向を振り返る。

「お、お前ら……その……あ、あっちへ行け！」

エミリアの視界には明らかにその怪物が入つていたが、氣にも止めようとしない。それどころか、不思議そうな顔をしてアレンに声をかけた。

「あ、アレン。…つてか誰と話してるの？」

間違いない。エミリアにはこいつらが見えていない。

「え、お前、見えないのか… ってか逃げる！ここは危ない！」

「え？ あ、う、うん…」

エミリアが、まるでわけがわからないと言った顔で路地の向こうに駆けて行った。それを見届けてから、アレンは怪物を見据えた。街中で武器を振り回す訳にはいかない。素手で戦うしかないだろう。

「さあ… きやがれ…」

「オ、オオオオオッ！」

怪物 正確にはレッドミーノンと言うが はアレンに襲いかかつた。叩き込まれた拳はかなりの威力だったが、アレンは慣れた動きでかわし、首筋に手刀を叩き込んだ。レッドミーノンはよろめきはしたが、それほど大きなダメージは受けていない。

「チイツ！」

反対側から飛びかかってきたレッドミーノンを組みふせ、近くの木箱目掛けて投げ飛ばす。そのレッドミーノンは壁に叩きつけられたが、やはり起き上がってきた。

と、アレンの後ろから、もう1体が迫ってきた。後ろからのサイドキックを受け、続けざまの重い拳がアレンの体をはね飛ばす。

「ぐああ…」

と、その時だつた。

「きやああ…！」

エミリアが、いつの間にやら出てきたもう1体に抑え込まれ、近くにあつた鏡の方に引きずられていった。抵抗はしているが、ほぼ無駄だった。

「エミリアアアア…！」

アレンは叫んだが、どうにもならなかつた。エミリアは鏡に引きずり込まれ怪物もろとも消えていった。

「エミリア… ウソだろ…」

次の瞬間、レッドミーノンが1体、鏡の中から叩きだされるよう

に出てきた。そしてその次に出てきたのは、エミリアを抱きかかえたサングラスの男だった。

男はエミリアを下ろすと、黙つてレッドミーオンを見据える。

「ア、アアアアア！」

レッドミーオンは襲いかかつたが、明らかに男が優勢だった。続けざまに拳やキックを叩き込まれた1体が、靄の様に消滅する。続いてもう1体、もう1体。

最後のレッドミーオンを壁に蹴り飛ばして消滅させると、男はアレンに近付いてきた。

「スゲえじゃんあんた！なに？格闘家か何か？」

しかし、男はアレンの言葉など無視した。

「カードデッキをよこせ。」

「え？何のこと？」

「そのままの意味だ！俺に渡せ！」

アレンは男から走つて逃げ去つた。あんなのの相手をするのは御免だ。

それから少しして、アレンはとあるブティックの前に来ていた。ふとそのショーウィンドウを除くと、彼は思わず目をこすった。

ショーウィンドウの内側、いや、ショーウィンドウに使われている透明鋼の中に、何か這つている。

蜘蛛だ。でかい蜘蛛だ。

と、突然その蜘蛛の足が壁面から出でくる。

「うわあっ！」

驚いたアレンはそのまま背中を後ろの車にぶつけた。と、次の瞬間、彼の体は見えなくなつていた。

銀色のトンネルの様な空間。そこをアレンは飛んでいた。と、その体が光に包まれる。そのまま、アレンは飛んで行った。

サングラスの男は、アレンが消えたショーウィンドーまで來いた。彼はすぐに事態を飲み込んだ。落ち着き払つて懐から何かを取り出す。

カードデッキだった。蝙蝠のレリーフが刻まれた紺色のカードデッキ。それをショーウィンドーにかざす。と、カードデッキから青い電光が男の腰に伝わり、銀色のベルトの様なものを形成する。バックル中央にはカードデッキと同じくらいの空間がある。

「KAMEN RIDER！」

男はそう言つて、バックルにカードデッキをスライド挿入した。上下の固定器具の様なものが閉じ、カードデッキが縦に激しく回転する。

次の瞬間、男の体を囲うよに青いリングが2本重なつて出現した。それがそれぞれ反対の方向に回転してから消滅すると、男の姿は変わっていた。

鎧だ。蝙蝠の様な鎧を着、腰には蝙蝠をかたどつたレイピアを下げている。そのレイピアを引き抜き、男は壁面に消えていった。

第一話 鏡の向こうへ前編（後書き）

次回予告

わけもわからぬまま鏡の向こうに飛ばされたアレンは、そこで「巨大モンスター」「ディスペイダー」に遭遇。逃げるだけのアレンを助けたのは、蝙蝠の様な剣士だった。彼の正体とはいつた? そしてアレンを襲撃したドラゴンとは?

次回、仮面ライダー「ドラゴンナイト」 翼を抱いた鏡の戦士『鏡の向こうへ後編』

命をかけて、守りたいものがありますか? 7

第2話 鏡の向こうへ後編

誰もいない屋外の駐車場。そこに停まつた1台の車の車体から、突然出てきた人間がいた。

アレンだった。

地面にぶつけた体を確かめようと/or>して、アレンは自分が妙な格好をしていることに気付いた。

黒と灰色の鎧だ。左手には白い手甲の様なものが取り付けられ、頭もヘルメットの様な物で覆われている。

「え? 何これ?」

と、目の前に気配を感じて顔を上げたアレンは、さつきの怪物が正面にいることに気付いた。

「わあっ!」

走つて逃げようとしたが、バケモノ蜘蛛の方が早かつた。横殴りの一撃を受け、アレンの体が横つとびに吹っ飛ぶ。

壁に叩きつけられたが、思ったより痛くなかった。この鎧のおかげだろうか。どっちにしろ、今は逃げる手段を見つけるのが先決だ。しかし、蜘蛛は思った以上に素早かつた。もつアレンとの距離を詰め、じりじりと迫つてきている。

とその時だつた。突然飛び出してきた何かが、蜘蛛をはね飛ばした。

それは、弾丸とVRシミュレーターのシートを足して2で割つたようなホイールバイクだった。そのキャノピーが開き、中からレイピアを下げた鎧の男が出てきた。

「あ、ありがと。助かつたよ。」
だが。

「…俺にデッキを渡さないからだ。」

「あんたかよ…」

その声は、さつきのサングラスの男だつた。男は腰のレイピア

ダークバイザーに手を伸ばすと蝙蝠の尾の様な部分を引っ張つた。ジャキッと音がして翼型のパーツが開き、中からちょうどカードが1枚入るくらいの空間が露わになる。続いて男はバツカルのデツキからカードを1枚引き抜き、空間に差し込むとダークバイザーの翼を閉じた。

SWORDVENT

流暢な男の声とともに大きな蝙蝠が飛来し、男の手の中に大きな槍、ウイングランサーが飛び込む。男はウイングランサーを構えると、蜘蛛に飛びかかつて行つた。

蜘蛛が一きたす足を、男は鳥ほれるほどの巧みさで表していく。それを見ていたアレンは、自分の腰にもデッキ付きのベルトがあることに気付いた。

「ああせこて使うのが

カードを1枚抜くと、手甲がジヤキッと音を立てて開く。その中にカードを挿入すると、手甲が自動でどじた。

SWORDVENT

同じ声とともに空から剣が降ってきて、カスンと乾いた音とともに地面に刺さる。アレンは少し上空を見つめるとその剣を引き抜いた。細身の片手剣だった。

男がウイングランサーで蜘蛛の攻撃をさばいていると、突如後ろから気合が聞こえた。

アレンがさつきの剣
ライドソードを構え、蜘蛛に突進していく
た。

ーおい、待て！

男の制止など聞かず、アレンは蜘蛛に切りかかって、「も仕事でやつているように剣を大上段に振りかざし、蜘蛛に切りつけ…

「お、折れたああ！？」

パキンと音がしたと思うと、刀身が無くなっていた。切りつけた

だけで折れるなど、耐久性が無いにもほどがある。すぐに返り討ちにあり、アレンの体が後ろに飛ぶ。

「うわあっ！」

「邪魔をするな！」

男はウイングランサーで飛んでくるアレンを弾き飛ばすと、もう一枚カードを読み込んだ。

『ATTACK VENT』

と、さつきウイングランサーを呼び出したときに出てきた蝙蝠が飛来し、蜘蛛に体当たりを浴びせた。牽制くらいにしかなっていないが、それで十分だつたらしく。男はその隙に3枚目を差し込む。

『FINAL VENT』

電子音声が鳴るが早いが、男はウイングランサーを構えて助走をつける。その背中にさつきの蝙蝠 ダークウイングが合体し、その体が空に舞い上がったかと思うと、ウイングランサーを下に構えて蜘蛛に突っ込んでいった。ダークウイングがマントに変形して体に巻きつき、漆黒のドリルのような姿で蜘蛛に突撃した。次の瞬間、蜘蛛はバラバラに吹っ飛び、破片が四散する。

「ちょっとまで。アンタ誰だ？ そこに... ここはどこだ？」

しかし男はアレンの問いには答えようとしなかつた。

「すぐにここを出るぞ。」

「え？」

とその時だった。

「危ない！」

男がアレンを押しのけ、次の瞬間、さつきまでアレンと男が立っていたところ やや男よりだつたが に炎がぶつかつた。

さつきのドラゴンだ。炎を吐きながら少しづちに突っ込んでくる。「逃げろ！」

男はそろいいつつ、アレンと共に車の間を縫つように走つて行つた。ドラゴンが吐いた炎が、一人の周りを次々に爆破し、そして……

第2話 鏡の向こうへ後編（後書き）

次回予告

男からこれ以上首を突っ込まないよう忠告を受けるアレン。しかし、倒したはずの蜘蛛が復活を遂げ、男に危機が訪れる。そしてドラゴンと契約を交わした時、赤き戦士が鏡の世界に降り立つ…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士『ドラゴンとの契約』

命をかけて、守りたいものがありますか？

第3話 ドラゴンとの契約

「何で俺が狙われてるんだ?」

ひとしきりドランの炎をかわしてから、アレンがいらだたしげに質問した。

「説明は後だ! 窓を通って帰るぞ!」

「窓? そこから帰れるのか?」

「モノが映る物なら何でも。」

男はそう言うと近くの窓に近寄り、そこに歩いて行つた。と、そこに吸い込まれるようにして、男はいなくなつた。

「よ、よし、俺も…」

とその時だつた。ドラゴンの炎がその窓を粉々に砕く。

「う、うわああ!」

アレンは叫びながら車の間を走つて行つた。

「ええと、窓…窓…でなければ、モノが映るもの…」

と、不意に近くの車の黒い車体が目に入った。周りの風景が映つている。

「ええい、どうにでもなれッ!」

アレンがそこに飛び込んだ直後、最大の炎がその駐車場の地面をえぐる。

アレンはどこかの駐車場の車の車体から出でた。そのままのブティックからは離れている。

「…わざと逃げたって思われたかな…」

一方男は、ブティックのショーウィンドウから出でた。周りを見渡してもアレンの姿は無い。

「アイツ、何処に行つた？」

『アレン…ドラゴンを恐れるな…』

アレンは夢を見ていた。響いてくるのは、1年前から行方不明になつてゐる父親の声だつた。

『契約のカードだ…』

と、アレンは目を覚ました。まだ何か違和感が残つてゐる。こいつうときはバイクで走るに限る。

「つて、またあいつかよ！」

アレンの後ろから、さつきの男が黒いホイールバイクで追いかけ
てきた。すぐに裏路地にバイクを走らせる。しかし、男は執拗だつ
た。と、表通りに出ようとしたところで、荷物を運んでいる人間が
出てきた。慌ててブレーキを切ったおかげで衝突は免れたが。

「ご、ゴメン！」

「気をつける…」

突然男が横に並ぶと、アレンのバイクのキーを外して走り去つて
いった。

「あ、オイ何するんだ！」

「何の冗談だ？キーを返せ。」

アレンが押してきたバイクを止め、男に詰めよつた。だが男は例によつて答えない。

「カードデッキはどこだ？」

「あれで別の世界にいけるんだろう？」

男は黙つたままだった。

「契約のカードって？」

とたん、男の様子が変わった。そして、アレンに突然詰め寄つて来る。

「誰からその言葉を聞いた！？」

「え？あのドラゴンは？」

「ドラゴンには関わるな！」

「どうして？」

男は足を止めると、アレンを見据えて答えた。

「あのドラゴンと契約を結べば……ベントされるべ。

「ベント？何のこと？」

と、その時だった。アレンの頭の中に共鳴のような音が響く。どうやら男も同じものを聞いていたようだ。

「この音は？」

「入口が開いた。誰かの身に危険が……。……来い！」

男はアレンの袖を引っ張つて行つた。

とあるビルの屋上で、やや太つた男が空調機の修理をしていた。と、突然目の前の金属パネルから何かが出てきて、男の腕にくつついた。ネバついた糸だった。

「……ん？何だ、これ……」

とその時、パネルからまた糸が出てきて、男の体を絡め取つた。

「た、助けてくれえええええ！」

男とアレンがそこに来たのはちょうどその時だった。

「誰かああ……」

一人で男の体を抑え、思い切り後ろに引っ張る。糸を吐いてきた何かはかなりねばつたが、引っ張る力に耐えきれなくなつた糸が切れるごとに、それきり出てくる事は無くなつた。そしてアレンは、パネルの向こうに、一瞬だけ異形の姿を見つけた。

「その人を頼む。」

サングラスの男はそう言つと、パネルの前に進み出て懐から取り出したカードデッキをかざした。青い電光がベルトを形成すると、すぐにデッキを差し込む。

「KAMEN RIDER！」

光が迸つてリングが回転し、男は蝙蝠の様な戦士 仮面ライダー・ウイングナイトへと変身する。すぐにウイングナイトはパネルの中に入つて行つた。助けられた方の男はうめくような声を出して気絶する。

アレンはそれを見ると、自分のデッキをパネルにかざして叫んだ。

「KAMEN RIDER！」

が、反応がない。

「KAMEN RIDER！」

発音を替えて行つてみると、やはり何も起こらない。

「仮面ライダー…」

やつぱり無反応だ。

と、突然アレンの脳裏に言葉がよみがえつた。

ドリゴンを恐れるな。

契約のカードだ

「契約のカード…そつかー！」

アレンはデッキから「CONTRACT」のカードを抜き、陽の

あたる位置に移動する。向かいのビルの壁面がざざ波だつてゐる。

「……契約しよう？」

それに気付いたウイングナイトが叫んだ。

「よせええええ！」

が、敵の一撃に弾かれ、後ろに吹つ飛ぶ。

突如、ビルからドラゴンが飛び出してきて、アレンの体へと突つ込んできた、アレンは腕を広げ、ドラゴンが自分の体へと入つて行くを受け入れる。

アレンは何かの空間に立つていた。その体が、あの黒と灰色の鎧の覆われる。

と、突然カードデッキの中央に龍の頭のような紋章が浮かび上がり、頭にも同じものが。腕の手甲ライドバイザーが、龍の頭の様な装備 ドラグバイザーに代わる。

次の瞬間、鎧のカラーリングが灰色と黒から赤と黒に代わる。

ウイングナイトは苦戦していた。相手は倒したはずの蜘蛛だった。しかも、頭の上から人型の上半身が新しく生え、体自体も大きい。ミサイルの様に発射された針をウイングランサーでかわすが、横からいきなり叩きつけられた足に不覚を取られ、ビルの屋上から叩き落とされる。

「ぐあああああ！」

地面に叩きつけられ、ウイングナイトは這いつくばつた。そこに蜘蛛が降り立つ。そして、止めどばかりに針を放つた。

突然、飛び出してきた何者かが針をことごとく叩き落とす。

ウイングナイトはそれがアレンだとすぐさま気付いた。明らかに契約を交わした後だ。

「アドベントカードを使え！」

アレンはその言葉を聞くとドラグバイザーを開き、『テッキから引き抜いた一枚のカードを挿入する。

SWORDVENT

アレンの手に、赤い柄の剣 ドラグソードが飛び込む。アレン
はそれを振りかざして飛びあがると、蜘蛛の体に乗つて人型の部分
に切りつけた。今度は折れずに敵にダメージを叩き込んでいく。
ひとしきり切りつけた後、アレンはそこから飛び降り、デッキか
ら新しいカードを抜いてドラグバイザーに挿入した。

፩፻፲፭

アレンの周りを、先ほどのドラゴン エラグレッターが舞う。アレンは地面を蹴つて飛び上ると錐揉み状に回転し、空中で飛び蹴りの姿勢を取つた。直後、アレンの後ろからドラグレッターが炎を吐き、その勢いでアレンの体は蜘蛛の方に突っ込んでいく。

「ア、やった。」少糸の手で躍る。

そこに立つアレンの周りを、ドラグレッダーが舞った。

「骨ノニシテアリハ」

卷之三

「あんたなんか怖くないぞ。」

カイングナイフは腰を廻して持っていた。

「……お前は仮面ライターでいたんだ。満足か？」

第3話 ドラゴンとの契約（後書き）

次回予告

ドラグレッダーと契約を交わし、仮面ライダーとなつたアレン。新たなモンスターの出現を察知したアレンは、赤き戦士「ドラゴンナイト」へと変身して戦おうとするが、そこに、アレンを狙う新たなライダーが現れるのだった。

次回 仮面ライダー「ドラゴンナイト」 翼を抱いた鏡の戦士「ドラゴンナイト」

命をかけて、守りたいものがありますか？

第4話 ドラゴンナイト（前書き）

ブレイドネタ入れました。何処でしう?

第4話 デリケンナイト

アレンはすぐ近くの鏡の中から出てきた。さつきの戦いで思つた以上に消耗していたようだ。

と、田の前を見ると、すぐ前にミラ(

「……………」

絶叫した拍子に、アレンの顔が後ろの鏡に突っ込んだ。

待つて！待つて待つて待つて！まずは抜いて！その頭を鏡から抜

二三九

それから少しして、二人はリトルウイングの事務所にいた。

「…鏡の中に、もう一つの世界があつたって事？」

「 録で語りかモノを喰るものたなそこは人るとモノアケテ早いジェット機に乗つたみたいになる。」

アレンが、鏡の向こうの世界について説明する。エミリアは実際に鏡に引きずり込まれただけあって、手間はかからずあっさり信じて

「じゃあ、あのグリカンせしおりが、飛んでるって事?」この搭乗

アレンジのドレッシングをかぶせた。

「やうなるだれつな。」

「ノーリー」
「ノーリー」

唐突に

唐突にエミリアが口を開いた。

「ひょっとしてだけど、その鏡のモンスターと、最近頻発してる失踪事件つて何か関係があるんじゃないの？ほら例えば…去年からい

なくなつてゐあんたのお父さんとか…

とその時。

「アレンの親父さんについては調べは付いてい。」

振り返ると、シズルがいた。

「シズル！？いつの間にいたんだ！？」

「ずっといた。それよりほら。これを見る。」

シズルはそう言って、持つていたラップトップ型のPCの画面をアレンとエミリアに見せた。

「これって？」

「なに、太陽系警察のサーバーに侵入しただけだ。」

確かに、シズルならそれくらい簡単にできるだろう。何せ、亜空間発生装置のパラメータ演算を一人で行ったのだから。

「見る、これって、アレンの親父さんじやないのか？」

観ると、確かに画面には『フランク・クラウド』と父の名があった。
『…』クラウド⁶在住だが、1年前に失踪、現在でも行方は分からぬ。息子のアレンは民間軍事会社リトルウイングに勤務。』
だつてさ。』

「確かにこれは父さんのだ。」

「…ねえ、ちょっとあたしの家に行かない？あたしのPCならスペックがかなり引き上げてあるからもつと深いところまで調べられるかも。」

「…なるほど、僕の出る幕はなしか。じゃ。」

「シズル？もう行くの？」

「久しぶりに君らの顔を見に来ただけだ。」

そう言つて、シズルは去つていった。

と、その時。

ヒュイイイイイイイイ…フォオオオ…キイイイイ…

アレンとエミリアの頭の中に、何かの音が響く。

「エミリア、聞こえたか？」

「うん、はつきり。何なの？」

「たぶん、招かれざる客だ。」

そう言つと、アレンは事務所を出て、すぐ近くの植物の陰にある窓の前まで来た。

「アレン、何するの？」

「ちょっと離れてる。」

アレンはそう言つと、懐からカードデッキを取り出してそれを窓にかざす。赤い電光がデッキから発せられ、腰に到達して変身ベルトを形成する。

「KAMEN RIDER！」

バツカルに差し込むとデッキが激しく回転し、赤いリングがウイングナイトの時の様に体の周りを回転する。そのリングが消滅すると、アレンは仮面ライダードラゴンナイトへと変身していた。

「……じやつ。」

それだけ言つて、アレンは窓の中に入つて行つた。

「……か、仮面ライダー？」

鏡の向ひ。レッドマニオンが2体、女性を引きずつていぐ。それを率いているのは蟹の様なモンスター、ボルキャンサー。

「彼女を離せ！』

アレンに気付いたか、ボルキャンサーが振り返る。ボルキャンサーが鍔を構えると同時に、アレンもカードをドラグバイザーに読み込ませる。

『SWORD VENT』

召喚されたドラグソードを振りかざし、アレンはボルキャンサーに斬りかかり、1撃、2撃と斬撃を叩き込む。が。

「なっ、堅え！」

びくともしていない。むしろアレンの腕にビリビリと衝撃が走る。

ボルキヤンサーが突然反撃の鋏を振り上げ、アレンが近くの階段の下まで吹っ飛ばされる。

と、アレンの田の前に、例の弾丸バイク アドベントサイクルがやってきた。

「来てくれたのか？」

が、降りてきたのはウイングナイトではなかつた。蟹の様なライダーだ。左腕に着いた鋏はおそらくドラグバイザーの様な召喚機だろう。

「…え？ 誰なんだあんた一体？」

そのライダーは黙つたままだつた。

「味方なんだろ？ ……俺と一緒に、戦つてくれるんだ…」

とその時、蟹ライダーが鋏のついた左腕を突き出した。

「グアア！」

鋏の一撃をもろに食らい、アレンが大きくよろめく。

「何するんだ！ 黙つてないで何とか言えよ！」

しかし、蟹ライダーは襲いかかってきた。

「うえああ！」

突き出された鋏をドラグソードで何とか受け止めるが、そのままの体勢で後ろに追い詰められる。

「俺はアレン・クラウドーお前は！？」

「…黙つて戦え。」

「ハハツ、やつと喋つてくれた。よろしく。」

拘束から何とか抜けるが、後ろから突然切りつけられる。さつきのボルキヤンサーだつた。ボルキヤンサーと蟹ライダー、3つの鋏がアレンに襲いかかり、ドラグソードを弾き飛ばす。しかし、アレンは落ち着いて体を縮めると、低弾道の回し蹴りでライダーの足をすくい、ボルキヤンサーの背中を踏み台にして後ろに跳躍する。

「…ま、待て…」

着地したアレンのもとに、蟹ライダーがやってきた。後ろについたボルキヤンサーと、どこか似通つた雰囲気を漂わせていく。

「…モンスターと仲間なのか？」

蟹ライダーは鉗を構え、アレンに向けて突進してきた。

「ハアア！！」

第4話 ドラゴンナイト（後書き）

次回予告

突如襲つてきた蟹の仮面ライダー、インサイザー。何とか逃げのびたアレンは、既に狙われているのだつた…

次回、仮面ライダー・ドラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 「仮面ライダー・インサイザー」

命をかけて、守りたいものがありますか？

第5話／仮面ライダーインサイザー

「ちょっと待てよ、味方じゃないのか？」

アレンの叫びも無視して、蟹男は襲いかかってきた。腕に装備されたシザースバイザーを振り回し、ボルキャンサーも再び加勢する。

「ちいっ！」

振り下ろされた鍔をドラグソードで何とか受け止めて振り払い、くるりと一回転して蟹ライダーに刃を見舞う。続けて2撃、3撃と攻撃を加えたが、後ろからのボルキャンサーの攻撃で思い切り体勢を崩す。

アレンは剣技、特に片手剣の扱いは自信があった。相手も、クロ一系の武器を持つていると考えればどうという事は無い。ただ、問題は2対1と言う事だ。ボルキャンサーは堅いし蟹ライダーの攻撃は無駄に重い。そして何より、相手がこちらと同じように武器を召喚できる可能性も高い。そうなれば、迂闊に突っ込みまくることもできない。

「待てよ、聞きたいことがあるだけなんだ！」

蟹ライダーの攻撃を必死にかわしながら聞いた。予想通り無視されたが。今まであつたライダーはこんなのはばかりだ。

ボルキャンサーの鍔を受け止め、鍔迫り合いの様な状態が続く。と、蟹ライダーはシザースバイザーを開き、デツキから抜いたカーデをセットして鍔を閉じた。

『STRIKE VENT』

と、蟹ライダーの腕にボルキャンサーの鍔とそっくりの武器が装備される。

「！！」

気付いた時には遅かつた。アレンはその武器、シザースピンチの一撃を喰らい、盛大に吹っ飛ばされていた。蟹ライダーが挑発するように喋り、シザースピンチの鍔をガチャガチャと鳴らす。

「もう一発喰らうとか?」

「またにするよ…」

アレンはちゅうづ後にあつた窓から脱出した。

アレンが窓から出てきてどこかへ去つていふと、物陰から男が姿を見せた。

ウイングナイトの男だった。どうやら一部始終を見ていたらしい。その男もバイクで走り去る。と、別の窓がまたもやさぎなみ立ち、さつきの蟹ライダーが現れて変身を解いた。

現れたのは、どこかチャラ男的な雰囲気を漂わせる若い男だった。男は首を抑えて軽くひねり、ため息をついた。

「もつと楽に稼げる方法は無いのかよ……」

その男はポケットから携帯ビジフォンを取り出し、登録してある番号の一つに掛けた。

「やあリッキー、いい知らせでも持つてきたか?」

どこのオフィスで、スーツを着た男がその電話に出た。リッキーと呼ばれたチャラ男が一気に不平をこぼす。

「それどころじゃないよ。腰は痛いし頭も割れそうだ。これじゃ身が持たないね。」

「ハア…いいかリッキー、金が欲しいんだろ、嫌なら働くか?バーガーショップで。」

「バーガーショップ? そんなのやつてられるか!」

考えただけでもおぞましいと行つた様に、リッキーが軽く首を振る。

「だが、生きていくためには働くなど。約束を忘れたか?」

そう言われ、リッチーの脳裏にはある記憶がよみがえっていた。

『あのプレイは最高だつたよなあ？』

『全くだよ、その後もチャンスだつたけど審判がファール取りやがつたおかげでゲームが台無しだ。』

荷台にバイクを積んだ大きめのホイール車に乗り、数人の男が豪華な家に向かつて走つていた。運転しているのはリッチーだ。と、リッチーは門の前にステッソ姿の男が立つていてことに気付いた。車の窓から身を乗り出し、男に声をかける。

『おいそこのおっさん、邪魔だからどうしてくれる？』

『……リッチー・プレ斯顿。顧問弁護士のウォルター・コナーズだ。車から降りろ。』

『何で？』

リッチーが問いかける。コナーズと名乗つた男の答えはヤケに冷めていた。

『もう君のじゃない。』

『ふざけるな。俺の車だ。』

リッチーが苦笑して答えるが、コナーズは表情を崩さなかつた。『家にも入れない。』

『何言つてるんだ。よく聞けよ、ここは俺の家だ！』

『正確には、君のお父さんの家だ。出て行つてほしいそうだ。君の事は聞いた。役立たずで、身の程知らずな、怠け者。』

『……当たつてるじゃねえか！ なあハツハツハ！』

『言える。』

すると、リッチーがぴしゃりと言い放つた。

『降りろ。早く車から降りろ…』

彼の友人が全員降りると、コナーズが言葉を掛けた。

『ドライブしながら話そう。』

そう言われて、リッチーはコナーズの車に乗り込んだ。ストームシルバーのセ・ダン車だ。

『お父さんは君に自力でのし上がつて欲しがつてる。』

『つまり、援助は一切無しつて事かよ。』

『冗談じゃない。そんな声でリッチーが答えた。

『まずは、己を知ることだ。』

『なんだつて？』

『辛い時こそ本性が見えてくる。とにかくお父さんは君を一人前にしたいとさ。』

『いまさら冗談じゃないね。俺の欲しいものをすべて『えてきたのは親父だ。』

『確かに都合がよ過ぎるな。だが、お父さんの金だ。彼が渡したくないなら私にはどうしようもない。』

コナーズの言葉は正論だった。リッチーが少し、言葉に詰まつた。『ン…アアッ！ついてねえなッ！』

車が止まり、二人はある駐車場に降りた。と、コナーズが近くを指さす。そこでは、『ハンバーガー 3個で300メセタ』と書かれた看板を手にした男が音楽に乗つて、時折その看板を回しながら通行人に向けていた。

『アレがなんだつていうんだ？』

『明日は我が身かもな。』

コナーズはストレートに言つと、突然話題を変えてきた。

『武術の心得があるとか。』

『女の気を、引けるからな。』

コナーズは少し笑うと、リッチーに言葉を掛けた。

『元の生活にも戻れるかもな。1億メセタも夢じやない。』

『戦えばもらえるのか？』

コナーズは懐から、何かを取り出した。蟹のエンブレムが刻まれたカードデッキだった。『デッキが響くような音を立てて光る。

『スゲえな。これは?』

『君の仕事道具だ。これで取引しよう。』

コナーズは車の窓を向き、額の汚れを払つた。映し出された姿は人間のものではない。

そしてこれこそが、彼が『仮面ライダーインサイザー』として戦う事になつたきっかけだった。

「分かつてるよ。ちょっと、愚痴を言いたかっただけさ。」

そう言つて電話を切ると、リッチーはシャツのポケットからサン

グラスを取り出し、掛けた。

「金は必ず手に入れる。」

どこかのビルの屋上。ウイングナイトの男はそこに立つていた。男はそこで一人、特訓を開始した。空に向かつて拳を振るい、ジャンプして足を払い、長い棒を取り出すと、それで大気を突き、叩く。ひとしきりその動きが終ると、ウイングナイトの男はデッキを取り出し、構えた。

『KAMEN RIDER!』

エミリアは自室でパソコンに向かっていた。先ほど、彼女が出したモンスターに関する質問の回答を確かめるためだ。ちなみにそこにはシズルもいた。

「エミリア、いい加減にしろー。ランチの時間はあと30分しかないんだぞ！」

「ちょっと待つて……あ、回答が来てる。差出人は……ウソお！？」

「クライスじゃん！」

「クライスって…あのクライスか？」

クライスと言うのは、伝説的ハッカーで、ブロガーでもある人間だ。

「『僕も似たような生き物を見たことがある。』…クライスのサイトのアドレスとパスワードよ！」

エミリアが慣れた手付きでキーを叩く。映し出された画面には何か映っていた。

「凄い！モンスターの写真じゃん！」

「僕にはぼやけた親指にしか見えないんだが……」

と、ノックの音がし、アレンが入ってきた。

「……僕は邪魔ものみたいだな。じゃあ一人でランチを取らせてもらうよ。」

シズルはつまらなそうに部屋を出て行つた。

「たつた今失踪事件の情報が入つたの。お父さんの手がかりになるかも。クライスの事は知つてる？」

「ああ、オーディオメーカーの名前だろ？」

エミリアは少し苦笑し、説明した。

「クライスつてのは、伝説的なハッカーでブロガーよ。未確認生物に関する研究でネット上の有名人なの。」

「へえ。」

「モンスターに関する情報をネットで募つてみたら、クライスがこのサイトを教えてくれたの。」

「おー、ちよつと待て。父さんはモンスターにさらわれたってことか？」

「そうだと思ひ。モンスターの田撃情報と同じタイミングで行
方不明者が出てるでしょ。」

と、エミリアはアレンが深刻な表情をしていることに気付いた。

「俺はただ…父さんは家出しただけで…時期に戻つてくると…」

エミリアは口を開いた。今は一人にしておいた方がいいらしい。

「じゃあ、また明日にでも続きを調べるってのは…」

「あ… そうだな。そうしよう。じゃ。」

アレンはメインストリートを歩いていた。それを見ている、不審
な人影にも気付かず。

「…今度こそ1億メセタだ。」

リッチーはズボンの尻ポケットからデッキを取り出し、歩き出しだ。

アレンの頭に例の音が響く。近くの窓を見ると、インサイザーが
こちらに手を伸ばし、手招きしている。

「…ふざけやがつて…」

アレンはデッキを窓にかざし、ベルトを出してデッキを挿し込んだ。

「KAMEN RIDER！」

体に瞬時にアーマーが形成され、アレンの姿をドロゴンナイトへ
と変える。

どこかの廃工場、インサイザーの姿で、リツチーは待ち構えていた。あの特徴のある音が響き、アレンが姿を現す。

「戦う前に教えてくれ。何で俺を狙う？」

「俺が欲しい物を持つてゐるからさ。」

「それは何だ？」

アレンの問いに、リツチーは嘲るように答えた。

「1億メセタだ…！」

「何だつて！？」

もうリツチーは答えなかつた。デッキからカードを抜き、シザースバイザーに差し込む。

『STRIKE VENT』

飛びかかつたリツチーがシザースピンチで切りつける。まともに食らつてよろめいたアレンに、追撃の鋏が振りかざされた。

その一撃を何とかかわして、アレンはカードを抜いた。そして身をひるがえすと、一瞬前までアレンがいた所にあつた木箱がバラバラになつた。リツチーの胴体に蹴りを入れると、アレンは素早く立ちあがつてカードを挿入した。

「そつちがその気なら！」

『GUARD VENT』

「ハアツ！」

リツチーのシザースピンチを、アレンの腕に出現した盾、ドラグシールドが防いだ。

「1億だつて？俺がそんな金持ちに見えるか？」

「確かに、せいぜいバーガーショップの店員だな。」

「……傭兵だつつの。」

「一人につき1億メセタ。お前らクズどもを倒せば報酬がもらえるのさ！」

そう言つてリツチーが再び襲いかかる。次々と打ちこまれる重い攻撃はやがてドラグシールドを弾き飛ばし、アレンの体も捉えた。

「グアアツ！」

アレンがつきたされた鍔に吹き飛ばされ、後ろの木箱に激突して粉々に碎く。

「…ハツハツハ。」

「クッ！」

アレンは素早く後ろに飛びのいて距離を取り、新しいカードを挿入した。

『STRIKE VENT』

ドラグレッダーが飛来し、アレンの腕にその頭を模した手甲の様な武器が装着される。危機感を感じたリツチーは、シザースピンチを外してもう1枚カードを読み込ませる。

『GUARD VENT』

シザースバイザーに中型の盾、シェルディフェンスが召喚される。アレンは思い切り気合いをためると、リツチー目掛けて腕を突き出した。すると、飛来したドラグレッダーがその方向に向けて炎を吐きだした。リツチーはシェルディフェンスで何とか防いだが、思い切り後ろに弾き飛ばされる。

「おわあっ！」

「この辺でやめてくれねえ？お前に聞きたいことがある！」

だが、リツチーはアレンを無視して襲ってきた。と、いきなり飛び込んできたウイングナイトが、両足でリツチーを蹴り飛ばした。

「どわつ！な、何？」

「来てくれたのか…」

ウイングナイトがリツチーに襲いかかる。今度はリツチーが圧倒される番だった。

「よし！」

アレンはそれだけ言つと、ウイングナイトに加勢した。ひとしきり攻撃を打ち込んだところで、リツチーが両手を突き出した。

「ちょっと待て！2対1なんてフェアアじやねえ！不公平だ！」

それだけ吐いて、リツチーは近くの鏡から出て行つた。

「……これから、どうするんだ？」

アレンがウイングナイトに問いかける。

「お前を巻き込みたく無かつたが、仕方がない。まず仮面ライダーとしての戦い方を覚える。」

ウイングナイトはアレンの方を振り返ると、短く言つた。

「…来るか？」

「いきなり来てなんだよ…」

第5話／仮面ライダーインサイザー（後書き）

次回予告

ウイングナイトの訓練を受けることになったアレン、だが手も足も出ず、ひとまず訓練は終わる。そして、彼は鏡の向こうの世界「ベンタラ」についての話を聞くことになるのだった。

次回 仮面ライダー・ドラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 「ベンタラ」

命をかけて、守りたいものがありますか？

キャラ紹介（ネタバレ注意）（前書き）

メインキャラの紹介をします。ネタバレあります。嫌いな方はスルーして下さい。

原作キャラはオリジナル設定が含まれている奴がほとんどです。
ポジションはあえて書きません。

キャラ紹介（ネタバレ注意）

アレン・クラウド（仮面ライダードラゴンナイト 龍騎）

民間軍事会社「リトルウイング」に所属する青年。本作の主人公。出来る事と出来ない事がかなりはつきりしている方。武器の扱いでも、苦手な武器、特にウイップとアックスはまともに使えたためしない。カードゲームマニアという一面も。

自宅でカードデッキを見つけた事をきっかけとして鏡の向こうの世界ベンタラやゼイビックス将軍の事を知り、大切な人が住むグラールを守るために仮面ライダードラゴンナイトとして戦う事を決意。

見た目はPSPのヒューマ男のデフォルトと同じ。

レン（仮面ライダーウイングナイト ナイト）

ベンタラからやってきた戦士。仮面ライダーウイングナイトに変身。無口でクールだが、本当は心優しい性格。

ベンタラ侵略の数少ない生き残りであり、次に狙われているのがグラールである事を突きとめて、ゼイビックスを追つてグラールへとやつてきた。

幼いころに仮面ライダーに選ばれ、それ以来仮面ライダー一筋でやっていた。

エミリア・パーシバル

アレンのパートナー。天真爛漫な性格で、喜怒哀楽ははつきり顔に出る方。今でこそ人並みに仕事はするが昔は超S級のヒートだつた。亜空間研究の中核を担う天才科学者と言つ意外な一面もある。料理の腕は壊滅的。

仮面ライダー やベンタラの事を知り、アレンを出来る限りサポートするために情報を集める。

シズル・ショウ

総合科学企業「インヘルト社」の社長御曹子。エミリア同様天才的な頭脳を持つが得意な分野は少し異なるらしい。一見クールに見えるが、おちよくられると受け流す事が出来ず大きく出てしまう。またムツツリでカナヅチ。

特技はハッキングで、子供の頃いじめっ子の家のパソコンに侵入して内側からを破壊した事があるといううわさもあるが真偽のほどは定かでない。

エミリアやアレンからベンタラの話を聞いているが、全く信じようとしている。

ユート・ウン・ゴンカース（仮面ライダーストライク 王蛇）

モトウブの少数民族「カーシュ族」の出身の少年。純粹で真つすぐな性格で、そのため暴走することもしばしば。少しばかり人の話を聞けない。好物はプリンで、よくエミリアにおごってもらっている。種族はニユーマンだがビーストの血も入っているため体は丈夫。フォトンへの感受性の高さが起因して常人より鋭敏な感覚を持つ。

仮面ライダーストライクのカードデッキを持ってアレン達の前に現れ、協力を申し出る。

ナギサ・アーデルハイト（仮面ライダースティング ライア）

デューマンの少女。アーデルハイトはミドルネームで、名字の予想も大体はつくが違っている場合を考えここでは表記しない。一見しつかり者の印象を与えるが根本的に一般常識が足りず、時折とん

でもない事をやらかす。欠片騒動（仮）において仲間に救われたこともあり、彼らへの思い入れは人一倍強い。

ゼイビアックスにだまされ、他のライダーを倒す事が大切な友達を守ることになると信じ、仮面ライダースティングに変身する。

ユーブロン（変身後の名前は無し オルタナティブ）

別名アドベントマスター。もとはゼイビアックスの部下だったが、ベンタラ侵略作戦に反対して袂を分かつ。ベンタラを守るために力ードデッキやアドベントビーストを開発。必要と判断すれば自ら力ードデッキを使って変身して戦う。ベンタラのライダーを鍛え上げた人物である。現在行方不明で、死んだとも言われている。

ゼイビアックス

グラール外にある惑星「カーシュ」北軍の將軍。戦争で荒廃した母星を再建するためにベンタラの人々を拉致、次なる標的としてグラールを狙う。人間の姿と鎧の様な姿を取るがどちらも仮の姿であり、本当の姿はグレイの様なエイリアン。

クライス

伝説的なハッカーでブロガー。未確認生物に関する研究でネット上の有名人。何故か仮面ライダーに詳しく、コートと接触した事があるらしい。

ルミア・ウェーバー

ガーディアンズ総合調査部所属の少女。英雄の妹という肩書の重さに困りながらも、兄を超えようと努力を重ねる。勝手知った者の前では本来の明るさを出す。

アレンやHミコアに接近し仮面ライダーについて調べたりする
が目的は不明。

第6話 ベンタラ

鏡の向こうの広場、そこに立つ一人の鎧男。お互に向き合っている。

「戦士となつた以上、戦う術を身につける。」

「そんなことより質問に答えてくれ。」

と、突然ウイングナイトがダークバイザーを抜き、居合の要領で切りかかつた。

「何するんだよ！」

「訓練は必要ないか？」

「マジで戦う気かよ！？」

「敵だと思え！」

ウイングナイトがダークバイザーを振りかざし、再び襲いかかる。その腕を抑え、何とか突き出された刃をかわす。しかし、ウイングナイトは膝を突き出し、アレンの鳩尾をきれいにとらえた。

「どうした？ ガードしろ！」

「ヌグウッ！」

アレンはすぐに起き上がり、カードを引き抜いてセットする。

「ちょっと待つてくれよ！」

『 SWORD VENT』

召喚されたドラグソードはアレンの手の中に飛び込み、それを振りかざしてアレンはウイングナイトに斬りかかる。

が、ウイングナイトは落ち着き払つてカードを抜き、ダークバイザーに挿入する。

『 TRICK VENT』

とたん、ウイングナイトが一人に分身する。

「え？ 双子！？」

繰り出されたパンチを腕でそらしたが、次に振り向いたとき、ウイングナイトは三人に増えていた。

「何だ！？三つ子かよ！？」

続けざまに斬撃が叩き込まれる。ドラグソードで何とかそらすと、ウイングナイトがさらに増えていた。4人から5人。6人7人8人…

「何だよ！？」

ウイングナイトがアレンを包囲し、一斉に襲いかかる。流石に8対1では無理があった。次々に剣が閃き、アレンを捉える。

「こんなの汚ねえぞ！」

訓練だからと言つて、ウイングナイトは一切手は抜いていなかつた。

「ぼやぼやするな！」

「ここだ！」

「こっちだ！」

「何をしている！」

二人が一斉に剣を突き出し、アレンがよろめく。

と、後ろからもう一人が飛びかかってきた。何とか剣で受け止めても、後ろに弾き飛ばされて思い切り体勢を崩す。

「敵が一人とは限らない。」

「んなモン分かつてるつづのー！」

『SWORD VENT』

ウイングナイトの手にウイングランサーが飛び込み、それを振りかざして切りかかってきた。

一撃一撃が重過ぎる。例えるなら、アツクスの一撃をダガーで受け止めるようなものだ。こんなものよく振りまわせる。

「クッ…今度はこっちの番だ！」

それだけ言って、アレンはウイングナイトの懷に飛び込んで後ろに押し込んだ。すぐに受け流されるが予想済みだった。ドラグソードを一閃し、ウイングナイトに斬撃を加える。最初の一撃は何とかかすつたが、それからは全てが受け止められる。と、突然ウイングランサーが閃き、ドラグソードが上空に吹っ飛ばされる。それに一瞬氣を取られた隙は見逃されなかった。重い一撃が叩き込まれ、アレ

ンは後ろに思い切り吹っ飛んだ。そこに、ウイングランサーを握ったウイングナイトが歩み寄つて来る。地面に膝を突くアレンを見下ろし、ただ一言、言葉をかける。

「今日はこの位にしておこう。」

どこかの窓。突然表面がざざなみ立ち、二人の人間が出てきた。

アレンとウイングナイトの男だ。

「今のがトレーニング？ 本物の戦いが思いやられる。」

アレンだつて素人ではない。それなりに場数は踏んでいるし腕にも自信はある。しかし、普通の戦いとライダーの戦いは勝手が違う。武器召喚、分身、何でもありだ。何より、男の戦いはあまりにも完璧だつた。

「訓練すりやあいい。」

「訓練つて…でもいつたいなんのために？ そろそろ質問に答えてくれ！」

と、男はアレンの方に向き直り、一歩近づいた。

「こんなはずじゃなかつたが、お前は仮面ライダーになつた。」

「仮面ライダー…？」

聞きなれない単語に、アレンが顔をしかめる。

「仮面ライダーはベンタラの騎士だ。」

「ベンタラ？」

「鏡の向こうの世界だ。ベンタラのライダーからカードデッキが盗まれ、地上のお前や、さつきのインサイザーの手に渡つた。」

「盗まれた…じゃあ返さなきやね。」

アレンが少し冗談交じりの様に言つたが、ウイングナイトは真剣だつた。

「手放すな。他のライダーから身を守るために。」

「他のライダーって…何人いるんだ？」

「お前と俺を入れて…12人だ。」

「12人？と言つ事は、単純に考えると敵は10人と言つ事か？」

「12人！？でも何で俺を狙うんだ！？」

「俺の仲間だと思わてるからさ。」

と、アレンがいらだたしげに口を開いた。

「そうかい。あんたのせいで俺が悪者扱いか。最高だね。」

突然、頭の中に音が響く。忘れようとしても忘れられないあの音だ。

「トレーニングの成果をためそ。」

「ハア、練習試合ってとこか。」

鏡の中から、2台のアドベントサイクルが飛び出す。そこから降りたアレンとウイングナイトは、すぐ近くのビルの非常階段にモンスターが1体いるのに気づいた。あの蜘蛛とは違い、人型だ。二人に気付いたが、モンスターは屋上に向かつて逃げて行つた。

「あそこだ！」

アレンは叫ぶと地面をけつた。信じられない跳躍力で、すぐに屋上にたどりつく。が、そこにモンスターの姿は無い。

「かくれんぼか？」

と、いきなり何者かに押さえつけられ、アレンは近くの鉄格子に叩きつけられた。さつきのモンスター、テラバイターだ。後ろからウイングナイトが斬りかかるが、テラバイターは手に持ったブームランでかわしていく。

「本気で行くぞ。」

『SWORD VENT』

後ろからの斬撃でテラバイターを捉え、正面に回り込んでもう一撃。すぐにウイングナイトも加わり、テラバイターに斬撃を加えるが、持っていたブーメランが閃いて一人を捉え、後ろによろめかせる。

突然、テラバイターがブーメランを投げつけた。かがみこんで何とかかわした一人を、後ろから帰ってきたブーメランが襲った。

「うわあ！」

「ぐッ…」

すぐにテラバイターの拳が叩き込まれ、ウイングナイトはよろめて近くの鉄格子に寄りかかる。

「耳を塞げ！」

ウイングナイトは『デッキから新しいカードを抜き、ダークバイザーに挿入した。

『NASTY EVENT』

飛来したダークウイングが、何やら音波を発している。と、突然アレンを猛烈な不快感が襲つた。

「うっ、うあああ！」

だが、それはテラバイターも同じだった。それどころかアレンより効いている。アレンはその隙にドラッグバイザーをオープンし、ドラグレッダーのイラストが描かれたカードを挿入する。

『ATTACK EVENT』

はじめて聞く電子音声と共にドラグレッダーが飛来し、テラバイターに炎で一撃叩き込んだ。

テラバイターが吹つ飛ばされた隙を狙い、アレンとウイングナイトはそれぞれの紋章の描かれたカードを抜いて召喚機に挿入した。

『FINAL EVENT』

ダークウイングはウイングナイトに合体し、ドラグレッダーは飛びあがつたアレンの周りを舞う。そして、アレンの必殺技『ドラゴンライダーキック』とウイングナイトの『飛翔斬』が炸裂し、テラバイターはバラバラに吹つ飛んで消滅した。

「ハア…ハア…いいチームワークだつたな。」

「仮面ライダーは、あれよりはるかに手強いぞ。」

ドラグレッダーが、空に浮かんでいるテラバイターのエネルギーに向かつて飛び、それを食らった。

「カードについて学べ。覚える事はまだまだある。」

リトルウイング事務所。突然、少女の雄叫びが轟いた。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

と、エミリアが備え付けてあるビジפוןの陰から申し訳なさそうに姿を見せた。

「あ、嘘行メン... じつもお返事はねえや...」

「オフィスで雄叫びか。あまり行儀は良くないな。」

「でもシスル、見てよ」のメーリル。おっさんからよ。『お前が言っていたモンスターの話については目撃情報もそれなりにあるから、まア信じない事もない。そこで、ガーディアンズの奴と共同調査することになった』。つまり、ルミアとよ。』

「ブフッ！？」

ヒミリアは一度、この手の仕事でルミアと一緒にいた事があつた。もう最悪だつた。何故か街中での調査の類になると彼女は少しばかり上から目線になる傾向にあつた。

「ホント最悪だわ… なんでいつこじなーの?」

第6話 ベンタラ（後書き）

次回予告

アレンに「レン」と書いつ名前を明らかにした男は、インサイザーを発見。レンとリッチーの一騎打ちを見守るアレンの目に、予想もしなかつた光景が映る…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 「敗者の宿命」

命をかけて、守りたいものがありますか？

第7話 敗者の宿命（前書き）

今回ばかりはちょっと恥めになりました。これも僕がまとめるのが下手だからです。

第7話 敗者の宿命

「Hミリア、遅いわよ。」

ホルテスシティの広場で、ルミアはいらだたしげに言った。Hミリアの手に握られているのはコーヒーの入ったカミ・カップ。「ゴメン列が長くて…ってかあたしに何やらす！？」

が。

「……お砂糖入つてない。」

ルミアはそれだけ言つと歩み去つていつた。

「ああ……んもう！」

エミリアはいらいらして近くの壁を殴りつけた。深刻なダメージを受けたのは拳だったが。

「いつたい！」

どこかの暗い部屋。鎧の様な姿をした一人の男が、カプセルの様なものから出てくる。正面にあるリングの様なものをぐぐると、その姿はコナーズに変わった。

コナーズはネクタイを直し、着信音が鳴つたビジフォンのスピーカーを入れえる。

「ヤアリッチー。」

「上手くいくとは思えないよコナーズ。」

『そつか？ビルの掃除の仕事なら斡旋してやるぞ。』

「あああ、止めるとは言つてない。ただ、二人の仮面ライダーが相手だなんて知らなかつたんだ。」

リッチーが慌ててさつきの言葉に付け加える。

『賢くやれ、二人を仲違いさせりゃいい。』

と、急にリッチーの顔色が変わった。

「マズイ、後でかけなおす！」

目の前では、彼のホイールバイクがレッカー輸送されようとしていた。

「オイオイオイオイオイオイオイオイ待つてくれ！持つてくなよ。」

しかし、運転手と思しき男は苦笑いしただけで華麗にスルーした。

「頼むよ！俺にはこれしかないんだ！」

「駐車料金を払わないからだ。」

「ちゃんと払つたさ！どうやつて帰りやいい！」

だが、レッカー車は発車した。何とかヘルメットは回収したが、と、彼の視界にはバス停の標識が入った。

「……バスかよ。」

クラシッド6の居住区。そのとある部屋。

「……ソードベント、ストライクベント、ガードベントアタックベントファイナルベント。ハア……いまさら宿題なんて……」

と、例の気配がした。

バスを待つリッチーの頭にも音が響いた。

「……今度こそ1億メセタだ。」

ウイングナイトの男は、一足先に現場についていた。バイクを降り、ヘルメットを脱ぎ、窓の前に歩み寄る。

そこからそう遠くないところへと並んで、エミリアとルミアが太り気味の男と話していた。締められたベルトにスパンやドライバーが刺さっているところをみると、おそらくエンジニアか何かだろう。

「自分でもとても信じられないよ。」

「何を見たか説明してくださいませんか？」

ルミアは男と話し、エミリアは素早くメモを取っている。

「あ……俺はビルの屋上で空調機を修理してたんだ。その機械は光沢があって鏡みたいな金属パネルで囲われてるんだが、そこから糸が出てきたんだ。」

「とすると、板から蜘蛛の糸が出てきたという事ですか。」

と、エミリアの頭に例の音が響く。そして、近くの窓にウイングナイトの男が歩み寄り、カードデッキをかざして変身した。

「…そしたらその糸が俺の体に巻きついて、グイッと引っ張つたんだ。パネルの方に。」

「ちょっと待ってください。板から出てきた糸に体をひっぱられた」と…

「そうだ。」

「待ってください。ちょっと聞いてるのエミリア？」

エミリアは、男が鏡に飛び込むところをじっと見ていたが、ルミアに呼ばれて思わず我に返った。

「え…？あ、うん。鏡が引っ張つたんだよね？」

ルミアは一瞬エミリアの方を見ると、男に向き直った。

「続けて。」

「そしたら、二人組の男がやってきて俺を助けてくれて、それからその内がたつぽが変わったんだ。」

「変わった？」

「変身したんだ。鎧みたいな姿にね。」

「どんな外見だったんですか？」

「蝙蝠みたいだつた。」

「蝙蝠みたいな恰好だつた。」

Hミリアは少し口をはさんだ。

「えつと、つまりコスプレって事?」

「蝙蝠の鎧だ。黒ずくめの。」

「なるほど……」

ウイングナイトが、蜘蛛の足の様な物にはじき出されたが、ダークバイザーを構えてもう一度窓に入つて行つた。

「……あなたいつたい何を見るの!…ぼーっと向ひうを見て、メモも取らずに。それでもプロ!…?」

「あ……『メン。』

ルミアがそつちを見たときも、ウイングナイトはすでにいなかつた。

「失礼しました。以前から注意散漫で。えつと、確認をせて下さる?えつと…まずスパイダーマンが糸を出して、バットマンとロビンが助けてくれた、と。」

「え、いやそれはちょっと違う…」

男は訂正しようとしたが、確かにルミアの様に解釈するのが普通だろう。

「あ、そうあなた、今度のコミック大会に出てみたりびりです?…ルミアが失礼極まりない発言をする。

「コミック大会!…?」

「いえほんの冗談です。お時間取らせてました。Hミリア行くわよ。」

「ちょっとルミア、今のは失礼すぎるでしょ!…が!」

「私くらいキャラア積んでれば、偽物はすぐ見分けられるのよ。あの男だつてそう。周りから注目されたいだけよ。」

「なるほど……」

とは言つたものの、口調は明らかに言葉と正反対だ。

「あの、あたし、もうちょっと残つて調査していい?」

「...調査担当者は私よ。あなたは書記兼コーヒー係。次はお砂糖入

れなさいよ。それじゃ。」

「これだから、ルミアとの手の仕事をするのは嫌なのだ。

「.....んあああ！」

ルミアが去つていくと、ヒミコアはいらいらで思わず近くの柱に頭突きしていた。その後でかいたんこぶをこじらえたのは言つまでもない。

窓からウイングナイトの男が出てきたのを、駆け付けたアレンは見た。

「おい、何があつたんだ? またモンスターか?」

「片づけた。」

「.....なあいい加減にしろよ! 僕には何も教えてくれないのか? 例えばほら.....名前とか。」

と、ウイングナイトの男は掛けていたサングラスを外した。

「.....レンだ。名前はレン。仮面ライダーウイングナイトだ。」

「そうだそこなくつちゃ!」

突然、レンと名乗ったウイングナイトの男はアレンを壁に押し付け、自分もその横に身を隠した。

「シッ。」

「何だ?」

「仮面ライダーインサイザーだ。」

二人がさつきまでいた場所を、リッチーが上から見ていた。今は壁で死角になつてるので、リッチーは一人を見落とした。

「誰だつて?あ...蟹の男か! アイツが? でもどうしてわかるん

だ？」

「……俺には分かる。」

レンは分かつた様な分からないような答えをした。

リッチーが窓をのぞきこみ、別の所に移動しようとすると、行く手にアレンが立っていた。

「……また闘る気か？」

「どうかな。」

「じゃ闘るか。」

と、後ろからレンが歩み寄ってきた。

「オイオイまたお友達かよ。永遠のお友達ってか？一人じゃ怖くて戦えないか。」

「戦えるさ。」

と、レンが言葉をかけた。

「引っ込んでる。」

「何？おい話が違う。」

レンはリッチーに歩み寄り、テッキの入ったポケットに手を入れた。

「俺とお前で、一騎打ちだ。」

「上等だ。」

と、リッチーは突然レンに言葉をかけた。

「ああちよつと、そこに何かついてる。ああそこそこ。」

リッチーの言葉に、レンはジャケットの肩を見た。

「おつとメセタマークか。がっぽり頂くぜ。」

その言葉は事実上の引き金だった。リッチーとレンの両者がそこであつた窓を向き、テッキを突き出した。

「「KAMEN RIDER！」」

二人のデッキがバツカルに挿入され、ウイングナイトとインサイザーのアーマーが体を覆う。変身が完了すると、二人は窓に飛び込んだ。

ベンタラにある、どこかの広場。リッチーとレンはお互いに向き合つた。

「カアツコイイ。1億メセタにふさわしいな。」

それを聞くと、レンはダークバイザーを抜いて飛びかかった。リッチーもシザースバイザーを構えて応戦する。

刃と鋏の応酬。ぶつかり合う一つの武器が火花を散らす。鍔迫り合いの様な状態になつたところで、リッチーがレンの胸に蹴りを入れ、一瞬ひるんだすきに後ろから抑え込んだ。

「さあて、1億メセタ頂くぞお！」

レンはデッキからカードを抜き、ダークバイザーに^{ベンタイン}挿入する。

『NASTY VENT』

ダークウイングが放つた音波をまともに受け、リッチーは耳を抑えてレンから離れ、うめいた。

「うわあつ！ ウああおおお……ちつ！」

軽く舌打ちすると、ダークバイザーを構えたレンと闘合を取り、そのまま横に走り出した。

地面に転がつて起き上ると、レンはダークバイザーを開いてカードを抜いた。

『WORD VENT』

ウイングランサーがレンの手に飛び込むと、それを構えて一閃し、リッチーの体に斬撃を見舞う。

「おわあつ！」

壁に叩きつけられ落^{ベンタイン}したリッチーは、すぐに立ち上がってシザースバイザーにカードを挿入する。

『STRIKE VENT』

シザースピンチが腕に装着されると、リッチーはレンに鍔を突き出す。刀身でかわした連の後ろに回り込み、さらに一撃。そして腕を突き出し、ウイングランサーを挟み込んだ。

「お前のおかげで金持ちになれりゃぜ。」

「クウツ！」

レンはダークバイザーを抜いてリッチーの胴を払い、立ちあがつて蝙蝠の紋章が刻まれたカードを挿入した。

『FINAL VENT』

それを見て、リッチーも蟹の紋章のカードを挿入した。

『FINAL VENT』

飛び上がったレンの背中にダークウイングが合体し、地面から生えるように出てきたボルキヤンサーが自分の鍔を足場にしてリッチーをバレー・ボールの要領で打ち上げる。レンはそのままウイングランサーを構えて飛翔斬の体勢に入り、リッチーは体を丸めて飛び上がり、必殺のスピンドラタック、シザースタタックで迎え撃つた。

「おおおおおお……！」

「だりやああああ……！」

ぶつかり合つた二人から爆炎が発生する。着地成功したのはリッチーだった。レンは地面に這いつくばり、ダメージでうめき声を漏らす。

と、不意に炭酸水が泡立つような音が聞こえた。

「何だ？」

振り返つたリッチーの目には、波打つた水面に反射した光の様な模様を浮かび上がらせ、粒子化して少しずつ消えていくボルキヤンサーが映っていた。すぐに消滅は加速し、頭から消えて行つて完全に消える。そして、リッチーの身にも同じ事が起こつていた。窓からそれを見ていたアレンが、眉間にしわを寄せてそれを見る。

「いったい、何が？ おいちよつと待て、まだ終わつてない！ 何だこの……俺はまだ戦える！ ……どうなつてんだ！ ？ なあ……おい……頼むよ……」

しかし、リツチーの悲痛な叫びは届かなかつた。

「パパアアア！！畜生！こんなのは、嫌だね！うわアアアアアチクシ
ヨオオオオオオ！！！！助けてくれエエエエエエ！！！！！」

そして、リツチーの体は完全に粒子化し、虚空に消えて行つた。
……。

レンが窓から出でてくる。アレンは急いで彼を追つた。

「なあ、あいつはどうなつたんだ！？」

「アイツはベントされた。」

「ベント？」

「転送されたんだ。一つの世界の狭間、アドベント空間に。仮面ラ

イダーが敗れるとそうなる。」

「転送つて、いつ戻れるんだ？」

「戻れない。」

レンの答えは簡潔だつた。残酷に思えるほどに。

「……だから戦いには負けられない！」

それだけ言うと、レンはバイクで走り去つていた。

「あ、オイちょっと待てよ！」

そう言つて走り去つていくレンを、赤いバイクに乗つた男が見て
いた……。

レンはビルの屋上に座り、回収したインサイザーのデッキを見て

いた。かつての仲間のインサイザーに、想いを馳せながら。

アレンは、自室で頭を抱えていた。リッチャーが恐怖に叫び、助けを求めて消滅する姿が、彼の頭にフラッシュバックする。

アイツはベントされた

戻れない

「ベント……」

アレンはそつぬき、デッキを握りしめた。

「……もう嫌だ……」

アレンはデッキを引き出しに放り込み、ベッドに座りこんだ。と、またもや例の音場響く。そして、カードデッキが無視するなとばかりに光を放つ。

「……これで、最後だからな……」

近くの窓の中を走り抜けるアドベントサイクルを、赤いバイクに乗った男が見ていた。男はバッファローの紋章が刻まれたカードデッキを取り出し、窓にかざす。緑の電光が走り、ベルトを形成し、そして……

『KAMEN RIDER!』

第7話 敗者の宿命（後書き）

次回予告

ベントされる事する事に恐怖を感じ、戦いから降りようとアレン。しかし、契約が一生涯続く事を聞かされる。一方ベンタラの要塞では、新たな仮面ライダーがアレン達を監視していた。次回「仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士」「二つの力」命をかけて、守りたいものがありますか？

ライダーデータ紹介（前書き）

ここまで登場した3人のライダーのデータを一気に紹介します。APやGPは龍騎の公式HPが参考です。武器や技以外のカードのステータスはトン数に換算しません。

ライダーデータ紹介

仮面ライダー「ドラゴンナイト」

変身者：アレン・クラウド　日本名：龍騎

ベンタラで開発された1-2の仮面ライダーのうち一つで、格闘戦を主体とするバランスタイプ。アドベントビーストは無双龍ドラグレッダー。特殊能力系カードは一切保有していないが基本性能は良く扱いやすいため、使いこなせば無類の戦闘能力を發揮する。召喚機は左腕に装備された手甲『ドラグバイザー』。名前は『龍騎』をそのまま英訳したもの。

・ソードベント AP:2000 (100t)

ドラグレッダーの尻尾を模した青龍刀『ドラグソード』を召喚。固有の技『龍破斬』を持つが劇中未使用。

・ストライクベント AP:2000 (100t)

ドラグレッダーの頭部を模した手甲状の武器『ドラグクローラー』を召喚。そのまま打撃武器として使用するだけでなく、指示した方向へドラグレッダーに炎を吐かせる『ドラグクローファイア』も使用可能。ちなみにこの技は『仮面ライダーディケイド』において、死なないはずのアンデッドを一撃で爆殺した。他にも『衝空突破』なる技を持つが劇中未使用。

ガードベント GP:2000

ドラグレッダーの腹を模した2枚組の盾『ドラグシールド』を召喚。肩に取り付けて使う事も出来るため、他の武器と併用も可能。固有の防御技『竜巻防御』を持つが劇中未使用。

・アタックベント

AP:5000

ドラグレッダーを召喚。火炎放射を行わせた後ファイナルベントにつなげる事が多い。

- ・ファイナルベント AP : 6000 (300t)
『ドラゴンライダーキック』。中国拳法の様な動きを取った後地面を蹴つて飛びあがつたドラゴンナイトの周りをドラグレッダーが飛び、ドラグレッダーの炎に押される形でドラゴンナイトが必殺の飛び蹴りを見舞う。たいていのモンスターならこの一撃で粉碎できる。

ブランク体

アドベントビーストと契約していない状態のドラゴンナイト。正確にはドラゴンナイトではない。ドラグレッダー意外と契約する事も一応は可能。未契約状態のため戦闘能力は悲惨なほど低い。召喚機はガントレットタイプの『ライドバイザー』。資料によつては『ブランクバイザー』と呼称されている。

ソードベント AP : 800 (40t)

細身の剣『ライドソード』を召喚。資料によつては『ブランクソード』と呼称されている。斬りつけただけですぐ折れるほどもろいが本来この設定は台本に無く、撮影中に小道具が折れた際スーツアクターがアドリブで『折れた！？』とセリフを発したことがきっかけとなつてている。ちなみにこのシーンは新規撮影ではなく龍騎の流用フィルム。

ガードベント GP : 不明

『ライドシールド』なる盾を召喚。性能は不明だが、おそらく中級以上のモンスターの攻撃を1回受けただけで壊れてしまうだろう。

仮面ライダーウイングナイト

変身者：レン 日本名：ナイト

ベンタラで開発された1-2の仮面ライダーのうちの一つで、ドラゴンナイトよりも接近戦に特化したタイプで、使いこなすにはある程度の熟練が必要。アドベントビーストは闇の翼『ダークウイング』。やや防御面に不十分なところはあるが、身軽さと、他のライダーには無いタイプの特殊能力がウリ。召喚機はレイピア型の『ダークバイザー』で、これをそのまま武器として使う事もできる。名前の由来は、『ナイト』の部分を残しておきたかったためこの様になつたのではないかと思われる。

- ・ソードベント 2000AP (100t)
ダークウイングの尾を模した槍『ウイングランサー』を召喚。ナックルガードが付いており、簡単な盾にもなる。

・ガードベント 3000GP

ダークウイングが飛来して背中に合体し、黒いマント『ウイングウォール』に変化。マントなため実際の防御力は絶望的だが、アタックベントで召喚したダークウイングと合体して得られる飛行能力も一応は使用可能。

・トリックベント 1000AP

最大8人に分身する『シャドーリュージョン』を発動。分身したウイングナイトはそれぞれアドベントカードを使用可能。ただし一定のダメージを受けると分身は消滅する。

・ナスティベント 1000AP

ダークウイングが敵の生理的に最も嫌う周波数の音波を放出しながら飛来、敵を撹乱する。ウイングナイト自身は影響を受けない。

ちなみに『ナスティ』という単語は『嫌な、不快な』と言つ意味。

- ・アタックベント 4000AP
ダークウイングを召喚する。ダークウイングは背中に合体してマントにし、飛行能力を得る事が可能。

- ・ファイナルベント 5000AP (250t)

『飛翔斬』。助走をつけて飛び上がったウイングナイトの背中にダークウイングが合体してマントに変形。ウイングランサーを構え、マントが体に巻きついた漆黒のドリルの様な姿で敵に突っ込む。

仮面ライダーインサイザー

変身者：リツチー・プレストン 日本名：シザース

ベンタラで開発された12のライダーのうちの一つで、防御力に特化した設計。アドベントビーストは蟹型の『ボルキヤンサー』。所有力ードは少なく基本スペック的にもほかのライダーにやや劣るが防御力は凄まじく、死なないアンデッドを一撃で爆殺したドラグクローファイアーをただのガードベントで跳ね返すという驚異の芸当を披露。ボルキヤンサーが人型であるため、アタックベントを使用しての挟み打ちが得意。召喚機は左腕に装備された鉄型の『シザースバイザー』。そのまま振り回して武器とすることも多い。名前の意味を間違えられやすいが、『挟み込み』からきている。

- ・ストライクベント 1000AP (50t)

ボルキヤンサーの腕を模した巨大力二バサミ『シザースピンチ』を召喚。右腕に装着して使用する。他の武器に比べてAPは低いが、ドラゴンナイトの体を一撃で弾き飛ばす威力を見せる。トン数に換算すれば、仮面ライダー・カブトハイパー・フォームの『マキシマムハ

イパーサイクロン』と同じ威力。

・ガードベント 2000GP

ボルキヤンサーの背中の甲殻を模した盾『シェルディフェンス』を召喚、シザースバイザーに合体させて使用。絶対に死なないはずのアンデッドを一撃で爆殺したドラグクローファイアーチを弾いた。日本の『龍騎』では、仮面ライダー王蛇のファイナルベントを防いだものの、連續攻撃で弾かれ攻撃を凌ぎきれなかつた。

・アタックベント 3000AP

ボルキヤンサーを召喚。

・ファイナルベント 4000AP (200t)

『シザースアタック』。地面に出現した鏡状のスクリーンからボルキヤンサーが現れ、その鋏をステップにして飛び上がり必殺のスピングアタックを叩き込む。ウイングナイトの飛翔斬を技そのものではない、いわゆる『ライダージャンプ』で圧倒したものの、AP的に負けていたためベントされる事となつた。全ファイナルベントの中で一番威力が低いが、トン数に換算すれば仮面ライダー キバエンペラーフォームの必殺技『エンペラームーンブレイク』の150tを凌駕。ただし、最強と名高い仮面ライダーラスのソードベントにAPを抜かれてしまつてゐる。

第8話 一つの力（前書き）

第5話の展開をほぼ丸ツボ再構成しました。

第8話 一つの力

ベンタラにある電車。いきなり突っ込んできたアドベントサイクルが、そこにいたモンスター、ゼノバイターを撥ね飛ばした。どこかの駐車場に飛んで行つたゼノバイターを追いかけてアドベントサイクルを走らせ、ベルト横の固定具を外して車両から降りたのはアレン。

アレンが構えた瞬間、ゼノバイターはいきなり持つっていたブーメランを投げた。アレンは何とかかわしたかに思えたが、後ろから帰ってきたブーメランが背中をかすめる。

「うわあっ！」

ゼノバイターがもう一度ブーメランを投げる。アレンはそれをかわして上のフロアに飛び上がり、デッキからカードを抜いた。

『 SWORD VENT』

が、やってきたドラグソードはゼノバイターのブーメランに弾かれた。

「……は？ オイちょっと待てよ！」

が、ゼノバイターは容赦なく襲いかかってきた。ブーメランを剣の様に振り回すが、所詮は力頼みだった。繰り出される斬撃を交わし、腕を掴んで抑え込むとドロップキックを見舞つて吹っ飛ばす。

「見てるよ！」

『 STRIKE VENT』

ドラグクローラはやはり弾き飛ばされたが、計算済みだった。素早く横に転がり、ドラグソードを回収する。

「ハハッ、やると思つたぜ。」

武器さえ手に入ればこちらの物だった。続けざまに斬撃を叩き込まれたゼノバイターの体がよろめく。

が、アレンは気付かなかつた。バッファローのカードデッキを腰に取り付け、銃を下げる窓の中からじつと見ていたライダーの姿に

繰り出されたジャンプ斬りが、ゼノバイターのブームランをへし折る。

「どうだ？ 参ったか！」

しかし、ゼノバイターは一瞬周囲を見ると、素早く上に飛び上がりつた。アレンはすぐに後を追つたが、既に其処にゼノバイターの姿は無かつた。

「オイ！ ……逃げられた！」

それから少しして、窓からバッファローのライダー　トルクが現れ、変身を解いた。と、そこに黒いコートを着た男　リッチーにコナーズと名乗っていたあの男　が出てきた。

「何をぐずぐずしている？ 私の計画にはアレンが必要だ。」
「下調べの最中ですよ。焦りは禁物です。」

トルクはヤケに落ちていた。

「時間をかけ過ぎるのも考え方のだがな。」

「ご安心を。」

そう言ったトルクの声は、自信に満ちていた。

「じゃあ君を助けたのが仮面の男と言つて訳か？ 話が出来過ぎじゃないか。」

シズルとエミリアが、リトルウイングの事務所で話していた。

「でも本当の事なのよ。そして、目の前で格好が変わったの。着替えじやなくて、変身よ。そいつとアレンは仮面ライダー。」

「仮面…なんだって？ どういう事だ？」

「あたしにもよく分からぬ。まるで鎧を着たスーパーヒーローよ。鏡を通つて表れて、モンスターと戦うの。」

「エミリア、君の趣味はもつとましかと思っていたが……」

「これはあたしの体験談よ。ホントの話！」

「そんなの信じられるか！」

「その時だつた。来訪者が来たのはアレンだつた。

「よお。あ、今話せるか？」

「あ、うん。奥に行こい。」

「どこかの要塞の司令室。コートの男がカプセルの様なものから出てきて手を一回打ち鳴らす。

「やあ。おはようドリュー君。調子はどうかな？」

「ドリュー」と呼ばれたトルクの男がそれにこたえる。

「実を語つと将軍、あなたの計画ある部分が、少し理解できません。

「どの部分かね？私は荒廃した母星の再建に使うグラール人を拉致する。そして君は、グラールの王になる。」

将軍と呼ばれた「コートの男」が問う。ドリューの答えは早かつた。「俺が理解できないのは、誘拐の方法です。今の様に一人ずつでは、グラールの王に、すぐになれそうにない。」

「ああ、その点は心配ない。今にテレポートシステムを使って、全人類をいっぺんに拉致出来るようになる。そのためには、人類のDNAサンプルが必要なんだよ。」

ドリューは今一つ理解が出来ていなかった。顔に書いてある。

「いい物を見せよう。」

そう言つて、将軍は田の前の画面に手をかざした。と、ニユーティズの市街地が映し出される。そこでは、男が一人歩いていた。画面上で、その男の色々な身体的なデータが映し出される。

「見たまえ、私は時間を無駄にしない。君と違い私はサンプルを集め続けている。じんるいのDNAのね。ターゲットが見つかつたら、手下が誘拐してくる。」

画面に映し出された男の背後に、いきなりゼノバイターが現れた。「人類のDNAパターンを解析し、転送装置とのデータリンクを完成すれば、あとはボタン一つで全人類が私の物だ。」

と、将軍はドリューがけげんそうな表情をしているのに気づいた。「…まさか、いまさら良心の呵責など感じているのではあるまいな？」

が、ドリューはすぐに元の表情に戻った。

「いえ、どちらに住むか悩んでたんですよ。支天閣か、それともホワイトハウスか。」

彼の顔を見れば分かる。完全にドロドロズブズブの欲望まみれだ。

リトルウイングでは、アレンがさつきのレンの戦いを説明していた。リッチーの目的、そして、リッチーの哀れな末路を。

「モンスターは倒さなきやいけないけど、インサイザーは人間だつた。嫌な奴だつたけど彼は人間さ！」

「で、結局彼はどうなったの？」

「……ベントされた。二つの世界の間にある異次元に、飛ばされたんだつてさ。ライダーが負けたらそうなるらしくて、一回ベントされたら、もう戻れない。」

「じゃあ、あんたが負けたら、おんなじことになるの？」

それに答えたアレンの声からは、苦悩がありありと読み取れた。

「俺が勝つたら相手がそつなるんだ！…どつちも嫌だ…」

「アレン、もうかかわらないで。」

「分かつてる。」

と、不意に来訪者の知らせがあつた。
やつてきたのはレンだつた。

「アレン、話がある。」

「あ、ああ。」

アレンとレンは、少し奥まつた物陰に移動した。

「さつきの事なんだが、俺も、ライダーをベントしたのは初めてだつたんだ。」

「その事なんだけど、俺はもう降つるよ。ベントされたくないし、
するのも嫌だ。…『メン。』

が、レンはデッキを置いて立ち去りつとしたアレンを引きとめた。
「そのデッキはもうお前にしか使えない。モンスターとの契約は永
遠に続く。カードデッキが無効になるのは、お前が負けた時。」

「……ベントされた時か。クッそ、何なんだよ、何で父さんは俺を！？」

「父さん？」

「何でもない。」

と、頭に音が響く。モンスターが出たらしい。

「俺は行く。来れるか？」

「あ、ああ……」

海沿いの廃工場、大きな姿見の前に立っていたゼノバイターに向かって、2台のホイールバイクが走ってきた。ゼノバイターは鏡に飛び込み、レンはそれを放つていた。

「何で逃がしたんだ？」

レンは、アレンの問いに、メットの風防を外して答えた。

「新しい技を教えてやる。ついでこい。」

そう言って、レンはデッキをかざし、ベルトに挿入した。

「KAMEN RIDER！」

そして、スロットルを全開にして鏡に飛び込んだ。

「バイクでもはいれるのか。……よし、俺も！」

アレンもカードデッキをかざし、掛け声を張り上げる。

「KAMEN RIDER！」

ベンタラとグラールを隔てる空間、ディメンジョンホール。そこを走るレンが変身すると、乗っているホイールバイクも専用マシン、ウイングサイクルへと変わる。そして、アレンにも同じ事が起り、バイクの色が変わり、形が変わり、専用のドラグサイクルへと変化した。

「悪くないだろ？」

「スッゲエ、ライダーってこんな力もあるのか。」

「行くぞ。」

アレンとレンは前方にゼノバイターとその部下のレッドミーランを確認した。そして、相手もこちらに気付く。

ゼノバイターが突撃命令を出し、そして一人のライダーがバイクを走らせたのを、将軍とドリューが鏡の向こうからじっと見ていた。

レッドミーランは一斉に襲いかかつたが、生身でバイクに立ち向かうなど、倒してくれと言つてはいるようなものだ。早速2体がアレンに撥ねられ、後ろに盛大に吹っ飛ぶ。

レンは完全に慣れている様子だった。ジャックナイフの要領で車体を回転させ、周りから襲い来るレッドミーランを撥ねる。

あつという間に6体ほどが消滅した。

と、いきなり飛んできたブームランが一人を叩き落とした。

「おわあつ！」

やはりゼノバイターだった。

「一手に分かれるぞ。」

「ああ。」

レンはダークバイザーを引き抜き、構えて走り出した。

「行くぞ！』

「了解！」

『SWORD VENT』

アレンはドラグソード、レンはダークバイザーを構えて走り出していった。

「いつまでもぐずぐずしている聞か？彼らに手柄を取られたくながるう？」

将軍が口を開いた。

「…御冗談を。あいつらもうすぐ全滅ですよ。」

「あんなにいっぱいいるのにか？」

とはいえ、将軍の声の様子は言葉とは異なっていた。

「時間の問題ですよ。」

アレンはと言えば、そんな二人になど気付かず、レッドミニオンの相手をしていた。RIDERの相手をした経験があれば、レッドミニオンなど大した相手ではなかつた。ドラグソードを振りかざし、襲い来る雑魚共を次々と斬り伏せて行く。

「大丈夫か？」

「絶好調だよ！」

と、ゼノバイターがブーメランを振りかざして襲つてきた。が、すぐに一つの剣がゼノバイターの体を捉える。レッドミニオンに比べれば多少は歯ごたえはあるが、それでも二人なら大した相手ではなかつた。

ジャンプ斬りをかわされ、ゼノバイターが地面に倒れこむ。二人はその隙を見逃さなかつた。素早くカードを抜き、それぞれの召喚機に^{ペントイン}挿入する。

『FINAL VENT』

ゼノバイターは背を向けて逃げ出そつとしたが、2発のファイナルベントは外れなかつた。ゼノバイターは粉々に吹つ飛び、爆炎の中でアレンとレンが立ちあがつた。

「やつたな。行くぞ。」

「おう。」

それだけ言葉を交わすと、一人はその場を後にした。

「厄介なコンビが誕生してしまったようだな。」

と、ドリューが将軍に進言した。

「将軍、俺に任せてくれさい。必ず奴らを引き離します。」

「出来るかな？」

「俺に2匹くだされば必ず。」

「……いいだろ？。」

と、将軍は部屋の壁の方に手をかざした。すると、何も無かつた空間に、シマウマのモンスター ゼブラスカル・アイアンとゼブラスカル・ブロンズが現れた。

「流石です。」

そういうで、ドリューはその場を去った。将軍はそれを見届けてから、ほそりと言った。

「……ペテン師め。」

アレンとレンが出てきた。アレンが笑顔で声をかける。

「やつたな。チームワークだよな。」

「ああ。」

と、妙な気配がした。今までのモンスター出現とは違う気配だ。近くの鏡を見たレンが、突如そこに歩み寄った。

「…ゼイビアックス！？」

アレンの目には、一瞬だけ、黒い、鎧の様な姿が映った。が、次の瞬間にはその姿は消えていた。

「どうしたんだ？」

「向こうからブロックされた。」

レンは自分のバイクの近くで立ち止まり、近づいてくるアレンを待つた。

「今のは誰？」

「アイツはゼイビアックス将軍、ベンタラを滅ぼした奴だ。」

「滅ぼしたって、どういう事！？」

レンは、話し始めた。

「ゼイビアックスはエイリアンだ。仮面ライダーは皆もともと奴と戦っていた。だが、俺達の仲間のライダーのうち一人、ストライクと言う奴が裏切った。そしてその後、もう一人も。」

「裏切った！？」

「お前の前のドラゴンナイトだ。そいつらが不意打ちして次々とカードデッキを奪つたんだ。ベンタラ側に残つた10人のうち、俺以外の全員がベントされた。ゼイビアックスは次にグラールを狙つている。奪つたカードデッキで仮面ライダー軍団を作り出している。だから力を貸してほしい。」

レンの言葉を聞いていると、アレンの脳裏には、再びリッチーの最後がフラッシュバックした。

「…ベントするんだな。」

「そうだ、やるしかない。このグラールまで滅ぼしたくない。」

「…でも俺は、父さんを見つけたいだけなんだ。1年前から行方不明のな。」

レンは、アレンが取り出したビラを見た。

「…分かるよ。俺も大切な人を失つた。」

「…レンも大切な人を失つたのか…」

アレンはきつと顔を上げた。

「俺もやるよ。こんな思いをするのは俺だけでいい。大切な人に、そんな思いさせたくない。一緒に仮面ライダーと戦うよ。」

「ありがとう。一人なら、きっとできる。」

二人は、しっかりとお互いの手を握った。そして、それぞれのマシンに跨る。

「行こう。世界を救うぞ。」

「オイオイ、そりや俺のセリフだつづーの。」

アレンが笑いながら返した。

「早い者勝ちだ。」

2人の戦士は、バイクで走りだした。この絆が、変わらぬものと信じて……

第8話 一つの力（後書き）

次回予告

レンと共に、ゼイビアックスと戦う事を誓ったアレン。しかし、彼の目の前に現れたドリューは、アレンに、レンがゼイビアックスの手下だと告げるのだった…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 「仮面ライダートルク」

命をかけて、守りたいものがありますか？

第9話 仮面ライダートルク（前書き）

ウラ「おやじめく僕の出番だね。」

モモ「お前じやなくてトルクな。」

第9話 仮面ライダートルク

レンは、リトルウイング宿舎のアレンの部屋にいた。彼の机に置いてある、バイクのパーツを一つ持ち上げ、少し見てみる。アレンは、冷蔵庫からペット・ボトルの水を出し、レンに手渡した。

「なあ……ストライクと前のドラゴンナイトは、何でゼイビックス側に？」

レンはアレンから水を受け取り、答えた。

「ストライク……奴は勝ちにこだわる奴だった。アイツが裏切った時点での、俺達のリーダーはいなくなつて、敗色が少しづつ出てきたんだ。たぶん、そのせいだ。ドラゴンナイトは……俺も知りたい。」

「とにかく、その前のドラゴンナイトのせいであなたを信用できなかつたわけか。」

「お前はあいつとは違うのにな。」

アレンは少しばかり見せた。とその直後、あの気配が頭をよぎつた。アレンは部屋を出ようとしたが、レンが止めた。

「待て。」

そう言って、アレンを洗面所の鏡の前にいざなつた。

「こっちの方が近い。」

アレンとレンはデッキを構えた。ほどばよじつた電光がベルトを作る。

「「K A M E N R I D E R ! 」」

デッキをスライド挿入し、変身した二人はすぐにその鏡に飛び込むだ。

「コードデイズにある、海沿いの工場、レッドミニオン数体を追つて、一人のライダーがやってきた。

「向こうを頼む、俺はこっちだ。」

「分かつた！」

アレンとレンは二手に分かれ、レッドミニオンを追つていった。アレンが追つているレッドミニオンは、少し開けたところまで逃げると、アレンに向き直った。アレンは素早くジャンプして2体の後ろに回り込み、素早く体勢を整えて拳を見舞つた。そのレッドミニオンがよろめくと、もう1体にサイドキックを叩き込む。続けてもう一撃。と、さつきパンチを見舞つた奴が、後ろから襲いかかってきた。ドロップキックをまともに食らい、アレンが体勢を崩した隙に、2体が飛びかかってきた。アレンはそのうち1体を捕まるど、もう1体の拳の盾にした。が、パンチを喰らつて後ろにがくんと倒れたレッドミニオンの首に顔をぶつけ、アレンの後頭部が後ろのコントナの角に衝突する。

「いってえ！」

素早く相手に向き直り、回し蹴りを見舞う。

と、突然飛んできたブーメランが、アレンの背中をまともにとらえた。そこを見ると、シマウマのモンスター、ゼブラスカル・アイアンがいなないていた。

「お前、覚悟しろよ。」

一方レンは、入り組んだ道に逃げ込んだレッドミニオンを追つていた。敵は巨大手裏剣を装備したものが1体、丸腰が1体。コントナの陰からいきなり出てきたレンが、レッドミニオンのうち1体に素早く拳を叩き込む。反対側から大きな手裏剣を構えて迫つてきたレッドミニオンの攻撃を交わして背中に蹴りを叩き込み、もう1体に勢いをつけた右ストレートを見舞つて吹っ飛ばす。手裏剣もちが武器を構えて連に向き直り、レンも素早く構えた。

突き出された手裏剣をダークバイザーで素早くかわす。レンの斬撃を、どうやら指揮官クラスだったらしいそのレッドミニオンは手

裏剣でことごとく防いだが、やがて武器を上に吹つ飛ばされる。が、素早く落ちてきた武器を構え、レンに斬撃を加える。レンもそのレッドミニオンに負けない巧みさでせばしていく。と、反対側から丸腰の方が飛びかかってきた。レンは素早く身を翻し、投げつけられた手裏剣をかわして丸腰の方に当てる。その丸腰の方が消滅し、ロントナの上に飛び上がった武器持ちに蹴りを見舞つて地面に叩きつけ、消滅させると素早く駆け出して行つた。

資材置き場と思しき場所。ゼブラスカル・アイアンがいなないでいたのをアレンは見ていた。

「待つてろ！」

アレンはジャンプして殴るつとしたが、ゼブラスカル・アイアンが突き出した拳は空中でかわすすべてのないアレンの体をまともにとらえ、地面に叩きつけた。

「のわあ！」

容赦なく、ゼブラスカル・アイアンが襲いかかる。起き上つた直後にキックを見舞われ、アレンは地面に転がされた。再び迫つてきたゼブラスカル・アイアンにアレンは飛びかかり、そのままヘッドバッドを見舞つた。ゼebraスカル・アイアンは体勢をかなり崩したが、アレンの頭もそれなりにダメージを喰らつた。

「うわあっ！ いつてえ……頭突きは攻撃に向かないのね……」

すぐに繰り出された攻撃を素早くかわして拳を叩きつけ、ドロップキックを見舞つてゼebraスカル・アイアンの体を後ろに吹つ飛ばす。続いてデッキからカードを抜き、ドラグバイザーに挿入した。

『STRIKE VENT』

「はああ……うああ！」

ゼebraスカル・アイアンは体を縞模様に沿つて別れさせ、ダメー

ジを軽減したものの、やはりドラグクローファイアの直撃を受けてただで済む訳はなかつた。

「ハア、びっくりしたろ？」

と、その光景を見ていたライダーがいた。

緑のスーツ。戦車を彷彿とさせるアーマー。メカニカルなフェイスパーツ。そしてデッキには緑のデッキ。

ゼブラスカル・アイアン^(ベントイ)がよろめきながら立ち上がる。アレンはカードを抜き、挿入した。

『FINAL VENT』

咆哮を上げながらドラグレッダーが飛来し、アレンが宙に飛び上がつてゼブラスカル・アイアンに必殺の飛び蹴りを叩き込んだ。

「だりやあああああああああああああ！」

それをまともに食らつたゼブラスカル・アイアンは粉々に爆散し、アレンは息を突きながら立ち上がつた。

「ハア…ハア…しつこい奴め…ハア…」

と。

チュイイイイイイン チュドオン！

ものすごい音とともにアレンの後ろが爆発した。爆風を喰らつて倒れたアレンに、さらにもう1発叩き込まれる。

思わず見やつたアレンは、緑の、重戦車の様なライダーがいるのを見た。そう、トルク ドリューである。両手で構えた大型のキヤノン砲から、さらに追撃の砲弾が叩き込まれる。

「うわあっ！…別の仮面ライダー！？」

ドリューはキヤノン砲を捨て、腰に取り付けた大型拳銃を抜いて引き金を引く。

「オイちょっと待て！」

が、ドリューは決して容赦しなかつた。拳銃から発射された光弾が、アレンを捉える。

「よせ！」

そう言つたアレンに、さらに光弾が叩き込まれる。何とかかわし

た直後、資材の山が崩れ、アレンが見えなくなる。周りを見渡したドリューは、突然響いた気合いを聞いた。

アレンがドラグソードを振り上げ、ドリューに斬りかかったのだ。
近距離に来ればこいつの物だ。ドリューは次第に押されていった。
が、いきなり至近距離で、ドリューがアレンに光弾を連続でブチ
込んだ。

一ぐあああ！「

その隙に、ドリューはアレンを押さえ込んでひざ蹴りを何発もお見舞いした。

「うああ……俺はアレン・クラウド。お前は何なんだ？」

ベントを知つてゐる。と言つ事は、少なくともライダーに関してそれなりに知識はあるのだね。

「ハツ、ウイングナイトが言つたとおりだ。何故こんな事をする？ 分からないのか？ゼイビアックスの狙いはグラールだ！ウイングナイトと一緒に奴を倒そう！」

「……何だと？ ウイングナイト一緒に…ゼイビアックスを…倒す？」
ドリューの言葉は、少し驚きを含んでいた。と、ドリューがアレンから離れ、変身を解いた。

俺は仮面ライダートルクだ。

それから少しして、一人は変身を解いた状態でそのあたりを歩いていた。

「レンが言ったのか？ゼイビアックスと戦つてゐるって？」

「ああそうだ。グラールをベンタラの二の舞にはさせないって。俺はグラールをま美里たい。だからレンに協力してる。何か問題があるかー？」

「ハア……いいかアレン、お前は騙されてる。奴はゼイビアックスの手下だ。カードテックをベンタラから奪い取つてグラールに、ばら撒いたんだ。」

「それはストライクと前のドラゴンナイトの仕業だ！」

が、アレンが何を言つてもドリューは聞く耳を持たなかつた。

「ストライクが裏切つたのは本当だが、前のドラゴンナイトはウイングナイトに歯向かつた。そして、奴に一番最初にベントされた。

「嘘だ……」

「俺はこの田で見たんだ！」

そう言って、ドリューは語り始めた……

レンは俺達をゼイビアックスの基地に案内して、騙し討ちにしたんだ。

レンは俺に何度も何度も切りつけ、俺が倒れた直後にドラゴンナイトに襲いかかつた。全く備えが出来なかつたドラゴンナイトは、凌ぐのがやつとだつたんだ。

『どうしたんだレン、止めてくれー！』

『やれウイングナイト、始末しろー！』

ゼイビアックスはレンに指示を出していた。その時点で、その場

にいた皆が真実を悟った。俺は……何もできなかつたんだ。

『レンやめろ！俺達とベンタラを売つたのか…？』

『古い世界にオサラバするのさアダム。仲間になれ、そうすれば見逃してやる。』

『断る…』

アダム デラゴンナイトは頑として拒否した。だが、レンは

圧倒的すぎたんだ。

『ならお前ともオサラバだ…！』

結局、アダムは武器も奪われ、レンに一方的にやられるだけだったんだ。

『いいぞウイングナイト。』

ゼイビアックスはウイングナイトの仕事ぶりに満足していた。レンは嘲るよつにアダムの剣を投げ捨て、ゆっくり、歩み寄つたんだ。

『最後の警告だ。仲間になれ。』

『誰が…！』

俺はただ見ていろ」としかできなかつたんだ。アダムがかつての親友に裏切られ、絶望の中でベントされるのを…

『やれウイングナイト、そいつをベントするのだ…！』

レンはそれに従つた。何の躊躇もなく、親友にファイナルベントを使つたんだ。

『サヨナラだ。』

【FINAL VENGE】

そして、アダムに無慈悲な一撃を見舞つたんだ。そして、アダムはベントされた…

『レン…俺は…俺達は…』

俺はすんでの所で逃げだした。自分の身の事だけで精いっぱいだつたんだ…

「だったら、何でレンは俺を助けた！？ベントするチャンスはいくらでもあつたのに。」

アレンがいらだたしげにドリューに問いかけた。

「分からぬのか！？騙し討ちが奴の手口なんだ。お前を信用させて、お前に近付き…ベントするつもりなんだ。」「が、アレンはその言葉を信じよつとしなかつた。

「そんなのウソだね。信用できるか。」

「そうか…そんなにベントされたいか、親友と思つてたやつ。」
とその時、少し離れた所に、レンが姿を現した。抜き身のダークバイザーを手に持ち、ゼブラスカル・ブロンズと切りあつている。「丁度良かった。化けの皮をはがしてやる。黙つて見てろ、ピンチの時こそ本性が露わになるんだ。」

そう言つて、ドリューはデッキを取り出し、前方にかざした。ほとぼしつた緑の電光が、やはりベルトを形作る。

「KAMEN RIDER！」

スライド挿入されたデッキが回転し、ドリューは次の瞬間、仮面ライダートルクに姿を変えていた。

「見つかるなよ。」

そう言つて、腰に付けた拳銃マグナバイザーを抜き、ゆっくりと近づいて行つた。

突如、切り結ぶレンとゼブラスカル・ブロンズの間を、エネルギー一弾が駆け抜けた。見ると、ドリューが銃を構えてたつている。ゼブラスカル・ブロンズはその隙に逃げだした。

「あきらめるワイングナイト、俺達は止められないぞ！」
「どうかな……」

レンは一気に襲いかかった。あつといつ間に、形勢はドリューに不利になつた。

「お前とゼイビアックスには負けない！」

レンはあつという間にドリューを切り倒した。地面に横たわつたドリューに、鈍く光る刃が突きつけられる。

「…何だと？」

「手を引け！」

「…断る。」

「お前達にグラールは支配させない！」

「ハア？」

アレンは遠くにいたので、一人の会話は聞こえなかつた。とその時、彼の眼に、あの鎧の様な姿が飛び込んできた。「やれ、ウイングナイト、ベントするのだ！」

「ゼイビアックス！？」

ゼイビアックスはワイングナイトに指示を出した。『うやうやしく』

ユーに協力を頼まれていたようだ。

「その邪魔なライダーを始末しろ！ 我が右腕よ！」

「何だと？」

一瞬、隙が出来た。その隙に、ドリューは引き金を引きまくつた。

「グアアアー！」

エネルギー弾をしたま叩き込まれ、レンがひるんだすきに、ドリューは逃げてきた。

アレンは、ショックを受けていた。会話がよく聞こえなかつたのもあるが、ゼイビアックスがワイングナイトに指示を出しているという事実が、彼から他の感覚をほとんど奪い去つていた。

「おー！」

レンはドリューを追つたが、ドリューは鏡に飛び込んだ。レンは短く舌打ちし、去つていった。

「……逃がしたか……」

と、レンは向こうからやつてくるアレンの姿を見た。

「ゼイビアックスの手下なのか！？」

「何を馬鹿な。」

「見たんだ！ゼイビアックスとグルになつてた。他のライダーを始めしようとしてるんじゃないのか！？」

「連中にだまされるな！本気でそう信じてるのか！？」

「俺がトルクに協力したらどうする？俺までベントするんだろ！……信じてたのに。」

「そう言つて、アレンは去つていった。

「……トルクの奴め……くそつ！」

第9話 仮面ライダートルク（後書き）

次回予告

クライスのメールを頼りに、パルムの病院に潜入したエミリアは、そこでアレンの父の姿を見つける。行方不明の彼が、なぜそこにいるのか…？

一方、アレンとけんか別れしたレンは、ドリューと遭遇、彼の目的を聞く事となる…

次回 仮面ライダー・ドラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士　『敵か味方か』
命をかけて、守りたいものがありますか？

第10話 敵か味方か（前書き）

JTCとの電話シーンは、今後の展開に影響するので丸々とカットしました。

第10話 敵か味方か

国道の近く、ドリューはアレンに歩み寄り、持っていたカミ・カツブの「コーヒー」を手渡した。

「なあ、辛いのは分かる。信じてたやつに、裏切られたんだからな。

「こんなのは信じれないよ。」

「俺だって同じだったさ。」

とその時だった。

「アレン！」

エミリアだつた。

「エミリア？どうしたんだいったい？」

「聞いて。失踪した人を探して、クライスのメールを頼りに病院に行つたら……あんたのお父さんを見つけたの。」

「何だつて？」

エミリアは話し始めた…

エミリアは、クライスが郵送してくれた変装用の衣装に身を包み、クノーと共に「未確認疾患センター」に潜入していた。途中、都合が悪くなつてスチームが付いていない、底が金属のタイプのアイロンでスタッフを1人殴り倒したのは少し申し訳なく思つていた。

『警備員じゃなくて、警官だったよね、今の。』

『こここの秘密が重大だという事だ。』

とある病棟、そこをのぞきこんだエミリアが何となしにそここの力一テンをめくつた。と、彼女達は凍りついた。

『え……？ クノーさん、これって……』

『アレンの……父親じゃないのか？ 何でこんなとこにいるんだ？』

『あたしだって知らないよ！』

ホルテスシティの中央ブロックにある広場で、レンは一人、物思いにふけていた。アレンの、いら立ちに満ちた言葉が、脳裏によみがえった。

ゼイビアックスの手下なのか！？

俺がトルクに協力するって言つたひびつするー？俺までベントするんだろ！…信じたのに。

「……奴らの思うつぼだ。」

と、レンは入口が開く気配を感じ取った。見ると、近くのビルの連絡通路に、ガゼルの様なモンスターがいるのに気づいた。デッキを手に取る。が、レンは少しそれを見ると、懐にしまった。

ベンタラの、似たような場所。2体のガゼルモンスター メガゼールとギガゼールの後ろから、レンが声をかけた。

「オイ、パーティー会場をお探しですか?……ここだぜ。」

レンはサングラスをかけると、武器を置いて襲いかかってきたガゼルに向かつて行つた。

ギガゼールが繰り出した拳を素早くかわし、懐に潜り込んでパンチの嵐を見舞う。勢いをつけた最後の一撃にギガゼールが吹っ飛ぶと、メガゼールが襲いかかってきた。後ろ回し蹴りを見舞われよろめいたメガゼールに、続けてサイドキックが撃ち込まれ、レンはそのまま横にロー・リングして間合いを取つた。

「ハアツ！」

そしてそのまま一気に距離を詰め、低弾道の回し蹴りで足をすくつた後、宙を舞うメガゼールにキックを放つて弾き飛ばす。

と、起き上がつたメガゼールが槍を手に取り、同じく武器を取つたギガゼールと共に襲いかかってきた。レンは近くにあつたステルニウムの棒を取り、繰り出されたガゼルの武器を押さえ込んだ後2体に飛び蹴りを放つ。が、起き上がつたギガゼールがレンの頭上に武器を振り下ろす。何とか棒で防ぐが、上からたたきつけ

られたメガゼールの槍が棒をへし折った。レンは双剣の要領で棒を構え、ガゼルに的確な攻撃を打ち込む。

と、突然ギガゼールが上空に飛び上がり、近くのビルの屋上に消えた。メガゼールも、相方の後を追つていく。

「…何やつてんだ、俺。」

「入口ここだろ?」

「正面からはまずいの。裏からよ。つてか、あの人も?」
エミリアはドリューの事を言つていた。

「ああ。」

ドリューは愛想のいい笑みを浮かべた。

そして病棟の中、3人はアレンの父、フランクのいる病室にたどりついた。

「父さん? 父さん! ? 僕だよ、アレンだ! 僕の事が分からないのか! ? 何があつた! ?」

と、ドリューが口を開いた。

「ゼイビアックスにライフエナジーを吸われたんだ。エナジーを吸いつくされると、こういう夢遊病状態になる。」

「治療法は無いの?」

エミリアの問いに、ドリューは少しどもつた。

「あるけど…」

「あるけど何だ! ? 父さんを助けるためだつたら何でもする!」

「…ゼイビアックスだ。奴を倒すしかない。ウイングナイトもだ。」

「…と、病室のカーテンが、しゃあッと音を立てて開いた。出てきたのは医師だった。

「一人とも、ここでなにしてる? ここは立ち入り禁止だ、出るんだ。」

「え、二人？」

振り返ると、ドリューの姿は無かつた。

それから数分後、アレンとエミリアはフランクのベッドの前に座っていた。と、カーテンがまた空いた。出てきたのは警官だった。
「アレン君、君の入館許可を取つておいた。症状を教えなかつた事はすまなかつた。私にもどうこうできるものじやないんだ。今は落ち着いてるし命にも別状はない。夜の街を他の連中と徘徊していたそうだ。この事は他言無用だ、一人とも。」

「アレン、待つてよ！」

「ドリューを探す。」

「何でウイングナイトを…」

「俺は見たんだ、ゼイビックスがウイングナイトとグルになつてゐるのを！ 治すには奴らを倒すしかないつて…」

アレンの声は、悲痛だった。

そのすぐ後、アレンはレンと出くわしていた。

「父さんを直す方法は無いのか！？」

「何の話だ。失踪してるんじゃなかつたのか？」

「ゼイビックスにライフエナジーを吸われたって……」

「そうだったのか……」

レンの声から、感情はあまり分からなかつた。

「治すには、ゼイビアックスを倒すしかないって……」

と、レンが唐突にアレンの言葉を遮つた。

「治療法なんて無い。治せる人はいたが死んでしまつた。」

「俺をゼイビアックスから遠ざける氣か！？その手には乗らない！」

そう言って、アレンは去つていつた。

「……トルクの奴め……」

その後バイクで走つていたレンは、ドリューの姿をはつきりと見つた。向こうもこちらに気付き、持つていた携帯をしまつて逃げだした。

「まで！」

逃げたドリューを追つて、レンは変身してベンタラに飛びこんでいた。と、いきなり砲弾が叩き込まれる。そこをみると、ドリューがいた。

「俺に用か？」

「アレンをだましたな！」

「ガキなんざちよろいもんぞ。」

それを聞いて、レンはすぐにドリューに斬りかかつた。ドリューは繰り出された斬撃を、ダークバイザーナックルガードに腕をあてて防いだ。

「グラールを売つて何を手に入れるつもりだ？」

「ゼイビアックスがグラールの王にしてくれるつてさ。それにグラ

ール最後の男になれば、カワイコちゃんも選り取り見取りつてわけ。

「廃墟の街でハーレム^{ハーレム}」とか。それがモテない男の夢つてわけか！」

「そう言つて、レンはドリューを蹴つて間合いを取つた。

「バカか！？用済みになればゼイビックスはお前もベントするぞ！」

「上手くやるさ。」

「せいぜい夢を見るんだな。」

「何とでも言え。」

そう言つてドリューはマグナバイザーを抜き、カードスロットをオープンしてカードを挿入した。

『ATTACK VENT』

地面から生えてくるように、重戦車の^{（）}とき重厚なフォルムのモンスター、マグナギガが現れる。危機を悟つたレンはすぐに逃げたが、ドリューはさらにもう一枚読み込んだ。

『FINAL VENT』

マグナバイザーをマグナギガの背中のソケットに差し込み、マグナギガが全身の火器を展開した。

「ようやく『』^{（）}が見えたな？俺は王国、お前は天国。」

それだけ言つと、ドリューは引き金を引いた。瞬間、全身の火器が一斉に火を噴いた。ミサイル、レーザー、砲弾、様々なものが飛んでくる。

「うああああああああ！！！」

とつさに物陰に身を隠したおかげで直撃は免れたが、爆風と振ってきた破片で、レンには大ダメージが擊ち込まれた。

凄惨な一斉射が鎮まると、そここの地形が大きくなれて変わつていた。

「…ちよろいもんぞ。」

第10話 敵か味方か（後書き）

次回予告

アレンやレン達の前に現れた新たな仮面ライダー。それは、最強であることにこだわる格闘家、仮面ライダー キヤモだつた。援軍を必要とせず、レンばかりかアレンやドリューも攻撃するキヤモの行動から、次第にアレンは疑惑を募らせる…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『仮面ライダー キヤモ』

命をかけて、守りたいものがありますか？

第1-1話 仮面ライダー・キャモ（前書き）

いつもベニ第8話の3／3が無いので、その辺りはオリジナルです。

第11話 仮面ライダー・キヤモ

全壊し、無残な姿をさらす廃工場。レンは、そこに倒れていた。

「う……ッ……」

止めなくては。アレンに何とかして真実を悟らせねば。その一心で傷付いた体に鞭打ち、レンはその場をよろめきながら後にした。

ダグオラ郊外の、3階建てくらいの横長の建物。その中の1室で、一人の男がグローブをはめて向き合っていた。片方は頭にバンダナを巻いた背の高い男、もう一人は、黒い肌とドレッドヘアが印象的だった。

「よし、次はスパーリングだ。」

「ハイ、師匠。」

二人は構え、たがいに拳を繰り出した。鍛えた格闘家らしく的確に攻撃を叩き込み、防ぎ、フェイントをかけて間合いを取る。

ドレッドヘアの男が師匠と呼ばれたもう一人の胸にストレートを見舞うと、師匠は少しよろめき、それから微笑んで見せた。

「なかなかやるじゃないかグラント。」

グラントと呼ばれたドレッドヘアは師匠に更に飛びかかったが、どうやら、さっきまでは少し手加減させていたらしい。拳をかわされてカウンター・キックを見舞われ、グラントが大きくよろめいて近くのドラム缶に寄りかかる。

「いいか、一瞬でも気を抜いてはならん。」

師匠は、グラントがドラム缶の中に手を入れて何かしている事に気付かなかつた。

「さあ、もうひと勝負だ。来い。」

「あ…勝負だ…」

グラントがぼそりと呟くと同時に、スパーリングが再開された。支障が蹴りを放つ。と、グラントはその足をつかみ、太腿に右フックを叩き込んだ。

「グアアツ！」

「気を抜いや駄目でよ。」

グローブで殴られた者の声ではなかつた。どうやらグラントは、さつきグローブに何か仕込んだらしい。続いて、グラントの拳が師匠の左肩を捉え、続いて止めのボディーブローが炸裂した。

「がああツ……」

グラントは勝ち誇つた笑みを浮かべ、地面に倒れて他の門下生に助け起こされた師匠を見た。

「……卑怯者…武道を何だと思っている！」

「強い奴が一番になる、そんだけのこつたら。これで、俺は、あんたを、越えた。」

門下生たちは構えようとしたが、師匠が止めた。

「構うな！卑怯者とは…戦う価値は無い。」

そう言つて、彼らは去つていつた。と、その直後、グラントが初めて聞く声がした。

「その言葉は撤回せねばな。戦略的と、言うべきだつ。」

暗がりから、黒いコートの身を包んだ男が出てきた。

「あんたは？」

「マトック少佐。君の実力はさつき拝見した。もっと、名をあげたいだらう?」

「もう叶つた。」

「場末の道場の師を倒したからか?大したものだ。だが、君にはもつとふさわしい戦場があると思う。君を雇いに来たんだよ私は。」「傭兵か?」

「却下だ。契約軍人とでも思つてくれ。…一つの世界で最強にはな

りたくないか?』

マトック少佐は、そう言ってグラントの顔を見つめた。

『何だと?』

マトック少佐は、不意に懐から、あるものを取り出した。

『持つてみたまえ。』

グラントが手に取ると、ライムグリーンの『ソレ』は光を放った。

『これは何だ?』

『栄光だ。……栄光へのチケットだ。』

マトック少佐 ゼイビアックスは、カメレオンのエンブレムの入ったカードデッキを見つめるグラントを見ながら、満足げな笑みを浮かべていた。

『仮面ライダーキャモ』誕生の瞬間だった……

パルムの陸橋を、2台のバイクが走っていた。その二人の頭の中に、例の音が響く。

『こっちだ!』

『ああ!』

アレンとドリューは、目的の場所でバイクを止め、デッキを取り出した。

ベンタラの資材置き場、そこにやってきた2台のアドベントサイト。そこから降り立つたのはドラゴンナイトとトルク。

二人は構え、ゆっくりと進んでいった。とその時、突然モンスターが姿を現した。シユモクザメのモンスター、アビスハンマーだ。アビスハンマーは一人の姿を認め、胸のキャノン砲から弾を撃ち出した。

「ぐああ！」

ドリューの腕に、その弾が命中する。ドリューはカードを使おうとしたが、腕のダメージのせいでマグナバイザーが抜けない。

「…お前が使え。」

「え、俺が？使えるの？」

「試してみるよ。」

半ば強引に、ドリューがアレンにカードを渡す。アレンはドラッグバイザーを開き、そのカードを読み込んだ。

『LAUNCH VENT』

空中から、左右計2門のショルダー・キャノンが飛来する。

「おお、スッゲエ！」

が、その大砲 ギガキヤノンは、アレンではなくドリューにまつすぐ飛んできて、その体に装備された。

「…え？ オイちょっとなんだよこれ！ カード使ったの俺だろ！」

アレンが声をかけるとドリューが振り返り、アレンはギガキヤノンの砲身に頭をぶつけた。

「あいつてえ！」

「気を抜くな！ 戦いはもう始まってる！」

ドリューはそれだけ言つてアビスハンマーの前に進み出ると、ヘルギー・弾を続けざまに見舞つた。

「ほら、これならどうだ？」

アビスハンマーの砲弾をかわし、アレンは再びカードを挿入した。^{ペントレイ}

『GUARD VENT』

「よッしゃ来い！」

が、砲弾はアレンを直撃した。

「…なんかもう嫌になってきた… 何なんだよこれ！ 何で俺のところ來

ないんだよ！」「

「悪い、またこいつだ。お前のやり方が悪いんじゃないのか？」

ドリューは、召喚された大きな盾、ギガアーマーをかざして見せ、横に置いた。

「そうなのか？」

「ほら、これならどうだ？ 三度目の正直って言つだろ？」

ドリューは、またしてもアレンにカードを渡した。

「スリーストライクならアウトだ！」

『ATTACK VENT』

地面上に鏡の様なものが出現し、マグナギガが召喚される。

「よし。」

ドリューはその陰に隠れようとしたりましたが、アレンがその体を突き飛ばした。

「させつかよ！」

アビスハンマーの砲弾が、今度はドリューを襲つた。一方アレンは、マグナギガの体見守られて、アビスハンマーを挑発する。

「へつへつ当たりませ～ん！」

『STRIKE VENT』

アレンはマグナギガの陰に隠れてカードを挿入した。

「おい、何する気だ？」

「まあ見てなつて。」

直後、アレンはドラグクローファイアを炸裂させ、ドリューもギガキヤノンを2門とも発射した。アビスハンマーは全て同時に食らい、粉々に爆散した。

「悪か無いな。」

「そつちこそな。やるじやん。」

ゼイビアックスの要塞。グラントはそこに案内されていた。

「どうだね、これが我々の本部だ。」

「スッゲエな。こんなのみた事無い。」

「当然だ。これがさつき言った第2の世界。このテクノロジーを見たまえ。」

ゼイビアックスは、そう言ってサングラスを外した。

「我らこそ最強の軍隊。しかし、最強を自称する連中が現れてね。見たまえ、ターゲットのウイングナイトだ。撃滅するのだ。成功すれば報酬は弾む。」

「いや金なんかどうでもいい。こいつ強いのか？はったりじゃねえだろうな。」

「1番を気取つてゐらしい。」

「……今日は2番だ。」

グラントは、ライムグリーンのデッキを持ち上げて見せた。

Hミリアは、家でメールを打っていた。

「あなたの言つた通りの病院で、夢遊病患者をたくさん発見しました。有益な情報を有難う……」

と、そこまで打つたところで、急に後ろから抑え込まれ、Hミリアは近くの窓に引きずり込まれた。

「おいHミリア、さつきの本なんだが……」

直後、クラウチが扉から出てきたときには、彼女の姿は無かつた。

アレンは、部屋にドリューとはじっていた。

「いつてえよ。お前と組むといつもああなるのか？」

「俺はめちゃくちゃ楽しかったぜ。なあ、フォローしただろ？」

「ああ…」

「じゃあ、冷蔵庫を開ける、腹が減った。」

アレンはそう言われ、冷蔵庫を開けて小さな容器を取り出した。「冷蔵庫ね…マカロニチーズがあるけど、賞味期限切れてるかも。後は……ポテトフライとか？」

「賞味期限は？」

「ああ～、たぶん切れてる。」

とその時だった。一人は、例の気配を感じた。

「……メシ食う暇もないってか。」

「みたいだね。」

ベンタラのビル街。Hミリアは、サメのモンスター、アビスラッシュに腕を引っ張られていた。

「ちょっと、離しなさいよ！ 離して！」

アビスラッシュを殴りつけても、手は離してくれなかつた。と、その時だつた。レンが、そこに向けてまっすぐ歩み寄つてきた。アビスラッシュにパンチを叩き込んでふつ飛ばし、デッキを構えてベルトを形成する。アビスラッシュはすぐさま飛びかかつたが、レンはその腕をつかむとそのままデッキをスライド挿入した。

「KAMEN RIDER！」

直後、現れたリングがアビスラッシュをふつ飛ばし、そのままウイングナイトのアーマーを形成した。

「其処を動くなよ。」

レンはそれだけ言ってアビスラッシュに斬りかかつた。アビスラッシュはのこぎりの様な剣2振りで対抗していた。

その対決を、じつと見る人影があった。

グラントだつた。キヤモのデッキを手にして、機会をうかがう。そしてその場に、アレンとドリューも到着した。

「レン！？」

「マジかよ……」

ドリューは少し動搖していた。

「え？」

と、ドリューは誤魔化すように言った。

「そうだこうしよう。ウイングナイトを助けるふりをするんだ。そして、奴が背を向けた瞬間に倒すんだ。そうしたら俺が止めを刺してベントする。できるか？俺に100パー協力するか、〇かだ。」

「あ、ああ：分かった。」

二人は階段を下りてその場に向かおうとした。と、グラントが行く手を阻んだ。

「お前ら誰だ？」

「俺達もウイングナイトを追ってる。味方だ。」

「ハツ、マトック少佐から援軍の話は聞いてねえ。これは俺の任務だ。」

「マトック少佐って、誰？」

アレンが問い合わせるが、ドリューとグラントはいきなりデッキを構えた。

「一人で出来るもんつてか？お手並み拝見と行こうか。」

「俺に戦わせて、栄光だけ横取りしようつてか？まずはお前ら雑魚から片付けてやんよ！」

「吠え面かくなよ。」

「二人とも落ち着け！喧嘩なんかしてる場合ぢゃ……」

「喧嘩売つてんのはこいつだ。」

「ハア… K A M E N R I D E R…」

「K A M E N R I D E R！」「」

3人のデッキがベルトのバックルで回転し、戦闘アーマーが形成

されて、アレン、ドリュー、グラントが、ドラゴンナイト、トルク、キヤモに姿を変える。

「アアアアアアアッ！」

グラントが雄叫びをあげて一人に襲いかかった。アレンもドリューも拳を振るつたが、グラントは慣れた様子でそれをさばき、カウンターを叩き込んでいく。が、少しばかり型にはまつている感がないでもない。アレンは、彼が格闘家であると直感で分かつた。

「口ほどにもねえな！」

「どうかな！」

ドリューは素早くカードを抜き、マグナバイザーに^{ベントイン}挿入する。

『STRIKE VENT』

『GUARD VENT』

マグナギガの頭を模した武器ギガホーンと、膝を模した盾ギガテクターが飛来し、ドリューの右腕にと肩にそれぞれセットされる。

「どらあ！」

ギガホーンと叩きつけられ、グラントが体勢を崩した。が、ローリングして起き上がり、彼もカードを抜く。そして、左足の召喚機バイオバイザーのカードキヤツチャーを伸ばしてカードをセットし、手を離してワイヤーが巻き戻されるとカードが^{ベントイン}挿入される。

『HOLD VENT』

ヨーヨーの様な武器、バイオワインダーが、グラントの掌に飛び込む。

「ああもう！」

アレンも見かね、ドラグバイザーを開いた。

『WORD VENT』

アレンの手に、ドラグソードが飛び込む。それを振りかざしてグラントに切りかかるが、グラントはバイオワインダーをぶつけて牽制すると、もう一度伸ばしてアレンの腕を絡め取つた。

「なっ！」

と、ドリューがギガホーンを構え、2本の角の間に取り付けられ

たレーザー砲を発射した。が、グラントは腕を振ってアレンをその軌道上に持つてくると、身を守る盾代わりにした。

「おわあ！」

「へっ、大したことねえな。でもウイングナイトを見失った。今回はお預けにしてやる。」

それだけ言うと、グラントは新たなカードを挿入した。
『CLEAR EVENT』

瞬間、グラントが姿を消した。透明化したのだ。そして、アレンとドリューに蹴りを見舞つて、そのまま去つていった。

『FINAL VENT』

エミリアが駆け付けると、レンが飛翔斬を見舞つてアビスラッシュヤーを粉碎していくところだつた。そして、レンは変身を解いた。

「ねえ、待つてよ。あんた、確か……」

「レンだ。」

エミリアは、まず説明を求めた。

「……はどこなの？ 何で誰もいないの？」

「……ここはベンタラ、俺の国だ。人々はみんな……ゼイビックスに拉致された。」

エミリアは、やはりレンを質問攻めにする。分からぬ事だらけだった。

「拉致されたって……解放できないの？」

「元のライダーは俺を除いてリーダー」と全滅した。だから俺が戦つていいんだ。」

「…アレンはあんたがゼイビアックスの手先だつて…」

「アレンは、ゼイビアックスの手先に騙されている。何とかして、真実を伝えないと。」

「逃がしたじゃないか！お前のせいだ！」

「アイツも味方だろ！？」

アレンが、いら立つドリューに声をかける。

「バカは考えんな！ウイングナイトもいない！今日一つもしくじりやがって！この間抜け！」

そう言つて走り去つていったドリューを、アレンは追つた。

その光景を、ゼイビアックスはみていた。

「仮面ライダー』……』よ、トルクとキヤモが同仕打ちを始めた。狙いはウイングナイトだ。仮面ライダートラストを呼べ！」

そのライダーは、ゆっくりうなずいた。

突然、レンの後ろから攻撃が来た。みると、サイの様な見た目の重厚なフォルムのライダーがいた。そのライダーは、いましがたの攻撃でレンの手を離れたテッキに足を乗せ、レンをじつと見据えた。

「君は隠れている。」

レンはHミリアに言うと、その体を近くの車の車体に突き飛ばした。Hミリアはそこにしたたかに背中をぶつける。

「何すんのよー！」

「悪い。」

レンはHミリアの体を押した。と、その体が吸い込まれるように消え、グラールに姿を現した。

そして、レンは身構えた。

と、そのライダー 仮面ライダートラストはデッキを蹴ってレンに返した。

「？」

レンが、怪訝そうな顔をする。

「捨うんだ、フェアな勝負をしろ。」

レンはデッキを構え、変身した。

「KAMEN RIDER！」

そして、変身したレンは、ダークバイザーを抜いてトラストに切りかかり、トラストも飛びかかって行つた。

第11話 仮面ライダー・キヤモ（後書き）

次回予告

レンに襲いかかった仮面ライダー、トラスト。その目的は『バトルクラブ選手権大会』に優勝する事だという。彼も、ゼイビアックスにだまされたライダーの一人なのか。そして、アレンはキヤモと再び遭遇し、やがて眞実を悟るが…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『仮面ライダートラスト』

命をかけて、守りたいものがありますか？

ライダーデータ紹介 PART2（前書き）

新しいライダーが3人出てきたので紹介します。この作品はライダーをユーブロンも含めて15人出す予定なので、3人登場することに紹介します。

ライダーデータ紹介 PART2

仮面ライダートルク

変身者：ドリュー・ランシング　日本名：ゾルダ

ベンタラで開発された1・2のライダーのうち、射撃戦に特化したタイプのライダー。アドベントビーストは鋼の巨人『マグナギガ』。近接攻撃主体の他のライダーとは違い、複数の重火器を使い分けて遠距離から攻撃するタイプ。おそらく、拠点制圧に特化したタイプのライダーなのであるう。1分間に最大120発のエネルギー弾を放つ大型拳銃型召喚機『マグナバイザー』の連続攻撃で敵を弱らせた後、大火力を込めた1撃で大ダメージを与える戦法を得意とする。名前の意味は『回転』。リボルバー拳銃のマガジンやガトリングガンの銃身をイメージしたものと思われる。

ショートベント AP:2000(100t)

マグナギガの両腕を模した手持ちのキヤノン砲『ギガランチャー』を召喚。100キロメートルの射程距離を誇り、並のモンスターならこの火器の1撃で粉碎できるが、その威力に比例して反動も大きいため、発射すると反動で大きく後退してしまう。

ランチベント AP:3000(150t)

マグナギガの脚部を模した2門の大砲『ギガキヤノン』を召喚。射程距離は普通に目視できる敵に対して使用できる程度だが、2門合わせて発射すればギガランチャーの1・5倍の破壊力を誇り、また、ショルダー・キヤノンタイプであるため、マグナバイザーやギガランチャーなどと併用も可能。龍騎ではショートベントだった。ちなみにランチの意味は『発射』で、昼メシではない。

ガードベント

1・マグナギガの胸部装甲を模した盾『ギガアーマー』を召喚。盾としてだけでなく、ギガキヤノンと合わせて使う事で反動軽減に活用も可能。3000GP

2・マグナギガの膝を模した盾『ギガテクター』を召喚、肩や腕に装着して使用する。原作未登場。1000GP

ストライクベント AP:2000 (100t)

マグナギガの頭部を模した武器『ギガホーン』を召喚し、右腕にセットする。2本の角での打撃攻撃の他、取りつけられたレーザー砲で遠距離攻撃も可能。原作未登場。

アタックベント AP:6000

マグナギガを召喚。自分の意思で動く事はほとんどないため、その頑丈なボディをガードベント代わりに使われる事もある。

ファイナルベント AP:7000 (350t)

『エンドオブワールド』。マグナギガの背中のソケットにマグナバイザーを装着するとその体に取り付けられた火器がすべて展開、引き金を引く事でミサイルやレーザーを一斉射し、点ではなく面で敵を焼き払う。全ファイナルベントの中で最大級の攻撃範囲を誇り、一点集中で発射することも可能だが、発動から発射までの隙が大きいため、ここぞという時にしか使われない。

仮面ライダー キャモ

変身者：グラント・ステイリー

日本名：ベルデ

ベンタラで開発された12人のライダーのうち、カモフラージュ

戦法を得意としたライダー。ただしグラントが真っ向勝負でたたきのめす戦法を得意とするため、これらの能力はあまり生かされなかつた。アドベントビーストはカメレオン型の『バイオグリーザ』だが劇中未登場。本体の格闘能力はそれなりに高く、真っ向勝負でも十分威力がある。だがその真価はアドベントカードによる変装や力モフラー・ジューで発揮される。召喚機はカメレオンの様な形をした、左太腿の『バイオバイザー』。ワイヤーで本体とつながったカードキヤツチヤーがあり、それにカードをセットしたのち、カードキヤツチヤーを離すとカードが挿入され^{ベンタイン}、効果が発揮される。名前の意味は『迷彩模様』。また原作では、全ライダーの中で、キヤモのみ全てのシーンが新規撮影である。

ホールドベント AP:2000(100t)

バイオグリザの目を模したヨーヨー状の武器『バイオワインダー』を召喚。そのままぶつけて攻撃に使うだけでなく、敵を絡め取つたりもできる。

「ピーベント

相手の姿や武器をそのまま複写するカード。ただし、ほかのカードを使うと解ける。劇中未登場。

クリアーベント

使用者を完全に透明化するカード。本来は奇襲や騙し討ちに使うものだが、グラントは戦場から撤収する際に使用。

アタックベント

バイオグリーザを召喚するカードだが劇中未登場。

ファイナルベント AP:5000(250t)

『デスバニッシュ』。バイオグリーザが舌をキヤモの足に巻きつ

けると、キヤモが振り子運動の要領で敵を捉えて空中に舞い上がり、パイルドライバーの要領で敵の頭を地面に叩きつける大技。原作未登場だが、龍騎では仮面ライダーライアと、仮面ライダーナイトを葬った。

仮面ライダートラスト

変身者：ブラッド・バレット　日本名：ガイ

ベンタラで開発された1~2人のライダーのうち一人で、突撃戦法型。アドベントビーストはサイ型の『メタルグラス』。装甲車のような重厚な見た目とは裏腹にその動きは軽快で、ライダーの中でも随一のパワーを誇る猪突猛進型なため、フェアな真っ向勝負を好むブラッドとは相性がいいと言える。防御力も非常に高く、ベンタラでは切り込み隊長だったのではないかと思われる。召喚機は左肩に取り付けられたショルダーアーマー型の『メタルバイザー』で、取り付けられた角は攻撃にも転用可能。名前の意味は『突っ込む』なのだが、辞書によれば読み方は『スラスト』なので、もう別の単語になっている。

ストライクベント　AP：2000（100t）

メタルグラスの頭部を模した手甲型の武器『メタルホーン』を召喚。鋼鉄をもやすやすと貫く貫通力を持つが、大きく重いためトラスト以外の使用は困難。

コンファインベント

他のライダーが使用したアドベントカードの効果を無効化する特殊なカード。内部からの裏切り者に備えたカードと思われる。

アタックベント　AP：4000

メタルグラスを召喚。性格が性格だけに、インサイザーよろしく

共闘、と言ひ訳にはいかない。

ファイナルベント A P : 5 0 0 0

『ヘビープレッシャー』。メタルグラスの肩に乗り、メタルホーンを構えて突進する。スピードと重量、そしてメタルホーンの威力が合わさり、爆発的な破壊力を生み出す。

第1-2話　仮面ライダートラスト

トラストとレンは、ほぼ互角に渡り合っていた。拳を交えるレンは、少し焦っていた。この目の前の相手が、予想以上にトラストの力を使いこなしていたからだ。

「ハア、やるじゃないか、1回戦からなかなか強敵じゃないか。」

「1回戦！？ どういう事だ！？」

レンの言葉など気にも留めず、トラストは襲いかかってきた。

「頑張つてレン！」

エミリアは、車体に映る一人の戦いを見守っていた。

その闘いを陰から見つめるライダーがいた。

蛇の様なヘルメットに、紫のボディ。その視線は、見守っているようにも、監視しているようにも、あるいはその両方にも見えた。

トラストはレンを車に押し付け、襟首をつかんで口を開いた。

「悪いな、君もいい選手だが優勝したい気持ちは私の方が上だ。」

「優勝！？ 何の事だ！」

「バトルクラブ選手権に決まっている！」

レンは隙を見てトラストの胸に膝を打ち込み、後ろによろめかせてその隙に身を起こした。

「優勝？ バトルクラブ？ 何を言っている！ これは遊びじゃない、戦争だ！ 優勝などあり得ない！」

「私は必ず試練に勝つ。それがブラッド・バレットだ！…そして人生を取り戻す！」

そう言って、ブラッド・バレットと名乗ったトラストはカードを抜き、左肩のショルダーアーマー、メタルバイザーに投げ入れて力

バーを閉じた。

『STRIKE VENT』

サイの頭の様な武器、メタルホーンが飛来し、トラストの手に飛び込む。それを振りかざしてレンに襲いかかった。続けざまに繰り出される攻撃を何とかかわし、身をひるがえして間合いを取る。

「だまされるな！ カードデッキを渡した奴は俺を倒したいだけだ！ 大会なんてない！」

「私が優勝すると言つていい！」

「お前は嵌められたんだ！ 何を約束されたか知らんが全部ウソだ！」

「そんなはず… そんなはあるか！」

メタルホーンとダークバイザーはぶつかり合つて火花を散らす。武器が、拳が、続けざまに繰り出され、レンとブラッド・バレットが一步も譲らずぶつかり合つ。

グラールから見守るヒミリア。と、不意に彼女の携帯ビジフォンが鳴り響いた。

『おいエミリア！ シズルだ！ クラウチさんが心配している…頼むから電話に出てくれ！』

「……………ゴメンシズル！ 今それどころじゃないの…」

ヒミリアは電話を切つた。少し、申し訳なかつた。

「…アレンに知らせなきや。分かつてくれるかしら…？」

アレンの部屋。ドリューは明らかにいら立つていた。

「そこに座れ。いいか？ 僕が言ったとおりにウイングナイトだけ狙つてればさつきのキャモに邪魔されずに済んだんだ！」

「ああ悪かつたさ！ 謝るよ！ でも、何でキャモはレンを狙つてるんだ？ 不思議じやないか？ 狙われるのはお前じやねえのか？」

「知るか！ レンがデッキを独占しようとしたとかそんなところだろ！ 肝心なのは一つ、あいつは味方じやない。味方しない奴は敵だ分

かつたか！

とその時、部屋のビジフォンが鳴った。アレンは立とうとするが。「出んな！話は終わつてない！戦争なんだ余計な事は考えんな。」

「ああ…」

と、ビジフォンの音声が鳴り響いた。

『発信者の後メッセージをどうぞ。』

ブーーッ

『アレン！エミリアよ！レンが、装甲車みたいなライダーと戦つてる！あたしはホルテスシティ郊外の資材置き場にいるわ！レンは敵じゃない救世主よ！ドリューこそゼイビアックスの手下よ…アイツはあなたをだましてるの…お願い助けに来て…』

「……どうやら彼女も丸め込まれたらしいな。」

ドリューが、表情を少しも崩さず言った。

「……アイツに限つてな。とにかくレンの居場所は分かった。けりをつけよう。」

「ああ。」

「つたく、どいつもこいつも俺の獲物を…」

グラントは、レンとブラッド・バレットの戦いを苛立たしげに見ていた。

と、そこにはアレンとドリューが歩いてきた。

「オイオイまた俺の獲物を横取りする気か？今度はぶちのめす。」

「オイ！喧嘩なんかしてる場合じゃねえだろ！俺達と一緒にゼイビ

アツクスと戦おう！

「ああ？ ゼイビー？ なんだつて？ アレは俺の獲物だ。 一つの世界で最強になつてやる。」

「ちょっと、二つの世界とか最強とかなんの事だよー。これじゃインサイザーミたいじやねえか…… そうか、お前も騙されてるんだ！」
が、二人は構わずデッキを構える。

「オイオイちょっと待て！」

「K A M E N R I D E R！」

二人がそれぞれデッキを挿入し、トルクとキヤモヘと変身する。
「待つて待つて待つて！ そんな！」

グラントがドリューに襲いかかり、拳を次々繰り出した。

「ホオワアアツ！ ホオツ！ アアアツ！」

マグナバイザーを構えるドリューを、グラントは素早い動きで翻弄する。そして資材の積まれたタナの間に潜り込み、ドリューを挑発する。

「へへツ、鬼さん」ちららエツヘツヘツヒコ～

「チイツ！」

「オオオオオオウ、オウオウオウオウオウ！」

打ちこまれるエネルギー弾を次々かわし、グラントが楽しげに走つていく。

ドリューが棚の正面に来た時、飛びあがつたグラントが蹴りを見舞う。

「何処見てるんだよ！」

『HOLD VENT』

「オオオオオオリヤアアアアアアア！」

バイオワインダーが投げつけられ、ドリューに命中して腕を絡め取る。転倒したドリューの後に回り込んで蹴りを見舞うと、グラントはまた地形に消えて行つた。

一方、レンとブラッド・バレットの戦いも激しさを増していた。と、ブラッド・バレットが不意に横を見やる。その視線の先にはドリューとグラントがいた。

「他の選手も頑張っているようだ。」

それだけ言って、ブラッド・バレットは襲ってきた。

「ハア…ハア…ぐッ…」

グラントが、腕を抱え、足を引きずっていた。じつやら、さつきのエネルギー弾は全部が外れたのではなさそうだ。と、いきなりアレンがその目の前に現れた。

「オうお前か…」

「ちよつちよつちよつ、待つてくれ！」

アレンが、両手を出して制止した。

「変身しないと後悔することになるぞ。」

「頼むから話を聞いてくれ、お前を雇ったのは人間じゃねえ！」

「人間じゃない？構わねえぞ、戦えれば何でもいい。こんなパワー初めてだ。」

「グラールが滅んでもいいってのか！？」

「うるせえな。」

と、いきなりドリューの声がした。

「そこで何やってる？俺抜きで内緒話か？」

「ドリュー、話を聞いてくれ、ゼイビックスはライダーをだましてる！それぞれ、夢を叶えると言つて！インサイザーには、ウイ

ングナイトを倒せば1億メセタ、彼には、一つの世界で最強になれ
るって…ウイングナイトが一番だつてけしかけた！レンを狙うライ
ダーはみんな……ゼイビアツクスに乗せられてる…」

ターはみんな.....セイビアツクスに乗せられてる.....」
その時だつた。ドリューが高笑いをしたのは。

卷之三

を構えた。

「オイオイ物騒な物をこっち向けんな、俺は抜けるぜ。」
「一回」つての！

卷之三

が、ドリューは容赦なくギガランチャーを発射した。そして、背中に砲弾を喰らったグラントはよろめいて倒れこむ。

卷之三

「アーティストの世界」

御初りてもじて待てぞ!

ジリュ は講つず ジ

「てめえ……卑怯だぞ！」

「へんせき 離婚するのいいからを聞かんたよ。」

ドリューが抜いたカード。そこにはトルクのエンブレムが刻まれて

FINAL VENTURE

卷之三

変身完了したアレンが止めに入るが、遅すぎた。マグナギガは火器を展開、「グラノー」発射する準備が整った。

1

アレンの叫びはむなしく、ファイナルベントは炸裂する。ミサイルが。レーザーが、全てグラントに向けて降り注ぐ。

ノノニハ
グラツヂ

レンと、カラッペ・バレッピもそれを叩撃した。

そして、立ちあがつたグラントの体が、揺らめいて消えていく。ベントが、始まつたのだ。

グラントの体が、完全に消えた。彼の存在していたのを証明していたのは、そこに落ちていたカードデッキのみだった。

「オイ… どういう事だ… 彼は何処に消えた… 何が起こった? 質問に答える彼に何があつた! ?

「……アイツは負けたんだ。」

レンの答えは、短かつた。

……置いてないぞ、負けた△粉々になるなんて置いてない！」

それだけ言い残して、二三のトーハは、トトはその場を後にした。

「信じた俺がバカだつた！」

ドリューは、自分を指さすアレンに、エネルギー弾を見舞つた。

「ハツハツハ！もう信じなくていい。もう、永遠にな。」

レンはその光景を見ながら、ゆっくりカードを抜いた。

「…」Jリーチの番だ…

「辛いのは分かる。信じてたやつに裏切られたんだからな。」
と、その時、電子音声が轟いた。

『FINAL VENT』

「おああああああああ…」

「なああつ！」

ドリューは身をかわしていたが、飛翔斬のダメージまではかわせなかつた。

「あ…やつたあ！やつたやつたやつたあ！」

Hミリアは、その光景を見て思わず叫んでいた。

ドリューがよろめきながら去つて行つた直後、レンはその場に倒れこんだ。どうやら、かなり消耗しているようだ。

「レン！大丈夫？」

「あ、ああ…」

物陰から、ゼイビアックスがそれを監視していた。蛇のライダーは、何処に行つたか影も形もない。

「…ウイングナイトに弱点が生まれた。そ�だらつへ…」

HIIコアの前にある車から、アレンに抱がれてレンが出てきた。

「本当にめん…お前を信じるべきだったのに……」

「…遅すぎはしないわ……」

HIIリアが、そこに駆け寄った。

「レン！大丈夫！？病院に行つた方が…」

「いや、射止めにふれさせたくなかったから。」

「せめて家まで送るか…」

「家か…俺に家は無い…」

「ウチに来ればいい。」

アレンが、口を開いた。

「市るべきものが出来た…それが、ウイングナイトの、運の、呪き
だ……」

第1-2話　仮面ライダートラスト（後書き）

次回予告

アレンの部屋へと担ぎ込まれたレン。そこで彼が話したのは、どうしてゼイビックスクスが選んだのが、リッチー や グラント、ドリューと言つた人々なのかだった。

そして、敗者はベントされる事を知つたブラッドはしかし、それでもキャリアを取り戻すために戦う事を選んだ……

次回　仮面ライダー ドラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士　『バトルクラブ』

命をかけて、守りたいものがありますか？

第13話 バトルクラブ

どこかの空き地に止められた車。その車体から、装甲車の様なライダーが出てきた。

「はあツ…はあツ…はあツ…」

ブラッドだつた。変身を解いた彼はバイクに跨つたが、発車はせず、トラストのデッキと見つめていた。

そして彼は、自分がレーサーとしての栄光の中にいた、最後のレースを思い出していた…

モトクロス会場。何台ものバイクとレーサーがいるその場に、ブラッドもいた。

【ゲートで合図を待ちます…… あスタートです!】

スタートの合図とともに、そこにいたレーサーがバイクを走らせる。

【一番手はブラッド！ブラッド・バレットがリードしています！そのすぐ後ろにはジョン・ステイーブンス！】

ジョン・ステイーブンスはブラッドの友人であり、ともに競い合う良きライバルだった。彼らの実力はかなり拮抗していた。だからこそ、一人も、そしてそれを見る観客もわくわくさせられていたのだ。

【現在、先頭はブラッド・バレットとジョン・ステイーブンスの競り合いです！第3ターンでもほぼ差はありません！さあどうなるブラッド・バレット？連勝記録を守れるか！？この試練に勝てるのか

あ！？】

と、その時だつた。ジョンのバイクが突然傾くと、転倒した。口ースの端だつたから引かれる事は無かつたが、これでブラッドは完全に彼との間を開いた。

【なんと！ジョン・スティーブンス転倒！ブラッド・バレットがリード！ここでチェック・カーフラッグが振られます！ブラッド・バレット、連勝記録を伸ばしました！流石は試練に勝つ男ブラッド・バレット！どんな試練にも勝つて見せたあ！】

その少し後のことだつた。

『私はやつていません！』

ブラッドがいらだたしげに声を上げる。相手は監督だつた。

『誓います！正々堂々勝つたんです！』

と、監督は目の前のラップトップPCの画面をブラッドに向けた。そこでは、ブラッドのジャケットを着た男が、ジョンのバイクをいじくりまわしていた。

『じゃあこれは？ジョーがコントロールを失つていなければ、お前は2位だつた。』

『私じゃない！』

『お前のジャケットだな。ジョーは死ぬところだつた。』

ブラッドには本当に身に覚えがなかつた。認めることなど出来るわけがない。

『ジョーは親友です。傷付けることなどあり得ない！』

『勝ちにこだわるのはいい。だが今回ばかりはやり過ぎだ。トロフィーはやれない。賞金も返してもらおつか。ジョーは訴えないと言つているが、俺は委員会に報告する。お前のレーサー人生は終わりだ。』

』

『ポール、そんな……』

ブラッドは認められなかつた。病氣や負傷ならまだ許容もできるが、こんな形で人生を絶たれるなどまつぱら「めんだつた。

『私はやつてません!』

『残念だよ。』

ポール監督は、もう考えを変える様子など無かつた。

『……これは試練だ。必ず勝つ。』

それだけ言い、賞金の小切手をポール監督の眼前に叩きつけると、そのプレ・ハブの小屋を後にした。

と、外に出たブラッドは、薄代々のコートを着た男が自分に向かつているのに気づいた。

『今日は試練に勝つたかねブラッドくん?』

『サインはお断りだ。』

『何があつたか聞いたよ。すべて失つたつて?』

その言葉を聞いた瞬間、ブラッドの眼の色ががらりと変わつた。

『何で知つてる!?』

『それはどうでもいい。重要なのは、これだ。』

そう言つと、その男は手にした防止の内側をブラッドに向けた。そこに合つた携帯ビジפוןには、先ほど見た、バイクをいじる男が映つていた。と、その男が振り返る。見知らぬ顔だつた。

『私じゃない…これを何処で?』

男は答えなかつた。

『さては嵌めたな……ビトオをよこせー。』

ブラッドが詰め寄ると、男は帽子を胸につけ、またブラッドに見せた。その中には何もなかつた。ブラッドは、何となくこの男の目的を予想した。

『そりか……幾ら欲しい?』

『いやいやいや、金が欲しい訳じやない。私はチャーリー・フェザーズ。バトルクラブ選手権大会に出てほしいんだ。ルールも、リン

グも、レフヨリーもなしだ。優勝したら、ビトオを渡す。負けたら

……おつと、負けるのは嫌いだつたな。』

ブランドは明らかにいら立つていた。

『私はレーサーだ。格闘家じゃない。』

『レーサーに返り咲く条件だ。』

『……分かつた。ならまずあんたと格闘だ。』

『おおつと。』

と、その時だつた。そこに止めてあつた車の向こうから、緑のアーマーに身を包んだ装甲車の様な男が、空中前転宙返りをして飛びこんできた。トルクだ。

『……こけおどしだ。』

『まあ見ていたまえ。』

レッドミニオンが2体、現れた。トルクは軽く手首にスナップをつけ、レッドミニオンに向かつていった。

そこからは、一方的な展開だつた。首を掴まれ、プレ・ハブに叩きつけられた1体が消滅し、飛びこんできたもう1体がエネルギー弾をゼロ距離で叩きこまれて消えていく。

『はッはッは、何度見ても楽しいよ。とにかく、大会に出る。あのパワーで戦え。』

『レーサーに戻れるのか?』

ブランドの意思が、わずかに変わつてきているのが読み取れた。

『……戦え。優勝しない。』

そして、チャーリーと名乗つた男は、ポケットからあるものを取り出した。

カードデッキだつた。サイの様なエンブレムが刻まれたデッキが、共鳴するような音を立てつつ白っぽい光を放つ。

『……勝てるかね?』

チャーリー ゼイビックスはそう、問いかけた。

その瞬間、彼は『仮面ライダートラスト』となつていた……

リトルウイング事務所。クノーが見た限り、クラウチは少し焦つていた。

「Hミリアは無事だ。あいつに何があつたって言うんだ?なにもある訳がねえ……よし、あと1時間だけ待つて警察を呼ぼう。」

「……警察じゃ、役に立たないかもな。」

レンは、アレンヒュミリアに抱かれてアレンの部屋に入っていた。

「ソファーへ。」

「……ありがとう。」

レンは一人に助けられ、ソファーに身を預ける。

「お前は命の恩人だよ。俺は疑つたのに。」

「お前は悪くないさ。ゼイビックスとトルクが共謀してお前を嵌めたんだ。」

「お父さんがどういう、なんて言われたら、誰だって頭がいっぱいになるよ。元気だしなってアレン。」

レンとHミリアが、アレンにはげますような声をかけた。

「そりだけど……俺に人を見る目が無かったんだよ。あいつは最低な奴だ。……………そう言えば、何でゼイビアックスはライダーを騙してるんだ？だって、凶悪な犯罪者でも探してデッキを手渡せば……その方が手っ取り早いじゃないか。」

アレンが問うたのは、彼が一番気になつていた事だつた。

「そう言えばそうよ。何であの人たちなの？」

その時、レンは立ち上がり、一枚の写真を取り出し、一人に手渡した。一つ折りにされたその写真を開くと、そこに映つていたのは、レンと、そしてアレンとしか思えない若い男だった。笑顔を浮かべ、カメラに向いている。

「これが理由だ。」

「どういう事？これっていつ撮ったの！？」

「……覚えがない。」

「当然だ。映つているのはアダム。前のドラゴンナイトだ。」

レンは、そのアダムとか言う男を指さした。

「アレンに瓜二つじやん！」

「ホントだ……でもどういう事なんだよ！？」

レンは一人から写真を受け取り、話し始めた。

「このグラールとベンタラは、ちょうど鏡映しの関係なんだ。カーデッキは特定のDNAで作動する。同じDNAを持つ人間が、グラールとベンタラに一人ずついる。」

「つまり、ゼイビアックスは変身する人を好き勝手に選べないってことだろ？」

「そうだ。」

「だから人間の欲望を利用するのね。相手によつて姿を使い分けて。そして、罠にかける。」

と、アレンが割つて入る。

「でもそれだと変じやないか？俺はデッキをもらつてない。ウチの中で拾つた。ゼイビアックスは関係ない。」

「無いわけがない。……絶対に。」

とその時だつた。例の気配が、3人を襲つた。レンは行こうとしたが、どうやらけがは思ったより重いようだ。

「無理するな！」

「……いいや……」

「俺が行く。お前はここで待つてろ。

「……なら、任せた。」

ブラッドは、不意に鳴り響いたビジフォンを取つた。

「チャーリー、最高だな、バトルクラブは。最初は乗り気じゃなかつたが、ハマつたよ。」

「観客も喜んでるさ。」

「次の試合はいつだ？」

と、ブラッドは、アレンと同じものを感じ取つた。

「……まあ試合だ。別のライダーと対戦してくる。」

「オイオイトイ、相手はウイングナイトだ！チケットはもう完売してるんだぞ？」

しかし、ブラッドはヘルメットをかぶると相棒に跨り、アクセルを開いて走り抜けて行つた。

「ブラッド！？……クソつ、人間どもは初めて作られた時から進化していないのか？」

アレンの相手は、レッドミニオンだった。しかし今回はかなり強い。おそらく、かなりの場数を踏んでいるのだろう。レッドミニオンが、背中のブームランを振りかざし、アレンに切りつける。何とかかわしたが、すぐに次の一撃が襲いかかる。

が、その一撃は、届かなかつた。いきなり腕を掴まれたレッドミニオンが、横に押し倒されたからだ。

そこにいたのは、トラストに変身したブラッドだった。

「ふつ、ライダーがいるのにモンスターの相手とはな。それでは選手権を勝ち進めないぞ。ゴングはもう既に鳴っている。」

「え？ 選手権って何だよ？」

とその時だつた。倒れたレッドミニオンが、身を起こしていた。

「チツ、待つてろ、こいつは私が始末する。」

ブラッドはデッキからカードを引き抜き、メタルバイザーに投げ入れて挿入した。

『STRIKE VENT』

飛来したメタルバイザーがブラッドの腕に装着され、好かれたりドミニオンが窓を突き破つて吹つ飛んでいく。

「オイ！ 逃げたぞ！ 追わないと…」

「構うな。私はバトルクラブ選手権の選手だ。モンスターなど知らん。」

「どうかしてやる！ あいつらを何とかしないと罪のない人がまたさらわれるぞ！」

それだけ言い残して走り去つたアレンを、ブラッドはじつと見て

いた。

「……何なんだ？」

ビルの非常階段、レッドミー＝オンとアレンはそこで戦っていた。が、今はアレンが優勢だった。ドラグソードが何度も閃き、レッドミニオンが踊り場に吹っ飛ぶ。アレンはそれを見るや、カードを引き抜いて挿入した。

『FINAL VENT』

空中に飛び上がってキックの体勢を取ったアレンを、ドラグレッダーが炎で押す。レッドミニオンは飛び退いて逃げようとしたが、間に合わなかつた。ドラゴンライダー キックをまともに喰らい、その体が砕け散り、浮上したモンスターのエネルギーをドラグレッダーが吸収する。

「ハア、いいじゃん。俺一人の方が向いてるかも。」

ゼイビアックスの要塞では、ゼイビアックスがいら立ちをあらわにしてドリューに話していた。

「大失態の意味が分かるかねドリュー君！？君はキャモをベントし、ドラゴンナイトまで狙つた！」

「事故です！」

「止める！言い訳は聞きたくない。キャモの事は見なかつた事にしてやる、小物だつたしな。だが、ウイングナイトを倒すまで、ドラゴンナイトには手を出すな！」

「どうして俺を信じてくれないんです！作戦のうちです！ドラゴンナイトを利用してウイングナイトを惑わしベントする。その手筈で

した。なのにキャモを送り込むなんてめりやへりやだ！ひつかま
わしたのはあなたですかね！」

「……確かに。キャモを送り込む前に君がしぐじるのを見届ける
べきだった。」

「しぐじりません！」

「だといいがな。私は君に目をかけてやつている。だが、もししく
じれば、代わりの人間は山ほどいる。」

「俺はしぐじりません！」

「なら、行つて來い。仕事のじやまだ。」

ドリューは去つていった。と、その陰から、あるライダーが出て
きた。暗闇に隠れ、その姿はほつきりしない。

「見ていたな？」

「ハイ、將軍。」

「分かつていいるな？」

「ハイ。奴を監視させます。」

HIIリアがリトルウイング飛び込んだ時、そこにいた皆が驚いた。
「HIIリア！お前ケータイ切つただろ！心配して何回電話したと思
つてやがる！」

「ゴメン！アレンが大変な事になつたから切るしかないと思つて…
クラウチは小さくため息をついた。

「ハア、もういい。言え、お前は無事だつて。そして反省します

とな。」

「ゴメンおつせん。あたしは無事よ。とっても反省している。」

「よし、もう行け。」

エミリアは、自分の部屋に行くところで、見覚えのある人影を見た。黄色基調の民族衣装に身を包み、バンダナを締めている。..

「コート！？」

「よお、エミリア。今、話せるか？出来ればアレン達も呼んでほしい。見せたいものがあるんだ。」

「え？ あ、うん。デ・マドでも取ろうか？」

「僕が買つてくれるよ。お前さえよかつたら。」

未確認疾患センターに、アレンは訪れていた。フランクの病室に入ると、彼は車いすに座つてこっちを見ていた。

「父さん、元気か？」

が、フランクは答えなかつた。

「……。一つ分かったと思うと、別の謎が出てくる。カードデータキを俺に渡したのは父さん？ゼイビアックス？わけがわからんねえよ…レンは治療法は無いって言つし…」

と、フランクがこちらを向いた。

「治療法はある、アレン。」

その声は少し、響くよくな感じだった。幻か何かかもしれない。

「お前は思い違いをしてるんだ。」

「！？…それってどういう事だよ！？」

が、フランクは、再び黙りこんでいた。

と、いきなりアレンのビジフォンの着メロが鳴り響いた。

「あ、もしもし？」

HIIリアだった。

『もしもしアレン？コートが帰つてきたんだけど、あんたを呼んでる。レンも一緒に読んで、あたしの部屋に来て。』

「あ、ああ…」

アレンは、フランクに言葉をかけると、そこを去つた。

「また来るよ。治療法は必ず見つけるからー。」

アレンとレンは、HIIコアの部屋に入った。ヒ、レンが、コートを見るやカードトリッキを構えた。

「！？何故お前がここにいる！？」

「何だ！？」

「裏切り者！よくもおめおめと俺の前に姿を現したな！」

アレンは、変身しようとするレンを何とかして取り押さえた。

「何なんだよ！？」こいつはコート・コン・コン・カース！俺の仲間だ

！』

すると、レンは静まつたようだ。

「……そうか、すまない。彼は、仮面ライダーストライクに瓜二つなんだ。」

と、エミリアが明らかに驚いた様子を見せた。アレンにしたってそうだ。

「え！？ストライクって、ベンタラを裏切つたって言う！？」

「じゃあ、ストライクとDNAが同じなのはコートなのか…？」

「3人とも、何の話をしてるんだ！」

「すまない、知り合いと間違えてな。」

それから、アレン、レン、エミリアの3人は、コートと向き合っていた。エミリアの手には、線の様なバイザーをもつた、ハイの様なライダーの写真が握られていた。

「これは？」

「ここに来る途中、クライスってやつから受け取ったんだ。がーでいあんずのさーばーをはつくして拾つた奴で、めーるで送れるしろものじゃないから、渡してくれつて。」

「でもこれって…何だ？」

アレンには、これが何が何となくしかわからなかつた。「がーでいあんずにも分からないつて。ただ、これは全部、先月にグラマシー地区つてどこで撮られたつて。」「グラマシー地区で？」

「彼が現れてから、このあたりから失踪者が出でないんだ。」

すると、いきなりレンが口をはさんだ。

「『彼』じゃない、『彼女』だ。この仮面ライダー、『ステイニング』は女性だ。」

エミリアは、少し顔を下げて呟いた。

「女人のライダーもいたんだ……」

「とにかく、こいつはバケモノと戦つてるらしい。近いうちにまた情報が送られるかもつて。あ、それと、もう一つ。」

コートは腰につけたポーチから、何かを取り出した。

紫色のカードデッキだった。『ブラのような紋章が刻まれている。

「ストライクのカードデッキ！？これを何処で！？」

コートは語り始めた。

「デネブって名乗った男から貰つたんだ。これを使って、『ういんぐないと』に勝つて、死んだお兄に認められるような男になりたくないか？って。でも、怪しかつたから、そこから去つたふりをして陰から見ると、そいつが鎧みたいな姿になるのを見たんだ。なあ、あいつは何なんだ？」

説明を始めたのはエミリアだった。

「そいつはゼイビアックス将軍。グラールを狙つてる、宇宙人よ。アレンと、このレンは、仮面ライダーとしてゼイビアックスと戦つてるの。」

コートは、少し黙つたが、また話しました。

「……そうなのか……だったら、僕もそいつと戦うぞー皆の力になりたいんだ！」

とその時、そこにいた全員の頭の中に、あの音が響き渡つた。

「これは！？」

コートが問いかける。

「入口が開いたんだ！今回は俺が行く！トラストがいるかもしれない！」

アレンはそう言つて部屋を後にしていった。

アレンがついた時、トラストが鳥賊の様なモンスター、バクラーケンの触手に捕らえられて地面に叩きつけられたところだった。

「！！待て！」

アレンは走り寄つてバクラーケンの頭をつかんだが、バクラーケンはすさまじい腕力で振り払うとアレンに触手を叩きつけた。ブラ

ツドはと言えば、余裕の体でカードを抜いていた。

「案の定ライダーが現れたな。」

「おわあつ！」

STRIKE VENTURE

任せろ。

メタルホーンが閃き、バクラーケンに重い連撃が叩き込まれる。と、バクラーケンはいきなり触手を伸ばしてブラッドを捉え、引き

喜七
た

万葉集

「フラットはヘルトに手を伸ばしてガードを抜き、メタルハイサイドで挿入した。

FINAL VENT

「お休みの時間だ！」
タルグラスが突っ込み、バクラーケンに角を叩きつけて弾き飛ばす。と、資材の山をフチまで、サイの様なアドベントヒースト、メ

フレッドはメタルギー

「…トはノーリケテアの前は来ると飛ひあがてその肩は乗
り、メタルホーンを構える。メタルグラスはバクラーケンに向けて突進し、トラストな巨大な角の様に見えた。

卷之三

必殺の一撃・ヘビーブレッシャー』か炸裂し
散った。アレンは物陰から姿を見せた。

「スッゲエや。」

邪魔ものはいなくなつた。君と話がしたい。バトルクラブについて

「ベーレフラグ」ニアリ「河の

「アーティストのためのアート」

「ソラジマは二階がつゝこだわる。」ふーり言ひ進んで

ンを喰らい、アレンの体が大きくよろめく。続けての攻撃は身をかわして避けるが、ブラッドは敵意をむき出しにして迫ってきた。

「話を逸らすな！」

ブランドは親指を下に向け、飛びかかってきた。

第13話 バトルクラブ（後書き）

次回予告

敗者はベントされる事を知ったブラッドは、真実を知るために、ゼイビアックスに詰め寄るが、弱みを握られた彼は戦うしかなかつた。そして、コートを仲間に加えたアレンは、ステイングと遭遇。しかし、ステイングはアレンを逮捕するといい、襲いかかってきた。次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士『勝利か消滅か』

命をかけて、守りたいものがありますか？

第14話 勝利か消滅か（前書き）

エイせん登場！

第14話 勝利か消滅か

「うわあっ！」

振り下ろされたメタルホーンをまともに喰らい、アレンは後ろに吹っ飛ばされた。

「バトルクラブなんてものは存在しない！全部作り話だ！」

「作り話…？あくまでシラを切るつもりか！？」

突き出されたメタルホーンを何とかかわすが、先ほどのダメージが大き過ぎた。アレンはブラッドに寄りかかる姿勢になり、膝をついた。

「…もう戦うのはヤメだ…」

「騙し討ちする手には乗らない。」

ブラッドはアレンを蹴つて仰向けにし、右腕を大きく引いてメタルホーンを突きたてようとした。

「…だから話を聞いてくれって……ああもう…」

アレンがそのままの姿勢で変身を解く。するとブラッドもアーマーを外した。

「子供じゃないか…プロの集団と思つてた…」

「試合なんかじゃない、キヤモを見ただろ！後失礼な事を言つた俺は20だ！」

いら立つアレンにブラッドは問いかけた。

「彼はどうなったんだ？」

「ベントされた。アドベント空間にね。」

「何空間？」

「二つの世界の狭間にある空間だ。一度ベントされたら、もう戻れない。」

「ウイングナイトが行つてた。戦争だつて。」

「ああそうさ！だけど俺は敵じゃない！」

と、ブラッドはそこまで聞いてから背を向けて去ろうとした。

「何処へ行くんだ話は終わつてない！」
「チャーリーに会わないと。」

「レン！あのライダーに会つた。」

が、レンは眠つていた。

「……どうしてうまくいかないんだ…」

とその時だつた。

「アレン、何があつた。」

フランクがいた。

「！？……なあ、ゼイビアックスにだまされてる人に真実を知らせたいのに…どうすればいい…？」

「アレン、それが真実とどうしていい切れる？」

アレンは少しレンの方を振り返つた。と、前を向いた時、もうフランクの姿は無かつた。

プラッドは、携帯にさつきから何度もかけていた。

「チャーリー頼むから電話に出てくれ。」

仕方がないので、留守電を残しておく。

「チャーリー、ブラッドだ。電話が欲しい。」

とその時、ブラッドの背後から声がかけられた。

「ブラッド・バレットだな。」

振り返ると、そこにいたのはドリューだった。口笛を少し吹きながら、持っていたトルクのデッキを見せる。

「バズー力砲の奴だな？」

「仮面ライダートルクでもいい。なあ、ゼイビアックスはお前に何て言って近づいた？ 当ててやろうか。ワイングナイトを倒せば、どん底から助けてやるって言つたんだろ？』

「ゼイビアックス？」

「こいつをくれた奴だ。』

ドリューは自分のデッキを見せた。

「チャーリー・フェザーズか！ でもどうして私なんだ！？ ウイングナイトになんの恨みが…』

「そんのは関係ない。いいか？俺達がゼイビアックスを倒せば、戦争は終わる。お前はキアリアを取り戻し、俺は人生を取り戻す。』

「私はレーサーに戻りたいだけだ。』

「出来るさ。一緒にワイングナイトとゼイビアックスを倒そう。』

「…？ ウイングナイトを？ 君たちは行つてる事がバラバラだ。もうおかしくなりそうだ！』

そして、ブラッドはドリューのもとを去つていった。

「オイ！ ぶっちゃけて話してやつてんだぞ！ 一人じゃ棺桶から足を引っこ抜けねえぞ！ ベントされたいのか！？」

「やつた見つけた！コードが伝えてくれた情報は本当だつたのね！」
エミリアは、パソコンの画面に映し出された新聞の写真を見ていた。そこには、仮面ライダーステイリングの写真があった。記事の名前は、『謎の女戦士 グラマシー地区を守る』だった。

「何で出ないんだよ……」
いら立つブラッドの後ろから、いきなり声がかかった。
「もしもしブラッド君？」
ゼイビアックスだつた。
「だましたな……お前はチャーリーじゃないし、バトルクラブなんてものも存在しない。」
ゼイビアックスは、そこに会つた失踪者のポスターを指さした。

「『』明察。すべての件で私は有罪だ。」

「つつき野郎、ただで済むと思うな。ズタズタに引き裂いてやる。」

「そいつは無理だ。君が濡れ衣を晴らす証拠は私が持つてこれしかない。」

「別の方法を考えるや。」

「えらいぞ、人間は考える葦だったか。だが君に選択肢は二つしかない。」

すると、ゼイビアックスはそこにあつたベンチに飛び乗り、鎧の様な戦闘形態に変身した。

「ベントするかされるかだ！」

グラマシー地区の公園をうろついていたエミリアは、不意に例の気配を感じ取った。

「！？」

と、すぐ近くに、突然ステイングが姿を現した。そして、そこにはいた鳥賊^{イカ}のモンスター、ウイスクラーケンを鏡に蹴りこみ、自らもそこに飛び込んだ。エミリアはカメラを取り出して撮影したが、とれた画像を見てみると、そこにステイングの姿は無かつた。

「あれ？ 遅かったかなあ……？」

と、すぐ近くにアレンが現れた。エミリアには気付かなかつたらしく、デッキを構えて変身する。

「KAMEN RIDER！」

そして鏡に飛び込み、ウイスクラーケンに飛びかかった。

「気をつけてアレン…危ない！」

少し離れたところ、バイクで走っていたレンの行く手を、ブラッドのマシンが塞いだ。

「さあ2回戦だ。」

「退け！キヤモがどうなったかみただろ！」

「ああ全部分かつた。確かに私はゼイビアックスに嵌められた。だがそれでも、いいなりになるしかない。我々どちらかが消えるんだ。そしてそれはブラッド・バレットではない。」

「勝手にしろ！」

そして二人はデッキを向け合い、ベルトが形成される。

「「K A M E N R I D E R！」」

スライド挿入されたデッキが回転し、一人の体にアーマーが形成される。そして、ウイングナイトとトラストは鏡の中に飛び込んで行った。

「こんなことはしたくなかったが、ほかに手がない…」「言い訳はするな！」

「ブラッド・バレットは試練に勝つ！」

ダークバイザーを構えたレンに斬られ、ブラッドの体が高架から

転落する。レンはそこに降り立つてダークバイザーを開き、カードを抜いて挿入した。

『SWORD VENT』

「行くぞ！」

レンはブラッドに斬りつけ、ブラッドは刀身を掴んでレンを押し戻そうとする。

「来い！」

「調子に乗るな！」

レンが斬りつけるが、ブラッドは素早くカードを抜いてメタルバイザーに挿入した。

『STRIKE VENT』

召喚されたメタルホーンで、ウイングランサーを受け止め、返す一撃でレンの体を吹っ飛ばす。

アレン達の方の戦いも、熾烈を極めていた。ウイスクラーケンは、丸腰だったバクラーケンと違い槍で武装している。その攻撃を何とかかわし、飛びあがって壁を蹴るとウイスクラーケンに勢いをつけた拳を叩き込む。よろめいたウイスクラーケンに、アレンとステイングが蹴りを入れた。

「行くぞ！下がつてろ！」

『FINAL VEN』

ドライグレッダーが飛来し、アレンが飛びあがる。そして、ドライグ

ンライダー・キックが炸裂し、ウイスクラーケンは砕け散った。

「ハア…ハア…ハア…お前は誰だ？」

「…私は仮面ライダースティングだ。」

声から察するに、20代後半くらいの女性だ。

「ハア、ようやくまともなライダーに会えたよ。」

と、その時だつた。

「パルム政府、グラール教団、モトウ・ブローグス連合…三惑星最高機関の命により、貴方を逮捕する！」

「ええ？ なんだつて？」

「ハアツ！」

「あ、オイちょっと待てよ！」

第14話 勝利か消滅か（後書き）

次回予告

いきなり襲いかかってきたステイングの正体。それはナギサだった。変声機とステイングのアーマーで正体をごまかし、今まで戦っていたのだった。アレン達は説得しようとすると、レンがエイリアンだと思い込んでいるナギサは、考えを変えようとはしなかった……
次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『仮面ライダースティング』
命をかけて、守りたいものがありますか？

第15話 仮面ライダースティング

いきなり襲いかかってきたステイニングの一撃を、アレンはかわしきれなかつた。突き出された拳をまともに喰らい、盛大に体勢を崩す。

「のわあっ！」

ステイニングはその隙にカードをデッキから抜き、左腕に取り付けた盾形召喚機エビルバイザーに^{ベントイ}挿入する。

『SWING VENGE』

エイの様なモンスターが飛来し、ステイニングの手の中に大型の鞭、エビルウィップが飛びこむ。それを振つて地面に叩きつけると、ステイニングは飛びかかってきた。

「ハア！」

「ちょっと待てって！」

アレンも素早くカードを抜いて、ドラグバイザーに^{ベントイ}挿入した。

『GUARD VENGE』

2枚のドラグシールドが現れ、エビルウィップの一撃を何とかしのぐ。

「ああもうーまだるッこいなあ！」

そこから繰り出される攻撃をかわし、後ろに飛びのいて距離を取ると、ドラグシールドを捨ててアレンは変身を解いた。と、アレンはステイニングがわずかに動搖しているのに気づいた。

「……アレン？」

「え？」

ステイニングが変身を解く。ライトレッドのリングが現れ、アーマーとともに消滅すると、そこに立っていたのはナギサだった。

「ナギサ！？」

「驚いているのはこっちだ。なぜエイリアンに味方しているー！」

どうやら、ナギサはレンがエイリアンだと吹き込まれたらしい。

「… そうか。ナギサ、お前は騙されてる！」

「… いや、騙されているのは貴方の方だ。ウイングナイトはグラルを狙う者だ！」

ナギサを説得するのは、どうやら簡単ではなさそうだ。
「… とりあえず、話してくれないか。お前が、ライダーになつた時の事を。」

「ああ…」

ナギサは語り始めた…

ナギサはレリクスにいた。ワイナールと、誕生日には必ず来よう

と約束していたあのレリクスである。

『…ワインアル、おかげさまで私は元気にやつてるよ。』

『近況報告かねナギサ君？』

『誰だ！？』

ナギサが振り向いた先には、スーシとネクタイの男がいた。

『サイモンズ捜査官。太陽系警察の者だ。君はナギサ君だね？』
サイモンズと名乗った男は警察手帳を見せた。

『…そうだ。』

『单刀直入に言おう、君の力が必要なのだ。』

『どういう事だ？』

サイモンズは、懐からある物を取り出した。

ライトレッドのカードデッキだった。ナギサが手に取ると同時に白っぽい光を放つ。

『今、このグラールは異星人による侵略を受けている。君の仲間を想う心と、このカードデッキがあれば、奴らを滅ぼせる。』

『何故私なんだ？グラール銃見れば、私より強い者など掃いて捨てるほどいるだろうに。』

『我々が調査を行つたところ、適合率が最も高いのが君だったんだ。友達を…ワインアル君が繋いでくれたグラールを…守りたくないかね？』

『！？何故ワインアルの事を知つている！』

ナギサはナノトランサーから愛用の剣、ステイールハーツを取り出してサイモンズの首筋につきつけた。

『こちらにはこちらの伝手があるのでな。グラールで起こつた事の情報の大概は我々のもとに来る。それよりも、聞きたいのは君の答えだ。普段の生活に戻るか…友達を守るか。』

ナギサは、わずかに顔を下ろして、考えた。

『…分かった。要求は？』

『任務内容はすぐにこちらから伝える。…頼んだぞ。』

サイモンズ ゼイビックスは、期待しているような表情をし

て見せた。

『大切な人を守れるならそれは私の誇りだ。』
ナギサが決めた覚悟、それが彼女を『仮面ライダースティング』
にしていた…

「なるほどな…」

アレンは少し考えると、急にナギサの一の腕をつかんだ。

「行くぞナギサ！レンに会おう！」

「あ、ちょっと待て引っ張るな！」

その頃レンは、かなり一方的にブラッドを圧倒していた。続けざまにウイングランサーで斬撃を繰り出してメタルホーンを吹き飛ばし、更に一閃させてブラッドの体を弾き飛ばす。

「グアアッ！」

そしてレンはウイングランサーを倒れたブラッドの首に突き付け、ゆっくりと切つ先を引いた。

が、レンは止めを刺さなかつた。刺せなかつた。槍を持つ手が、小刻みに震える。

「……くそつ！」

それだけいって、レンはその場を後にした。なぜ止めを刺さなかつたのか、自分でも理解できなかつた。

ゼイビアックスはその光景を要塞から監視していた。

「…厄介な事になつたようだな。」

「せめて、変身者の事は伝えるべきじゃなかつたんですか？」

ドリューが相槌を打つた瞬間、ゼイビアックスは彼に向き直つた。

「一番の問題は、お前だ。…私を裏切つたな。」

「何を馬鹿な。何を証拠にそんな事？」

ゼイビアックスが、すぐ目の前のスクリーンに手をかざす。すると、そこに映し出されたのはブラッドに声をかけた時のドリューだった。

『いいか？俺達がゼイビアックスを倒せば、戦争は終わる。』

ドリューの表情は、一瞬で凍りついた。

「全部作戦のうちです！」

「悪い子には…お仕置きだ…」

ドリューは後ろに駆けだし、手近の鏡に飛び込んだ。ゼイビアックスは通信機を取り出し、起動させて叫んだ。

「仮面ライダー』…………始末しろ！』

『…ありがたき幸せ。』

アレンの部屋では、アレン、レン、コート、ナギサの4人がいた。

「もう一度言つぞ。おねえさんは騙されてるんだ！ゼイビアックスが姿形を変えて、おねえさんにカードデッキを渡したんだ！」

「ゼイビアックスの方こそエイリアンなんだ。」

「奴は俺の星の人々を拉致し、次にグラールまで乗つ取る気だ！俺は奴と戦つてる。だから奴は俺にライダーをぶつけてるんだ！」

が、3人でなにを言つてもナギサは聞かなかつた。

「サイモンズが言つていた。エイリアンはうそを吹き込んでくると。私は騙されない。任務を遂行する！」

アレンは少しうらだつて言つた。

「聞けつて！奴はお前の望みを巧みに利用しているーお前はグラルを守りたいんだろ？」

「そうだ！」

「だからゼイビックスはお前に力を与えて、お前にグラールを守つてゐる氣にさせたんだ！」

「全部嘘つぱちだ！目を覚まさないのなら、私が力ずくで…」

「落ち着けおねえさん！」

ナギサがカードテッキに手をかけた時だつた。扉をノックする音、エミリアの声がした。

「アレン、いる？エミリアよ。話があるの開けて。」

アレンは玄関に歩み寄り、エミリアを招き入れた。

「ゴメンエミリア、今はちょっとまづい…」

とその時だつた。ナギサがテーブルの天板に飛び込んで逃げだしたものだ。

「マズイ！」

どうやらナギサはフローダーで逃げ出したらしい。足跡が無いのではコートもお手上げだ。

「別れて追いかけよう！」

「「わかった！」」

アレンとレンはバイクに跨り、コートは勘を頼りに追いかけた。

ナギサを発見したのはレンだった。廃工場の様な所にいた。

「戦う気はない。」

「私がグラールの盾になる！」

「止めておけ。」

が、ナギサはまったく効かず、カードデッキを出してベルトにスライド挿入した。

「K A M E N R I D E R !」

ステイニングに変身したナギサに、レンが歩み寄る。

「俺達と戦おう。」

が、ナギサはレンの体をけつ飛ばした。レンはうまく着地し、デッキを取り出した。

「K A M E N R I D E R !」

レンも変身すると、ナギサが飛びかかってきた。数回の拳の応酬

の後、一人はベンタラに飛び込んだ。

「ウイングナイトは、絶対に倒す！」

ベンタラのスタジアム、アドベントサイクルが2台やってきて、ウイングナイトとステイニングが降り立った。レンはすぐさまカードを挿入する。

『SWORD VENT』

するとナギサもカードを使った。

『COPY VENT』

ナギサの手に、レンと同じウイングランサーが飛び込んだ。それを振りかざして、二人は斬りあつた。

思い斬撃を受け止めたレンの体が大きく後退する。そこに飛び込んだナギサがさらに刃を一閃し、レンの体に直接ダメージを叩き込んだ。

「グアア！」

「ここまでだ！」

ナギサはデッキからエイの紋章^{エンブレム}が刻まれたカードを抜き、エビルバイザ^{バシバイザ}に挿入した。

『FINAL VENT』

飛来したエイのモンスター、エビルダイバーの背中にナギサが飛び乗り、そのまま突撃の体勢に入る。が、レンが抜いたカードを間一髪で使つた。

『ATTACK VENT』

飛んできたダークウイングが、ナギサの体を弾き飛ばした。

「ぬああ！」

吹っ飛んだナギサが地面に叩きつけられ、そこにウイングランサーを構えたレンが迫る。

「ヌ・・・グう…」

が、レンはそこで変身を解き、去つていった。

「…………クソ…………」

ブラッドは、自分の家で最後のレースのビデオを見ていた。脳裏に、様々な光景がよみがえる。

お前のレーサー人生は終わりだ。

さては嵌めたな…

君が濡れ衣を晴らす証拠は私が持っているこれしかない。

(ブラッド・バレットは試練に勝つ…)

君が選べる選択肢は一つしかない。

ベントするかされるかだ！

勝てるかね？

（ブラッド・バレットは試練に勝つ… ブラッド・バレットは試練に
勝つ…）

そして、ブラッドはトラストのカードテックを手に取った。
「…ブラッド・バレットは試練に勝つ。」

第15話 仮面ライダースティング（後書き）

次回予告

ブラッドは腹を括り、レンに再び戦いを挑む。ドリューはアレンに助けを求めるが、アレンはそれを拒否し二人はぶつかり合った。そしてナギサは、レンが自分に止めを刺さなかつた事を考え疑問を募らせるのだった……。

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『ハンティング』
命をかけて、守りたいものがありますか？

第16話 ハンティング

ヒリアは、アレンの部屋に飾つてある写真を見ていた。フランクと、幼いころのアレンと、彼の母と思しき女性が、カメラに向かって笑顔を浮かべている。と、アレンが戻ってきた。悔しげな表情を浮かべている。

「…ナギサに逃げられた。」

「でも、あのナギサが、ゼイビックスに進んで手を貸してるなんて思えないよ。」

「分かつて。彼女はレンがエイリアンで、俺とゴートはレンにだまされてると思ってるんだ。ゼイビックスを完全に信じ切つて、耳を貸してくれないんだ。ベントするのだけは、避けたい。」

「そんな…」

その時だった。二人の頭に共鳴のような音が響く。

「……きっとナギサだ。」

そう言って、アレンは部屋を後にした。

「アレン！待つて！」

ナギサは、公園でサイモンズ ゼイビックスに電話をかけていた。

「サイモンズ…ナギサだ。」

『ウイングナイトとドリゴンナイト、それと、ストライクに接触できたようだな。』

「ああ。言つた通り、たぶらかそうとしてきた。でも、ドラゴンナイトとストライクは、私の友達だつたんだ…」

ナギサは、複雑な心境だつた。倒すべき相手と思っていた3人のうち2人が、自分が守りたかつた人だつたのだ。

『そうか…彼らはグラールより、富や権力を選んだんだ。奴らは人を巧みに操る。おそらく君には親しげにしてくるだろう。だが、ウイングナイト達に隙を見せたら、一巻の終わりだ。』

「ああ…理解している…」

『…ならばよろしい。』

「ああ…」

ナギサは電話を切り、少しうつむいた。
(でも私に止めを…刺さなかつた。)

その時、彼女はアレンと同じものを感じ取つた。

「行かない…」

ナギサは素早く階段を駆け降りた。停めてあつた自分のフローダーに跨り、変声機の付いたヘッジギアをつけてヘルメットをかぶり、現場に向かう。

そこでは、女性が一人、三つ目の猿モンスター、「デッドリマー」に押さえつけられていた。

「キヤアアツ！ああああツ！」

とそこへ突っ込んできたアレンがストレートを見舞つて「デッドリマー」の体を弾き飛ばし、女性を庇つた。

「大丈夫？」

「ええ…」

「さあ逃げて。」

女性が走り去ると、アレンはテッドリマーの方に向き直った。

「双眼鏡つてのはあるけど、お前のは3眼鏡？」

テッドリマーは背を向け、手近にあった窓に飛び込んだ。アレンもすぐに追いかける。

テッドリマーは近くのフェンスによじ登り、アレンの攻撃の手から逃れていた。が、すぐにアレンが飛びかかり、一人と1匹はもつれあって向こう側の地面に着地する。そ、テッドリマーはいきなり背中から拳銃としか思えないものを取り出し、アレンの高周波エネルギー弾を浴びせ掛けた。何とかかわしたものの、テッドリマーは続けざまにエネルギー弾を放ち、接近する隙を与えない。アレンは狭い道に入った。テッドリマーもそれを追いかける。とそこに、電子音声が響く。

『SWORD VENGEANCE』

「こっちだ！」

テッドリマーの頭上にアレンがドラグソードを振りかざして飛びかかつたが、テッドリマーは素早い動きでかわし、入り組んだ所に逃げ込むと、高台に上ってまた銃を構えた。

「またかよ！？」

打ちこまれたエネルギー弾を刀身で何とか防いだが、これでは接近すらままならない。

「クッ！」

ひとしきり牽制射撃を終えて飛び降りたテッドリマーは、そこにアレンの姿が見当たらない事に気付いた。

アレンは近くの鉄骨につかまって姿を隠していた。後ろから飛びかかるれたテッドリマーはもがいてアレンを振り落つたが、アレン

はすぐに間合いを詰めてサイドキックを見舞つた。が、大したダメージにはなつていない。反撃の回し蹴りが炸裂し、アレンの体が地面を滑る。

「クツ…好き放題しやがつて、いい加減にしろよ…」

『FINAL EVENT』

アレンは素早くカードを読み込ませ、地面を蹴つて高く飛び上がつた。弁解するように手を前に出す『テッドリマー』に、ドラゴンライダー・キックが容赦なく叩き込まれ、その体が粉々に吹つ飛んだ。アレンはその場で変身を解いた。と、そこにあつたパイプが一本、衝撃で外れた。

「あ、ごめん。」

シズルはリトルウイングに来ていた。近くに立つビクターがいる。

「クノーさん、ミリアはまだ戻つてきてないんですか？」

「まだだ。彼女に話でもあるのか？」

「彼女の趣味の事だ！のめり込み過ぎて完全におかしくなつてる。鏡から出てきた仮面何とかの話と云い、モンスター騒ぎと云い、普通じゃない！」

すると、クノーが振り返つた。

「普通でなければいけないのか？今まで普通じゃない人が世界を変

えてきたんだ。例えば、トム・レイン博士とか。皆変わり者だ。H.I.I
リアだつて今にきっと大物になるぞ。」

「はあ……そもそもあなたに相談したのが間違いだつたよ……」

シズルはため息をつくと、その場を後にした。

ナギサを探してうろついていたアレンは、彼に向つて立つてている、ドリューを見た。懐のデッキに手を伸ばすアレンを、ドリューは手を出して制する。

「戦う気はない！」

「へえ……俺が背中を向けるまで？」

「聞いてくれ。俺達には、ちょっととした誤解があつたようだ。」

「ちょっととした誤解？ふざけんな。ベントしそうとしたくせに。もう騙されない。」

「ゼイビアックスに騙されてたんだ。ウイングナイトが悪いと聞かされてた。」

「信じると思うか？」

「……俺も、ゼイビアックスに追われてる。俺達が力をあわさなくちゃ奴は倒せない！」

アレンは少し頷いた。

「へえ、そう言つ事か。自分がボスを出し抜くのにじっくりしたから、今更守つてくれって？断るね、身から出た鎧だ。」

ドリューはちょっとアレンの目みると、懐に手を突っ込んだ。

「ああそうかい。言つてみただけだよ。敵は一人もいらない、消えてもらひ。」

「やつぱりな。」

そこに駆け付けたエミリアは、鏡の向こうで、マグナバイザーのエネルギー弾をかわして走り回るアレンの姿を見つけた。

『GUARD VENT』

2枚のドラグシールドを構え、アレンがエネルギー弾をしのぐ。
「どうした！ それで終わりか！」

「今のはほんの小手調べさ。」

ドリューはデッキからカードを抜き、マグナバイザーに挿入した。
『STRIKE VENT』

召喚されたギガホーンから、エネルギー弾が叩き込まれる。

「うわあっ！」

「へつへつへ。」

「アーマーを落とす！」

エミリアは、後ろから近づいてくる人間の気配に気づいた。ナギサだった。近くにフローダーも停めてある。

「何する気！？」

ナギサは無言でエミリアの方を透かし、鏡を見る。そこでは、ドリューがアレンを一方的に圧倒していた。

叩きつけられたギガホーンからエネルギー弾が発射され、アレンの体を大きく吹き飛ばす。

「サップラーアイズ！」

続いてもう1発が、立ちあがりかけたアレンに叩きこまれた。

「ぐああっ！」

吹っ飛んで倒れたアレンは、地面にギガアーマーを据え、ギガラ

ンチャーの砲身をそこに乗せる、ドリューを捉えた。

「ああ、今度はちょっと痛いぞ。」

「……」

「アレンがエイリアンの味方だと本当に思う?」

「いいた」

「だつたら、味方になつてあげて。

「可故味方と言える！」

ナガサキノシタ

「アイツはお父さんを助けたいだけなの。……本当のヒロインに、
カギサはヒリアに詰め寄つたが、ヒリアはひるまなかつた。

ドリューがギガランチャーの狙いをつける前にアレンはカードを抜き、ドラグバイザーに挿入した。

STRIKE VENT

飛来したドラグレッダーが、アレンの指示通り、ドリューのいる方向に炎を吐く。ドリューはギガランチャ一を発射したが、炎に包まれて砲弾が爆発し、爆風をまともに喰らって弾き飛ばされる。

「うあアアアアアアアアアアアア！」

煙が消えると、ドリューはすでに逃げてそこにまではなかつた。

その頃、現場に向かうレンのゆく手を、またもやブリッジが阻んだ。

「…俺達の対決は終わって無い。お前も腹を括つたか？」

「俺は使命を果たす。ライダーとしての使命を…」

「…俺もだ。」

そして、二人はそれぞれのマシンで駆け出した。

ドリューは変身を解き、離れた所まで走つて逃げていた。よろめきながら走り続けたドリューは近くのパイプに寄りかかり、口を開いた。

「…何でだよ…」ヒトナハズジヤ…王になれる筈だったのに……どうでしくじった…」

彼の脳裏によみがえる記憶。それは、彼が、小物の詐欺師から王にまでのし上がるチャンスをつかんだ日の事だった…

少し大きい、倉庫の様な建物。ドリューはそこにある椅子にすわり、すぐ前のテーブルに置いてある、『商売用』のちやちな携帯ビデオフォンを手に取りながら電話をかけていた。

『ああ、今まさに大ヒットの商品だ。：オイオイ乗り遅れてんな、ネットくらい見るよ。：全世界で人気爆発だ。なんせこんな多機能なケータイ見た事無い。電話も、メールも、ネットも、メッセージングも、動画だって……』

が、その『商売用』ビデオフォンは、開いた途端、蝶番が外れて力チャンと音を立てた。

『あ……トランシーバーにだつてなるんだぜ。：見た事無いつて？人気がすごいのさ。どこのティーラーも血眼になつて探してるが、いくら金を積んだからつて市場に無いものは無い。けど俺は、特別ルートで倉庫いっぴ買い占めた。』

そう言つて、ドリューはすっからかんの倉庫を見た。

『お前はダチだから斡旋してやる。1万台買えよ。全部でそうだな……3千万メセタ。こんなうまい話2度とない……』

その時だった。一番近くの扉をガタガタとゆする音が聞こえた。

『……ちょっとそのまま待つてくれ、秘書が呼んでるみたいだ。』

そう言つてビジフォンを保留にしたドリューは、ゆっくり、入口を見た。

ガーディアンズの制服としか思えないものを着た男が数人いるのを見た。

【ユニットフ5、直ちに現場に急行願います。】

【ユニットフ5、了解。】

【北側に回り込め。】

ドリューは青ざめた顔で、『EXIT』と書かれたドアを見た。

『……ちょっと急用が出来ちましたんで、細かい交渉ことはやめにしよう。とりあえず200万メセタ送金してくれ。もう1万代でも何万台でも送るからや。それじゃアな、よろしく。』

電話を切るが早いが、ドリューは走り出した。素早く出口まで走り、扉を押しあけて自分のホールバイクに跨りヘルメットをかぶる。が、その行く手を1台の車が阻んだ。

『クソッ！』

後部座席から、一人の男がやつてきた。

ゼイビアックスだつた。

『失礼、ドリュー君だね。』

『俺の名前はドリューじゃない。誰かと間違てるんじゃないかな?』

『安心したまえ、ガーディアンズじゃない。実は、仕事の話を持つてきた。』

ゼイビアックスは襟を直しながら話を進めた。ドリューはヘルメットを脱ぎ、ゼイビアックスの方を向いた。

『興味あるけど、今はちょっと都合が……』

『ほう。だったら、警察か、ガーディアンズでも呼ぶかな……』

ドリューに、選択の自由は無いらしかつた。ゼイビアックスは続ける。

『質問がある。君は人を意のままに操れると聞いたが、本当かね?』

『…報酬と、相談がある。』

『ある男たちを、戦うよう仕向けてほしい。成功したら、そうだな…君に世界をあげよ。』

『俺は砂漠で救命ボートを売れる。ちょろいもんさ。…だが世界?ちょっと話がでかすぎねえか?』

『んああ…分かりにくかったか、分かった。見せよ。私の力を。』ゼイビアックスは、車の車体に向かってまっすぐ歩いた。と、黒光りする車体に、ゼイビアックスの体が吸い込まれるように消えた。そして、同じ場所から、スーツを着た腕が出てくる。その手にあつた緑のカードデッキが、ドリューに手渡されると同時に光と音を放つ。

『このデッキで…君は世界の王になれる…』

彼が、『仮面ライダートルク』となつた時のことだつた…

ドリューは駆け出して行った。が、彼は、近くの捨てられたテレビの中から、彼を監視するライダーの視線に気づかなかつた。

「……狩りの時間だ……」

そこからそう遠くないところ、光沢のある金属製の扉から出きたアレンは、そのすぐ近くで、ヒミリアと、ナギサを見つめた。

「！？何してんー！」

が。

「心配はない。貴方の言つた事を考えていたんだ。」

ナギサはアレンを見返すと、穏やかな口調で話しかけた。

「……本当に？」

「うん。」

ヒミリアは、少し微笑んで返した。

その時、またもや気配がした。

「……あそこよー！」

そこから数段あがつたところに、レッドリードオングいた。1体だけ、と言つ事は、前に出くわしたのと同じ、それなりに強い奴なのだろう。

「……アレン、一緒に戦おうと言つたら？」

ナギサの言葉に、アレンは少し戸惑つたが、すぐに笑みを浮かべて返した。

「……あー…そうしようつー」

走り出した一人を、Hミリアは静かに見送った。

「わあ…やつづけて。」

「わあ…やつづけて。」

ベンタリに2台のアドベントサイクルが走つて来る。止まつた車体から出でたのは、変身したアレンとナギサだった。

「何処行つた?」

「さあ。」

と、振り返つたアレンは、後ろにレッジミリオンがいるのに気がついた。

「後ろ!」

と、そのレッジミリオンは腕からワイヤーの様なものを伸ばして上の足場にくつづけると、ターザンよろしく飛んできた。

「あ…いや上だ!」

「アレン!ソーデベントを頼む!」

「ああ!」

『SWORD VENT』

アレンがカードを挿入すると、ナギサもカードを使つた。

『COPY VENT』

ナギサとアレンの手に、ドラグソードが飛び込む。ナギサが勇躍斬りかかつたが、レッジミリオンはワイマーを素早く縮めて上に上

がつた。

「降りて私達と戦え！」

とその時、レッドミーイオンが本当に降りてきた。振つてきたレッドミーイオンをかわし、アレンが叫んだ。

「変な事言つなよ！」

「まさか本当に落ちてくるとは…」

レッドミーイオンは背中に巨大手裏剣を出現させ、それを掴んで斬りかかってきた。二人は剣で防ぎ、カウンターを叩き込むが、レッドミーイオンは身をかわして一人に順々に切りつけ、弾き飛ばした。続いて手裏剣を投げるが、それは何とかローリングしてかわす。

「危なかつた…」

『STRIKE VENT』

アレンはカードを使い、ナギサもさつきと同じカードをエビルバイザーに挿入した。

『COPY VENT』

アレンの手にドラグクロール飛び込むと、ナギサの手にも同じものが装着された。

「行くぜ。」

「ああ。」

「はアアアアアアアア……………でえやあツー！」

一人は同時にドラグクロールを突き出し、ドラグレッダーはその数に合わせて二人分の炎を吐いた。そして、直撃を喰らったレッドミーイオンが粉々に爆散した。

「ハア…やつたな。」

「ああ。これからどうする？

「ウイングナイトと、ゴートに会いたい。私はどんな言葉より、貴方達の行動を信じる。」

「分かつた。行こう。」

一方コートは、ナギサを探してほうほう走り回っていた。と、彼の田の前に、いきなりドリューが飛び出した。

「おおつと……お前、仮面ライダーストライクか？」

「だつたらどうした。お前は誰だ。」

ドリューは、持っていたカードデッキを出して見せた。

「……ドリュー・ランシング…アレンを騙した奴か！」

「聞けって！まずは話をしよう！」

「お前の話なんか聞かない！よくも僕の家族を騙したな……許さないぞ！このペテン師が！」

「言わせておけば……」

ドリューとコートはそれぞれデッキを構えた。ドリューのデッキからは緑の、コートのデッキからは紫の電光が、それぞれの腰に伸び、ベルトを作った。

「「KAMEN RIDER！」」

第16話 ハンティング（後書き）

次回予告

レンとブライド、そしてコートとドリューはそれぞれぶつかり合う。その場に駆け付けたアレンとナギサはレンに手を貸そうとするが、そこにドリューのファイナルベントが叫き込まれる。しかし、そこでコートが予想もしなかつた行動をとる…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士『クライス』

命をかけて、守りたいものがありますか？

第17話 クライス（前書き）

今日は時間ないので短いです。

第17話 クライス

ベンタラの工場で、レンとブラッドがアドベントサイクルから降り、お互に向き合つた。

「あの場で俺をベントしておくれべきだったな。代償を払つてもらおう。」

ブラッドの言葉とともに二人がそれぞれのカードを挿入した。

『SWORD VENGEANCE』

「…ブラッド・バレットは試練に勝つ。」

『STRIKE VENT』

そして、飛来したお互いに武器をかざしてお互いに突っ込んでいつた。ウイングランサーが振り下ろされ、メタルホーンが重たい攻撃を繰り出す。

「フン！」

「くあつー。」

アレンとナギサ、そしてエミコアは、そこにつながる窓の前に来ていた。田の前で、レンとブラッドが激しい応酬を繰り広げている。「レンがいる……トラストも。」「どうする？」

「任せろ、俺が話してくれる。」

アレンは窓の前に立ち、デッキを構えた。エネルギーの流れが腰に伝わり、ベルトが形作られた。

『KAMEN RIDER！』

そして、ドラゴンナイトに変身したアレンは腕を下ろし、ナギサ

の方を見た。

「行くぞ。ナギサ、準備しろ。」

そして、窓にアレンが飛び込んだ直後、ナギサもカードデッキを取り出して窓の方に構えた。ライトレットドのエネルギー流がベルトを形成し、ナギサは掛け声とともにデッキをスライド挿入した。

「KAMRN RIDER！」

そして、ステイングとなつたナギサはエミリアに法を向いて小さく頷くと、アレンを追つて窓に入つた。それを見て、エミリアは満足げにほほ笑んだ。

「いいチームになるよ。きっと。」

『CONFAIN VEN』

レンが装着したウイングウォールが、突然消滅した。ブラッドが新しいカードを使ったのだ。

「トリックを使えるのはお前だけじゃない。行くぞ……ハアツ！」
と、突つ込んだブラッドの前に、アレンが割つて入つた
「止める！ゼイビアックスの思うつぼだ！」

「邪魔だ！」

ブラッドはメタルホーンをアレンに叩きつけた。腕で防いだが、ダメージをしきれずに横に倒れこむ。

「アレン！」

と、ブラッドの体に、コピーべントで複製されたウイングランサーが叩きつけられた。そして、ナギサも立ちはだかった。

「フツ、3対1か。だがブラッド・バレットはもっと不利な試練にも勝ってきた！」

ドリューとコートの戦いも熾烈さを増していた。マグナバイザーのエネルギー弾をコートがかわし、ローリングしてカードを抜くと、コブラの頭のような飾りが付いた杖型召喚機ベノバイザーベントインに挿入した。

『SWORD VENT』

螺旋状の刃を持った剣、ベノサーベルがコートの手に飛び込む。その刀身で光弾をしのぐと、横から一撃叩きつけてドリューの体を吹っ飛ばした。

「…本当に騙し通せると思ってたのか？主人の裏をかい？」

「まだやれるや。お前らさえ倒せば！」

『SHOOT VENT』

召喚されたギガランチャーをドリューが発射する。ユートは何とかかわしたが、爆風でわずかに体勢を崩した。が、すぐにベノサーべルを構えなおして向かつて行つた。

「ぬん！」

ブラッドが振り下ろしたメタルホーンは、レンの体をまっすぐ捉えた。ナギサはかわしてカードを抜き、エビルバイザーに^{ペントイン}挿入した。

『FINAL VENT』

が、ブラッドはさつきと同じカードを使つた。

『CONFAIN VENT』

飛来したエビルダイバーが、消滅した。

「何？」

「悪いがヒラメ女史、ファイナルベントは使わせない！ハアッ！」

「ぬあつ！」

ブラッドがジャンプからのショルダータックルを見舞い、角を叩きつけられたナギサの体が大きく吹っ飛んだ。

「どんな手を使っても、試練には勝つ！」

『FINAL VENGE』

「ナギサ！」

「私がやるー！」

「下がつてろー！」

ブラッドのヘビープレッシャーが叩き込まれる。が、その行く先に、アレンが立ちふさがった。

『GUARD VENGE』

「グアアツ！」

勢いで弾き飛ばされたアレンに、レンとナギサが駆け寄った。

「大丈夫か？」

「ああ、何とか。……もつ十分だ！ゼイビアックスのために戦つて何になるー！」

「ゼイビアックスは関係ない！もうこれはブラッド・バレットに闘いだ！」

アレンはブラッドの攻撃をかわし、その体を後ろから抑え込んだ。

「離せー！」

「いいぞアレンー！」

クノーは、リトルウイングの事務所からエミリアに電話をかけた。

「エミリア、遅刻だ。」

『ああ…ゴメンクノーさん、今忙しくて。』

「…また仮面ライダーを追つてるのか。』

『すぐに行くよ！そつちに着いたら全部話すから。』

「ああ。でも急いでくれ。クラウチが騒いでる。』

「ええ。有難う。』

エミリアが電話を切った。そしてクノーは、ちょうど来た顧客の方へ向かつた。

コートは、すぐ後ろでアレンら3人とブラッドが戦っているのを見た。ナギサが、コートの存在に気付く。

「コート！」

「トルクはこっちで相手するーおねえさん達はトラストを何とかしてくれ！」

「ああ！」

ドリューは落ち着いてカードを抜いた。

「ハツ、フルハウスだな。」

『ATTACK EVENT』

地面から、生える様にマグナギガが現れた。

「だが、俺には最強のエースがいる。全員片付けてゼイビアックスの右腕に返り咲いてやる。」

『FINAL EVENT』

マグナギガの全身に火器が展開する。コートがアレン達の所へ飛び込んだ直後、その前身の火器が火を噴き、大爆発が巻き起こった。

「うあああああッ！」

「ヌオオオオオオつ！」

「グううツ！」

爆発が収まつた直後、ソリューは笑いながら去つていった。

「ツハツハツハ！ちょっとやりすぎたかな？まいつか。」

アレンは、ブラッドが立っていたのを見た。が、どこか不自然だと、ブラッドが横に倒れ込んだ。後ろで首筋を掴んでいたコートが、彼を離したのだ。

「ハツ、ありがとう。盾になつてくれて。」

口調が明らかに変わつてている。何かがおかしい。何かが。

「……コート？」

「ぐツ…貴様…何をする…」

「残念だよブラッドくん。やっぱり君は選手失格だつてさ。」

コートが、楽しむような口調でブラッドに声をかける。それは、

アレン達が知つていいユートではなかつた。

「……失格など、するかあ！」

ブラッドは怒りにまかせてユートに殴りかかつたが、ユートは素早く懐に潜り込むとベノバイザーの剣のように細くなつた先端を棍棒の様に叩きつけた。

「ハアツ！」

「グアアア！」

吹つ飛ばされたブラッドが、壁に叩きつけられる。

「ヌグウツー！」

それを見て、ユートはカーデを抜いた。それに刻まれていたのは「ブラの紋章^{エンブレム}」。

「フツ。お前の悲鳴を聞いてみたい……」

『FINAL EVENT』

後ろから、『ブラの様なアドベントビースト、ベノスネーカー^ガのたうちながらやつてきた。

「さあ、祭りの時間だ！」

ユートは両手を広げて助走をつけると飛びあがつた。

「フンツー！」

空中でトンボを切ると、ベノスネーカーが鎌首をもたげる。

「ぐツ…マズイ…」

「でえやあああああああああああああツー！」

ユートが、ベノスネーカーの毒液に押される形でブラッドの方の突つ込みながら、バタ足の様に足を動かした。そして、連續キックがブラッドの体に続けざまに叩き込まれる。

「オおおツーうう……あああああツー！」

爆発が起こり、ブラッドがいた場所が炎に包まれる。そして、後ろに弾き飛ばされたブラッドの体が、削られるように消えていく。

「……ツ…俺は負けない…いつでも勝つ…ブラッド・バレットは…

試練に…勝つんだ…あ…ブラ…あ…

ブラッドは消えた。最後までおのれの負けを認めず、消えた。

二
で
す！

「……おうこりだ所でア、説得すれば一

アレンが怒りをあらわにして叫ぶと、ユートが酷薄な口調で答えた。

「お前達に協力したかもね。
だからベントしたんだよ。セイビアッ
クスのために。」

「どういう事だ……貴方は……まさか、裏切ったのか！？」のグラードルを！」

「ハア？ 裏切つた？ 最初から君たちの側になんか付いちゃ いないよ。」

とその時、レンが口を開く。

……なるほどな。いつからだ。いつから芝居を打つていた。

そ二たな…聖相とせふが消え

「お前が何をやるの？」「うーん、何でもないよ。」

ベンタラのストライクだ。

卷之三

「……エミコ」アリモンスター やライダーの情報をリークしてたやつ

た
！」
」

「そうゆう事。あれは保険だよ。コートじゃないってばれたときの。まさかレンがいるなんて想定外だつたけどね。君達の内部事情は大体分かつたから、こいつして正体を出したつてわけさ。今まで誰かが見てるか持つて思つと一人の時でも要塞の外じゃおちおち素も出せやしなかつたから大変だつたよ。それじゃあね。君たちは後のお楽しみに取つておくよ。はツはツはツはツは！」

ユート クライスは、鏡に入つていなくなつた。アレンは、ただ見ていることしかできなかつた。

第17話 クライス（後書き）

次回予告

正体をあらわにしたクライスは、ドリューをベントすべく戦いを挑む。そして、欺き、騙し続けたドリューはついに：

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士『悪魔の約束』

命をかけて、守りたいものがありますか？

第18話 悪魔の約束（前書き）

今回は戦闘の展開に結構オリジナル入ってます。

第18話 悪魔の約束

アレン、レン、ナギサの3人は、工場のすぐ外にいた。と、ナギサが唐突に口を開いた。

「トラストは……どうなったんだ？ 何処に行つた？」

レンが口を開きかけたが、答えたのはアレンだった。

「ベントされたんだ。」

「？」

「転送されたってことだ。アドベント空間だよ。二つの世界に狭間にある空間で、一度そこに送られると、もう2度と出られない。」

「私も、危うくそうなるところだったのか……」

ナギサは少しうつむいた。が、そこにアレンが声をかけた。

「でも、俺が守つたんだ。」

「ああ……そうだな。ありがとう。」

「礼なんていらねえよ。」

「フフッ、そうだな。……私達は仲間だからな。」

ナギサは一人に向き直った。

「仲間じゃないさ。」

レンが、突然言つた。

「…………え？」

「…………友達だろ？」

レンが、笑いかけた。ナギサは少し固まっていたが、すぐに微笑み返した。

「…………ああ。友達だ。」

レンが右手を差し出し、ナギサもその手を握つた。

「ブツ、友達つて。似合わねえなレン。」

「ハハツ、悪かつたな。」

レンは、ナギサと、近くに歩み寄つたアレンの肩を軽く叩いた。

「アレン、レン、これからどうする？」

「飯でも食いに行くか？」

「良いねえ。」

3人はそのまま、お互に笑いあいながら歩き去つていった。

一方ドリューは、そこから少し離れた所で壁にもたれかかっていた。体の節々が、少しばかり痛んでいた。どうやら、軽傷だと思つていたのは間違いだつたようだ。

「畜生……」

とその時だつた。

「みーつけた。ハハハッ。」

ストライク クライスがいた。ベノバイザーを引っ提げ、首をひねつてドリューに目を向けた。

「ガキ？いや……なんか違うな……」

「ガキなんて失礼だな。これでもベンタラではかなり強かつたんだよ。ま、今もだけどね。」

ドリューは後ずさつた。どうやら、正体に気付いたらしい。

「クツー！」

ドリューは後ろを向いて走り出した。クライスもベノバイザーの剣先を地面に引きずつて後を追つ。

「アハハハハハツ！ やつぱこつでなくちやー！」

が、立ち入り禁止のロープが張られているといひでドリューは立ち止つた。

「何だもう終わりなの子牛ちゃん？ ちゃんと逃げてくれよハンティングがつまらない。」

「……逃げる？ちょっとしたウォーミングアップだよ。……勝負だ！」

ドリューはティックを構えた。

ベンタラに、2台のアドベントサイクルが入ってきた。そこに乗っていたのはドリューとクライス。

「けりをつけよう。」

「ああ……」

二人ともが、カードを抜いて召喚機に^{ベンタラ}挿入した。

『WORD VENT』

『STRIKE VENT』

クライスの手にベノバイザーが飛び込み、ドリューの右腕にメタルホーンがセットされる。

先に飛びかかったのはドリューの方だった。メタルホーンを振り回して襲いかかるが、クライスは慣れた様子でそのすべてをかわすとドリューに1撃叩き込んだ。

「グアアッ！」

よろめいたドリューに、クライスが余裕の体で声をかける。

「君が悪いのさ。主君を裏切ろうなんて考えるからさ。」

クライスは酷薄な口調だつた。コートと回じ声で話している事が、よけいに不気味だつた。

「他人の事が言えたタチか?」

「何とでもいいなよ。さあ遊ぼうよ。もつとだ。もつと感じさせてくれ!」

クライスはベノバイザーを開き、さらにカードを挿入する。

『ATTACK VENT』

突然、後ろからベノスネーカーがのたりながらやつてきた。吐きかけられた毒液を何とかかわし、ドリューも新たにカードを使つた。

『LAUNCH VENT』

「うわっ!?

「へつへつへ、ザマア見る。」

ドリューが、召喚されたギガキヤノンでクライスを撃つたのだ。

「甘いね。」

『STEELE VENT』

突然、ドリューの方からギガキヤノンが消失した。見ると、クライスの方にギガキヤノンが装着されている。

「アッハッハ!喰らいなよ!」

続けざまに叩き込まれるエネルギー弾を何とかかわし、ドリューは横に転がつて新しいカードを使う。

『ATTACK VENT』

「無駄だつて!」

『FINAL VENT』

クライスはコブラの紋章が描かれたカードを使い、トラストの時と同じように空中でトンボを切つてドリューに突つ込んだ。が、ほぼ同時に現れたマグナギガが、突然その腕でクライスを弾き飛ばした。

「うわっ!」

「ザマアねえな。」

「準備運動はここまでだよー。さあ、祭りの時間だ！」

とたん、クライスは今までにない激しさでドリューに飛びかかった。連續する猛攻にドリューは為す術なく、ついにマグナバイザーを弾き飛ばされる。

「うわあシ！」

「アッハッハッハッハ！ 終わりだよリューちゃん！」

FINAL VENT

再び、ベノスネーカーがやつて来る。クライスは飛びあがり、毒液に押されて突っ込んだ。そして、必殺の連續キック、ベノクラッシュは今度こそドリューをまともにとらえた。

ケニアノーノット!!

最後の一撃で弾き飛ばされたドリューは壁に叩きつけられ床にまつすぐ落下した。そこにクライスが歩み寄る。

たの?
」

一覚えてない……！……なあ……お願ひだ……金ならいくらでも出す！」

あそしやお…失敗したふと云ふて言つたんだつたかなあ

1

第三回

いく。か
運命の女神は冷酷だった
トニーの体が少しすこ消えて

「ああ」

アラカルト

ドリューは叫んだが、無駄だった。そして……消えた。

クライスは、ドリューがいた場所に落ちていたティッキを拾い上げ、一言こう言った。

「……サヨナラ、ペテン師君。アハハハハハハハツ！」

レンやナギサとともに家に戻ったアレンは、かかつてきた電話に出た。エミリアからだつた。

『アレン聞いて！さつき突然ストライクがコードを担いで出てきて、『用済みになつたから置いとくよ』って…コードが二入つて…どうなつてんの！？』

「……詳しい事は後で話す。ナギサにも事情を話したいから、コードを連れてきてくれ。」

「う、うん。分かった。すぐ行くよ。」

アレンは電話を切つた。

唐突に、ナギサがレンに問いかけた。

「なあ…あのストライク…クライスとか言つたか？彼は何をしたんだ？」

レンが口を開いた。その言葉は、何処となく重苦しかつた。

「アイツは最初からあんな狂つた奴だつた訳じやない。もとは純粋で、優しい奴だつたさ。」

「……本物のコードみたいに。」

「俺はその本物を知らないが、そうだつたんだろうな。心優しくて、仲間思いだつたさ。だが、何度も戦つていくうちにストライクの力に呑まれて…あんな戦闘狂に…。」

「……そんな…事が…」

「アイツはある日、俺達を敵の前哨基地に案内すると言つた。アイツは優秀なハッカーだったから、俺達はあっさり信用してしまったんだ。そこに行つたのは、俺と、トルク、ステイング、インサイザー、アックスと言つライダーそして、クライスだ。」

「…」

アレンら一人は黙つて聞いていた。全て聞いてないというのに、言葉が、出なかつた。

「だが俺達が案内されたのは前哨基地どころか、ゼイビアックスのアジトそのものだつた。そこで、奴はいきなり襲いかかってきた。クライスと、ゼイビアックスの一人に、あつという間に俺以外の全員がベントされた。俺は逃げるしかなかつた。仲間を捨てて逃げるしか、無かつた。」

「……」

「私達は、そんな奴に…騙されたつて言つのか？」

「気に病む事は無い。アイツは昔から演技が上手かつた。人を騙すのなんか、お手の物だつたのさ。」

短い沈黙の後、一番初めに口を開いたのはナギサだつた。

「……何とかして、ゼイビアックスを止めないと。」

「ああ。俺達、3人で。」

インター ホンが鳴つたのが、聞こえた。

第1-8話 悪魔の約束（後書き）

次回予告

ユートは、自分がクライスにつかまっていた事、みんなの力になりたい事を話した。そして、アレン達は、ナギサとユートに事情を話すのだった。

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『選ばれし者たち』
命をかけて、守りたいものがありますか？

第19話 選ばれし者たち

コートはエミリアの肩を借りていたが、それでも少しうらついていた。エミリアの助けもあり、何とか椅子に腰を下ろした。

「大丈夫かコート？」

「うん……」

「ねえアレン、トラストは説得できたの？」

「……ストライクに…ベントされた。」

エミリアはやはり状況が飲み込めないようだった。

「そのストライクって、まさか…」

説明したのはレンだった。

「ベンタラのストライクだ。名前はクライス。お前にモンスター…やライダーの情報をリークしてたやつだ。」

「クライスが！？ 何でそんな事を？」

「お前の信用を勝ち得るためだろうな。万が一自分がコートじゃないとばれた時の。」

一方コートは、少し置いていかれていた。

「なあ、もんすたーとからいだーとか、何の事なんだ？」

そこでアレンは思い出した。コートはさつき合流したばかりなのだ。

「ああ、それを今から話すよ。」

レンが、説明を加えた。

「仮面ライダーと言るのは、鏡の向こうの世界ベンタラで作られた戦闘システムの事だ。俺、アレン、そしてナギサも使ってる。」

そう言って、レンは自分のデッキを見せた。

「…俺の父さんが、導いてくれて、それで俺は仮面ライダーになつたんだ。」

「お父さんが？」

「ああそなんだ。一年前から行方不明のな。こないだ、突然声が

聞こえるよつになつたんだ。姿まで見えるしな。そして、『テッキを手にしたのもちよつどその位の頃だ。』

「ふうん…」

エミリアは少し頷いて聞いていた。レンは壁にもたれかかり、黙つて聞いている。

「でもその後お前に会つた時よりはましだつたさエミリア。あの時、イカレてるつて思つただろ？」

「今でもそう思つてるわよ。」

エミリアが嫌み交じりに言つた。

「ハハハッ。」

「フフッ。」

その場にいた皆が笑つた。そのすぐ後、エミリアはナギサとコートに説明した。

「最初はモンスターなんて見えなかつたの。あいつらに捕まって、鏡に引きずり込まれてから見えるようになつたの。」

「そのもんすたーつてなんだ？」

コートの質問に答えたのはナギサだった。

「人間を鏡の中に引きずり込んで連れて行く怪物だ。そいつらを操つてる黒幕もいる。そいつについては後で説明するよ。」

「ああ。」

「話を戻すよ。その時現れたのが、ここにいるレン。悪役さ。」

レンは少し笑つて見せた。

「だつてそうだろ？ 最初は強盗か何かかと思つたからな俺。」

「その方が良かつたかもな。あの時俺にカードデッキを渡していれば、この戦いに巻き込まれずに済んだんだ。」

アレンは笑いながら話して見せた。ああだこうだ言つても、レンを今では信頼してゐる事は分かつた。

「俺が状況を把握したくて、誰かさんは何の説明もなしにミスター・タフガイつぱりを見せつけるだけだったもんな。結局俺は、自力でカードデッキの意味を知ることになつた。父さんに力もちょっと

借りてな。」

「俺は何とかして、お前を引きとめたかつたんだ。」

「俺はただ、レンを助けようと思つてさ。」

「オイオイ、うぬぼれもほじほどにしろ。」

「大人ぶつちやつて。」

アレンの言葉に、レンは少し身を乗り出した。

「何なら、大人の俺が鍛えなおしてやろうか?」

皆が、笑つた。コートも、もうみんなと打ち解けていた。と、ナギサが質問をした。

「他のライダーはどうなんだ?彼らにはどうやって出会つた?」

アレンは、不愉快そうな顔で語つた。

「ハア…最悪だよ。仮面ライダーインサイザーに最初に出会つた時、てっきり味方かと思ったらとんでもない。いきなり襲いかかってきたんだ。話しても無駄だったさ。ライダー達は黒幕の正体を知らずに戦つてたんだ。インサイザーはライダーを一人倒すと1億メセタもらえるってや。」

「1億!…つまり、ゼイビアックスは金で釣つてインサイザーを利用したのか?」

「もつと手が込んでる。」

レンが言った。

「父親をダシに使つたんだ。奴はどんな相手にも言葉巧みに餌と鞭を使い分ける。そして罠にかけるんだ。ああコート、ゼイビアックスは黒幕の名前だ。このグラールを狙つてるんだ。」

その時、エミリアはアレンが沈んだ表情をしているのに気づいた。インサイザーの事を思い出していたのだ。その中でも最悪の思い出を。

「その後、インサイザーはレンに負けた。そして、ベントされたんだ。…ああ。コート、ベンツって言つるのは、ライダーが負けると発動する機能の事だ。二つの世界の狭間にあるアドベント空間に送られて、そこから2度と出られなくなる。何が起こってるのか分から

なかつたけど、大変な事があつたんだ。……自業自得だけじゃ。」

「ベントしたのはあの時が初めてだ。気が咎めたよ。」

レンも、つらそうだった。

「私に止めを刺さなかつたのも…」

「まあそれもある。全てのデッキを回収しなければゼイビアックスは止められない。ライダーをベントしなければならないうことだ。だがいよいよ使われている奴らをベントする気にはなれなかつたんだ。だから止めを刺せなかつた。」

「止めをつて？」

コートが質問する。答えたのはナギサだ。その言葉から、罪悪感がありありと読み取れた。

「私は最初、ほかのライダーと同じようにだまされていたんだ。レンが敵だと、思っていたんだ。……それじやあ、トルクは？ 彼はどんな奴だつた？」

「……世界の王。そんな夢見てた。インサイザーほど単細胞じゃなかつた。頭の回転が速かつたんだ。」

「それは言い過ぎよ。」

エミリアが、真剣な表情で返す。

「アイツはずるがしこくて、他人を利用するこことしか考えない。欲しい者のためなら仲間だつて平氣で裏切るのよ。嘘も平氣で付くし。アレンを、ウソの思い出話でだましたの。レンが、敵だつてね。」

「話がそれっぽかつたんでつい…」

「だらうな、コロッと引つかつた。」

「でもそうよ。彼の話には説得力があつたわ。……でも、仮面ライダー・キヤモが現れたことで、トルクの計画は失敗に終わつたの。」

「マトック少佐からの任務がどうとかいつてた。」

「つまり、そのマトック少佐も、たつきレンが言つてたゼイビアックスだつたってことか。」

「俺にもそれ以外考えられない。説明しようとしたけど聞く耳もたずさ。キヤモは栄光の虜になつて、トルクにベントされた。」

「その時俺は、仮面ライダートラストと戦っていたんだ。彼はキヤリアを取り戻したい一心で、それをゼイビックスに利用され、バトルクラブと言う大会があると、信じこんで戦っていたんだ。」

「でも、キヤモがベントされるのを見て、トラストにも話が違うつて分かつたの。その頃あたしは、ナギサを探してたの。もつともその時は正体を知らなかつたけど。友達になつてくれるライダーだつているつて、証明したかつたのよ。」

アレンは皮肉を込めて笑つた。そして、ミリアの説明を肩代わりした。

「最初はフレンドリー過ぎて困つたよ。いきなり襲いかかつて来るんだから。」

「頼むよアレン、私の様な人間には、ああいつ話の方が分かりやすかつたんだ。」

「……」

一瞬、間が空いた。少し気まずかつた。

「とにかく、分かりあえてよかつたじゃん！……そう、信じたいけど。」

「ああ。どんな言葉より、行動が物を言つたんだ。」

「……トラストとも、こいつ風に話したかつたけどな。」

「その、トラストはどうなつたんだ？」

「コードの質問に、重苦しい間が流れた。答えたのはレンだつた。一番、彼がつらそうだった。」

「クライスの事は話しただろ。」

「ああ。僕の振りをして、皆に近付いた奴のことだろ？まさかそいつに……」

「ベントされた。」

アレンはその時、口をはさんだ。

「そう言えば、コードは今まで何をしてたんだ？」

「僕は……そのクライスに捕まつてたんだ。『作戦の邪魔になつてほしくないからね』つていつてた。」

皆、事情はすぐに呑み込んだ。

「なるほどな。本物にうろつき回りされると邪魔になるからな。」

と、いきなりナギサが口を開いた。

「そう言えば気になつていた事がある。何で私なんだ？グラール銃探せばもつと強い戦士だつていただろう。」

「簡単だ。奴は選べないんだ。カードデッキは特定のDNAで作動するんだ。鏡映しの関係になつてているグラールとベンタラには、同じDNAを持った人間が一人ずついる。」

「でいーえぬえーってなんだ？」

やはりコートには伝わりづらかったようだ。

「要するに、このグラールには俺のそっくりさんがいる。そして、ベンタラのドラゴンナイトはアレンに、ステイングはナギサに瓜二つなんだ。クライスもお前とそっくりだ。」

「私のそっくりサンが、ベンタラに……」

「いたが、ゼイビアックスにベントされた。」

ナギサは少し黙っていた。その顔からは、複雑な感情が読み取れた。怒りとも、軽蔑ともみえた。

「だからライダーを騙して……」

「そいつ、許せないぞ、ヒトの命をなんだと思つてるんだー何とかして、ゼイビアックスを止めないと……」

「それに、貴方達がいなかつたら、大切な人を守るどころか侵略者の手先になるところだつた。」

アレンは身を乗り出し、ナギサに声をかけた。

「俺達と一緒に戦つてくれ！」

だが、ナギサは部屋の出口に向かつた。

「……でもやっぱり、私には無理だ。貴方達を2度も攻撃してベントしようとした。一緒に戦う資格などありはしない。……すまない。」

悲痛な言葉を残し、ナギサは部屋を後にした。アレン、レン、コートは後を追おうとしたが、エミリアが制止した。

「あたしが話すよ。まかせて。」

第19話 選ばれし者たち（後書き）

次回予告

エミリアがナギサを説得していると、そこにクライスが現れる。エミリアを逃がし一人で戦うナギサが窮地に陥り、そしてユートが懸けに出た…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『グラマシーの英雄』

命をかけて、守りたいものがありますか？

第20話 グラマシーの英雄

ゼイビアックスは、要塞で巨大な画面に手をかざしてデータを探つていた。

「これじゃない……これも違う……」

と、そこにクライスが戻ってきた。ゼイビアックスのもとに歩み寄り、戦果を報告する。

「裏切り者と邪魔ものを始末しました。」

「厄介ものが減った訳だ。」

「味方も減つていました。ステイング。ドラゴンナイトに、ウイングナイトとつるんできます。3対1は不利に違いありません。」

「まずはステイングを引き離せ、あいつが一番弱い。それに、援軍のめどは付いている。」

「は。」

クライスは不敵な笑みを浮かべた。利用できる人間が増えるのは彼にとってプラスなのだから。そして、去っていくクライスを横目に見て、ゼイビアックスは一言言つた。

「よい狩りを。」

パルムのグラマシーパーク。ナギサはそこにいた。一人でふさぎ

こむ彼女のもとに、カミ・カップ入りのコーヒーを持ってきたのはエミリアだった。

「ほり、飲みなよ。」

「え？ ああ、有難う。」

ナギサはコーヒーを受け取つて少し飲んだが、すぐにまたつむいた。

「……私は弱過ぎるんだ。きっとすぐご飯食ってしまう。」

「あなたは弱くない！ それに優しいじやん。」

「優しくたつて何になる！」

ナギサはエミリアに声を荒げて言い返した。

「グラマシー地区のヒロインじゃない。」

「違うぞ。まんまと騙されていただけだ。」

ナギサは語り始めた。

「ゼイビックスは、私をヒロイン気分にさせた。」

sideナギサ

ゼイビックスは、私にカードデッキを渡した後、基地に案内したんだ。

『スイングベント…ファイナルベント…契約の、カード?』

『カードを選ぶ前に説明しよう。ここからはもう引き返せない。このカードでモンスターと契約してもらひ。』

『契約？なんで？』

『エイリアンと戦う力の源になる。』
ゼイビアックスは私に淡々と説明した。

『だが一度契約したら一生取り消せない。もう一度と戻れないんだよ。……カードを抜き、かざせば、君はモンスターと一心同体になり、故郷グラールを守るヒロインになる。あるいはカードを置いてここを去り、のびのびと元の、平凡な生活に戻る事も出来るが。』
が、その時私はためらわなかつた。それがいい事だつたのかそうでないのか、正直分からぬ。

『私の答えは決まつてゐる。』

そして、私は契約したんだ…

『K A M E N R I D E R !』

最初の戦いはしごれたさ。敵を軽々やつつけたんだ。そして、戦うたびに上達するのも分かつたよ。より強く、より早く。誰にも私は止められなかつた。巨大なモンスターも倒したさ。イノシシみたいな奴だつた。確かにワイルドボーダーとか言つたかな。人を引っ張つていくそいつを見つけて、彼を解放した後私は言つたんだ。

『待て！君、早く逃げろ！』

そして、ベンタラに飛び込んだ。最初は押されたが、突進してくるだけ。カードで武器を出した後、決め台詞を言つてやつたさ。

『3惑星最高機関の命により、貴方を倒す！』

弾き飛ばしてやつたらすぐに怒つて気みたいなものを発射したけど、盾で弾いてやつたら粉々にぶつ飛んだ。

side out

「最高だつたさ。他人の役に立てたんだし、貴方達を守つてると思

つてた。』

『立つてたし、守つてたよ。あんたがいなかつたら、さらわれてたかもしれないし。』

が、エミリアが何を言つてもナギサは浮かない表情を崩さなかつた。

『違う、その気にされてただけだ。』

『違わないよ。』

『……』

ナギサは話の続きをした。

『ある日、ゼイビアックスに次の任務を告げられた。』

sideナギサ

『よくやつた、あの怪物はとても危険だつた。君の勇敢な行動で無数の命が救われた。』

ゼイビアックスの握手に私は応じた。あの時、奴の正体に気付けなかつた。全くな。

『ああ、機会を与えてもらつて感謝している。ただ…眞にこの事を話したらどんなに誇らしく思つてくれるか。』

ゼイビアックスは、親しげだつたさ。とても。

『ああ、そうだな。だがこの戦いは極秘だ。エイリアンが歩き回つていると知つたらパニックが起つ。だが、今はいないワインアル君は、君をさぞかし誇りに思つてゐる事だらう。』

『ああ。決して口外はしない。』

カツ『いいじゃないか。だつてそうだろ? 誰も知らないところで、人の役に立てるんだから。だが、それこそゼイビアックスのつけ目だつた。私は自分が最後の砦のつもりだつた。だが違つた。ゼイビ

アツクスに、利用されていただけだつた。実際、私は操り人形だつた。私は自信がついて、毎晩戦いに出るようになつた。グラールや、大切な人を守るという使命感に燃えていた。ここまで胸を熱くした事は初めてだつた。

ある日、ゼイビアツクスに次の任務を告げられた。

『君の活躍は素晴らしい。君は勇敢かつ優秀な兵士であり、グラールの民も君に深く感謝している。次のステップに踏み出す時だ。怪物の脅威だが、それを裏で操るエイリアンを消さねばならない。覚悟はいいか?』

『ああ。もちろんだ。』

そしてゼイビアツクスは、私に、友達を倒せと命じたんだ。もちろん、その時はそいつらが敵だと思っていたが。

『仮面ライダーウイングナイト、ドラゴンナイト、ストライクの3人は怪物の数10倍も強くなるがしこい。君を罠にかけようとあらゆる手段を使って来る』

『ああ。彼らには騙されない。』

『期待しているぞ。わが、娘の様に。』

『期待にはこたえて見せるぞ。』

その後の事は、貴方も知つてのとおりだらう。アレンと遭遇し、真実を知つた。

side out

「結局私は、いいように使われていただけだ。」

それを聞いたエミリアはいきなりナギサの肩に手を置き、言った。
「しつかりしなさいよ！確かにモンスターはゼイビアツクスが仕掛けたフェイクだつたかもしない、でも！誰かが襲われたのは事実じゃん。あんたはその人たちを助けた、それは事実よ！あんたは、その人たちのヒロインなのよ！」

と、いきなり後ろから声が聞こえた。出来るなら、一度と聞きた

くない声を。

「僕にとつてもヒロインだよ、ハハハッ。メソメソして泣き虫ち
ゃんは大好きや。」

クライスだつた。黒いジャケットにズボン、黒いブーツを身につ
け、バンダナも紺色の無地の物に代わつていて。そしてその顔には、
彼がコートで無い事を証明する一番大きいモノ、酷薄な笑みが浮か
んでいた。

「エミリア、逃げる。逃げるんだ早く！」

「う、うん…」

エミリアを後ろ手に逃がすと、ナギサはデッキを構えた。

「仲間を逃がして時間稼ぎ？泣かせるねえアハハハッ。でもまア、
そう来なくっちゃね！」

挑発するように、クライスも紫のデッキを取り出す。

『『K A M E N R I D E R !』』

現れたリングが、一人にライダーのアーマーを纏わせる。

「勝負だ！」

「望むところやーあははははッ！」

一方リトルウイングでは、クノーとシズルが話していた。シズルは
かなりいら立つていたが。

「エミリアはまだか？」

「しつこいな、まだだ。」

「…また例のモンスターとやらと遊んでるわけか。」

「遊びじゃない、彼女は世界を救うんだ。」

「

だがやはり、シズルには何を言つても無駄そうだ。

「……ハア、じゃあ彼女が戻るまで待たせてもらつさ。全く、僕の脳みそを分けてやりたいよ。」

が、シズルが本を読みだしたとたん、クノーは噴き出しちゃうにならぬのを懸命にこらえながら話しかけた。

「……シズル、分けて大丈夫か？ 本が上下逆さだが。」

「え？ …… あ。」

その頃ナギサは、クライスと戦っていた。モンスターたちとの戦いを思い出して懸命に攻めるが、クライスは余裕のていですべての攻撃をかわし、ナギサの首根っこを捕まえると鳩尾を蹴りあげた。

「グアアツ！ ゲホッ、ゲホッ……」

「んん？ どうしたの？ カエルみたいにゲコゲコ泣いちゃって。喉飴でも舐めた方がいいんじゃない？ 背中もさすつてあげるよー！」

そう言って、クライスは立ち上がりかけたナギサにベノサーベルのナックルガードを叩きつけた。

「アアツ！ ハア……ハア……」

「それともベントして樂にしてあげようかあ？」

とその時だつた。2台のバイクが窓から出てきて、二人の間に立ちふさがつた。運転しているのはアレンとレン、後ろにはエミリアとユートがしがみついていた。

「そこまでだ。」

「んん？ おつと、これはこれはウイング野郎にドラゴン君。君達の相手はこいつらだよ。僕は知ーらないつと。」

クライスが手を挙げて合図すると、窓からレッドミニオンが湧き出できた。

「なッ！」

「こいつらの相手は頼んだよー！」

二人はレッドミニオンに向かつたが、数が多い。ナギサを助けようとしても、壁の様にたちふさがられる。

「どうしよう…あたしはライダーじゃないし…」

と、エミリアは、すぐ横のユートが拳を握りしめ、身を震わせながら目の前の光景を睨んでいるのを見た。

「…ユート？」

ユートは辺りを見渡した。と、彼の眼には資材がいくつか積み上げられた山を見つけた。

「アハハハハッ！もういや、ベントしちゃおーっとー！」

クライスはナギサを蹴り倒すとカードを抜いた。ファイナルベントだつた。

と、その時、ガーンとものすごい音がして、クライスの体がよろめいた。

「いってえ！」

ユートが、近くの鉄パイプを拾い上げてクライスの頭を殴りつけていたのだ。

「……お前かよ、身の程知らずが。」

「無茶だ…生身でライダーに立ち向かうなんて…」

「せっかく殺すのはやめといったのに…じゃあいいや。やっぱり始末しちゃえ！」

クライスがベノサーベルを振りかざして襲いかかった。が、ユートは視認すら困難な斬撃を常人離れした反射神経ですべてかわすと手にした鉄パイプをクライスの鳩尾に叩きつけ、ひるんだすきに懷に潜り込んでベルトに手をかけ、デッキを抜き取った。

「なつ！」

すぐにクライスの変身が解ける。

「オイ！カードデッキを返せ！」

「……嫌だね。これで僕も、皆と戦える…」

ユートはためらわずにデッキを構えた。デッキは電光を発して期待にこたえた。

「KAMEN RIDER！」

デッキがスライド挿入されるとともに、エネルギーのリングがユートの体を囲み、ストライクのアーマーを形成した。

「……チツ！じゃあ、後は頼んだよ、ミニオンズ！」

そう言って、クライスは窓に飛び込んだ。

「ユート！お前凄いな！」

「ああ…さあ、いくぞ！」

ユートはレッジドミニオン達を見据え、不敵な笑みを浮かべて拳を構えた。

それから少しして、クライスは罰を受けていた。

「ハア…ハア…將軍…お許しを…」

念動力で締めあげられてから地面に叩きつけられ、クライスが絞り出すような声を上げた。

「ああ、承知しているさ。君は私の期待にいつも答えていたからね、今回はこれくらいで勘弁してやるつ。ここで処分するのは少しあしい。」

「將軍…」

ゼイビアックスはクライスに歩み寄り、にやりと笑って懷に手を入れた。

「そこでだ、君にチャンスをやうつ。名誉挽回のな。その代わり、次のチャンスはもうない。」

「…ハイ。」

「分かればよろしい。」

ゼイビアックスは、クライスに何かを渡した。

カードデッキだった。水色の地に、鮫のエンブレムが刻まれたカードデッキだ。

「…これはなんですか？こんなデッキ見た事無い。」

「当然だ。私が作ったものだからな。これで、汚名を返上するのだ。」

「……了解。」

そして、クライスはデッキを構え、変身した。

『KAMEN RIDER!』

そこに現れたのは、鮫のライダーだった。鮫の様な召喚機に、水色のアーマーだ。

「さあ行け…仮面ライダーブルースよ…」

第20話 グラマシーの英雄（後書き）

次回予告

ストライクとなつたコートを迎えたアレン達は、ナギサを慰め、仲間として迎える。そこに、そこにブルースとなつたクライスが立ちはだかつた。

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『仮面

ライダーブルース』

命をかけて、守りたいものがありますか？

ライダーデータ紹介PART3（前書き）

ブルースに関しては僕の個人的判断により設定を少々変えていきます。

ライダーデータ紹介PART3

仮面ライダースティング

変身者：ナギサ 日本名：ライア

ベンタラで開発された1・2のライダーのうちの一つ。アドベントビーストはエイ型の『エビルダイバー』。機動性はそれなりにあるが本体スペックがやや劣るため、エビルウイップ（後述）やコローイベントを使用したヒット&アウター戦法を得意とする。ただ使いこなせばそれなりの力は期待できるライダーである。エイの様な召喚機の『エビルバイザー』は小型の盾であり、ワイルドボーダーが発射する気をそのまま跳ね返すほど耐久性を誇る。名前の意味は『棘』。また日本名の『ライア』の意味は『嘘つき』だが、これは、リアとガイの変身者が当初は逆だったため、ガイの変身者である芝浦順の性格にちなんで名づけられた。

スイングベント AP:2000(100t)

エビルダイバーの尾を模した鞭、『エビルウイップ』を召喚。通常攻撃の他、電流を放つて攻撃することもできる。ただ、鞭と言つ形態の問題上、扱いはやや難しい。

コローイベント

他のライダーの武器装備をコピーできるアドベントカード。キヤモの物と違いライダーの姿は模写できないが、アーマーの形が変わると小回りが利かなくなる可能性もあるため、むしろこちらの方が使い勝手がいいと言える。ナギサが最も好んで使用。

アタックベント AP : 4000

エビルダイバーを召喚。水中活動の他、ステイニングを上に乗せての飛行も可能。

ファイナルベント AP : 5000 (250t)

『ハイドベノン』。飛来したエビルダイバーの上にステイニングが乗り、敵に突つ込みながら加速。そのまま波乗りの様に敵に突進する。単純な技だが、うまく決まれば上級モンスターを一撃で爆殺するほどの威力を持つ。

仮面ライダーストライク

変身者：クライス、ユート・ゴン・ゴンカース 日本名：王蛇

ベンタラで開発された1-2のライダーのうち、トップクラスの攻撃性を誇るライダー。アドベントビーストはコブラ型の大型モンスター『ベノスネーカー』。本体スペックがかなり高く、特に接近戦では無類の強さを誇る。カードの少なさを補つて余りある性能を持つが、反面クセのあるライダーになつたため使いこなすにはある程度の熟練が必要。杖型召喚機『ベノバイザー』は付きたてた相手を短時間マヒさせる毒牙が取り付けられ、またサーベルの様に鋭利な先端を利用して剣の様に使用もできる。

名前の意味は『命中、激突』。ちなみに日本名の『王蛇』はボアの別称。

ソードベント AP : 3000 (150t)

ベノスネーカーの尻尾を模したサーベル、『ベノサーベル』を召

喚。斬つたり突いたりではなく叩きつけると言った感じで使用する。刀身は強毒でコーティングされており、ベンタラに破壊できないものは存在しないという。

スチールベント

相手の武器や防具を奪い取るアドベントカード。アタックベントや特殊能力系には効果なし。

アタックベント AP:5000

『ベノスネーカー』を召喚。頭部側面の刃『ベノハーシュ』と口から吐く強酸性の毒液で戦う。

ファイナルベント AP:6000(300t)

『ベノクラッシュ』。助走をつけて飛び上がった後トンボを切り、ベノスネーカーが吐く毒液に押される形で敵に突進。足をバタ足の要領で動かし、敵に突っ込んで連續キックを叩き込む。毒液とキックの2弾攻撃はすさまじい破壊力を誇り、また盾などで防いだとしても連續攻撃で弾いて本体にダメージを叩き込むため、避けるかアタックベントなどで軌道を逸らす以外にかわす手立てではない。

仮面ライダーブルース

変身者：クライス 原作名：アビス

奪つたカードデッキを基にしてゼイビアックスが開発したライダー。アドベントビーストは鮫型の『アビスラッシュジャー』とシユモク

ザメ型の『アビスハンマー』。汎用性の高いドラゴンナイトがベースとなっているが、ウイングナイトの機動性やストライクの攻撃力なども足されており、スペックは特筆すべきレベル。特殊能力系カードもいくつか保有し、どんな相手にも合わせられる。召喚機は左腕に取り付けられたゴバンザメ型ガントレット『アビスバイザー』。衝撃波の様な水流を発射して遠距離攻撃に使うことができる。名前は友達の案。ドラゴンナイトには登場しなかつた。

ソーデベンツ AP:3000 (150t)

アビスラッシャーが保有するのと同じ鮫の歯の様な剣、『アビスセイバー』を召喚。のこぎりの様な刀身は一撃で多数のダメージを叩き込む。

ストライクベント AP : 3000 (150t)

アビスラッシュジャーの頭部を模した手甲型武器『アビスクロー』を召喚。ドラグクローファイアの水流番の様な技『アビスマッシュ』も発動可能。

シートベルト
AP・3000(150t)

アビスハンマーの胴体を模したバズー力砲『アビスキヤノン』を召喚。オリジナル。

スタンベント

アビスバイザーの歯にマヒ効果をつける。オリジナル。

ハナムゲン

他のライダーのカードの効果を無効化する。

リターンベント

打ち消されたカードの効果を再び発揮。

トリックベント

最大8人に分身。

アタックベント

1：アビスラッシュヤーを召喚。5000AP。

2：アビスハンマーを召喚。5000AP。

ユナイトベント

アビスラッシュヤーとアビスハンマーを合体させ、巨大なホオジロザメ型モンスター『アビゾドン』を召喚。原作ではファイナルベントだつた。通常形態『ホオジロモード』、エネルギー弾を撃つ『シユモクモード』、頭から刃が伸びた『ノコギリモード』の3形態を使い分ける。なお、全ての形態を合わせた『ホオジロノコギリシユモクモード』にもなる。

ファイナルベント

1：『アビスクラッシュユ』。アビスラッシュヤーがブルースの足首をつかみ、ハンマー投げの要領で投げ飛ばす。ブルースはそのまま愉悦の様にスピンし、敵に必殺の回し蹴りを叩き込む。オリジナル技。6000AP(300t)。

2 : «アビスファング』。アビスハンマーが発射する特殊なエネルギーをアビスセイバーの刃に吸収し、一撃必殺の斬撃を叩き込む。

オリジナル技。6000AP(300t)。

3 : «アビスマダイブ』。アビゾドンが大口を開けるように変形するとその中に下半身を納める形で合体し、水流を纏つて体当たりする。原作ではアビゾドンを出現させて自在に操る技だが、それではライダーはベント出来ないだろうという作者の判断により内容は変更になつた。7000AP(350t)。

キャラ紹介 PART2（前書き）

クライスもブルースになり、ちょうどいいと思ったので紹介やります。

クライスとコートに関しては紹介をし直します。

コート・コン・コンカース（仮面ライダーストライク 王蛇）モトウブの原住民族「カーシュ族」の少年。ニセモノ作戦の障害になるのを防ぐためにクライスに拉致監禁されていたが、彼が正体を出した直後に用済みになつて解放された。自分がつかまっていたせいでクライスの接近を許しブラッドがベントされたと考え、責任をとるためにクライスからデッキを奪い取つてストライクとなる事を選んだ。

クライス（仮面ライダーブルース アビス）

ベンタラの正式なストライクだつた少年。優秀なハッカー。ベンタラでは文武ともに優秀で将来を嘱望されており、それをアドベントマスターに見込まれてストライクに選ばれた。

元々はコート同様純粋で心優しい性格だつたが、幾度となく戦ううちにストライクの力に溺れて行き、狂気に走つた残虐な戦闘狂に変貌。アドレナリンが昂ぶると笑いだすようになつたのもここから。アドベントマスターを失い敗色が出てきたベンタラを見限り、勝ち組になるためにゼイビアックスの側に寝返つたのち、忠誠の証として4人のライダーをベントした。コートを拉致監禁して彼になり済ましてアレン達の内部事情を探つていたが、有益な情報が得られる見込みなしと判断して本性をあらわにする。しかし、隙をつかれてコートにデッキを奪われたため、ゼイビアックスが作ったブルースのデッキを使い、汚名返上と侵略成功のために戦う。

無実の罪で服役中の兄がいる。

パルムの大資産家の息子だったが、親の金で遊び歩いてばかりである事を憂いした父親に勘当され文無しになる。親の遺産を告げなくなつたことを嘆きつつも地道に働くことはしない、要するにニート。ゼイビアックスにライダーを1人倒すことに1億メセタ出すと約束されてインサイザーとなるが、レンとファイナルベントをぶつけ合つた際にシザースアタックのAPが飛翔斬のAPに負けていたために敗北とみなされ、グラールで最初にベントされる事となつた。

ドリュー・ランシング（仮面ライダートルク ゾルダ）

ニコーデイズに居を構える詐欺師で、太陽系警察とガーディアンズに追われる身だつた。ゼイビアックスに侵略後のポジションを約束されて仮面ライダートルクとなる。アレンを騙したが失敗に終わつたためゼイビアックスから距離を置かれ、更にはグラールだけでは飽き足らずベンタラまでも支配しようと試みてゼイビアックスを出し抜こうとした事がばれて怒りをかい、ブラッドやアレンに拒絶された揚句クライスにベントされる。

グラント・ステイリー（仮面ライダーキヤモ ベルデ）

最強の座に就くことにしか興味がないアンダー・グラウンドの格闘家。勝つためなら卑怯な手段もとる。二つの世界で最強になりたくないかとゼイビアックスにかけられて仮面ライダーキヤモとなるが、ほかのライダーがいるという事を聞いていなかつたためドリューと激突し、不意打ちでギガランチャードを叩き込まれたのちに続けざまにエンドオブワールドを喰らつてベントされる。

ブラッド・バレット（仮面ライダートラスト ガイ）

モトクロスのスター選手だったが、友人のバイクに細工したとい

うスキヤンダルにより、無実の罪でレーサー人生を絶たれる。無実を証明するビデオ画像と引き換えにライダーが参加するトーナメント（もちろん実在しない）への参加を強要され、キャリアを取り戻したいがためにつられて仮面ライダートラストとなる。が、キャモがベントされたのを目撃したことで話が違う事に気付き、さらにキャリアを取り戻すために暴走して命令無視を繰り返したがために用済みの烙印を押されてクライスにベントされる。

クノー・オーガスト

リトルウイング所属の傭兵で、アレンの先輩に当たる。ガーディアンズ時代のエミリアを知つており、彼女を守れなかつた事に責任感を感じて生きてきたが、彼女の感謝のメッセージを聞いて胸のつかえが下りたという。モンスターに関するエミリアの調査に協力する。

フランク・クラウド

アレンの父親。アレンと同じクラウド⁶に暮らしていた。住んでいる家は別々だつたものの息子との仲は良かつた。1年前にモンスターにさらわれて行方不明だつたが、病院にひそかに収監されて保護された。たびたび幻影としてアレンの前に現れ、アドバイスを送る。

第21話 三つの力

「さあ……来いよ。」

ユートは自信に充ち溢れた口ぶりでレッドミニオン達を挑発した。それに乗り、相手は襲いかかって来る。が。

『SWORD VENT』

「うらあつ！」

ユートは素早くベノサーべルを召喚すると、飛びかかるレッドミニオンをすり抜けざまに次々と切り捨てた。万力込めた斬撃を喰らい、一太刀でレッドミニオン達は消滅していく。アレンが加勢する中、レンはナギサを助け起こした。どうやら相当のダメージを負つてしまつたらしい。

「大丈夫か？」

「ああ……」

申し訳なさそうに言葉を絞り出しながら、ナギサも戦いに加わった続いてレンも。

4人ともが、目覚ましい闘いぶりを見せていたが、特にユートはすさまじい。これが初陣だとはにわかに信じ難いレベルだった。まさに的確なタイミングで、拳を見舞い、斬り、突き、叩き、蹴る。伊達に戦士ではなかつた。

一方、見守っていたエミリアの携帯が、突然場違いなほどの陽気な着メロを鳴らした。出てみると、相手はクノーダつた。
『エミリア、ちょっと、来てくれないか。シズルがイライラしながら待つていてる。』

「ええ！……あんの引きこもり科学者が……他人の行動にいちいち難癖つけて……分かつた！今行くから！」

エミリアは乱暴に電話を切り、その場を後にした。

最後の1体が消滅すると同時に、ナギサが膝をついたのは。

「ナギサ！」

「おねえさん、大丈夫か？」

「ああ、何とか…」

変身を解いた彼女の顔から、苦悶の色が読み取れた。

「とりあえず行こう。」

それから、4人はグラードに移動し、広場にいた。重々しい口調で切り出したのは、ナギサだった。

「……やはり、私には無理なんだ。クライス相手に手も足も出なかつた。」

「アイツは強い。仕方ないさ。俺でも1対1では苦戦は必至かもしない。」

レンの慰めるような言葉は、逆効果だつたらしい。ナギサはかえつて落ち込んでいた。

「……きっと簡単にベントされてしまうぞ。」

「ナギサ、俺達にはお前が必要なんだ！」

「私なんて必要じゃない！ユートだつて加わったんだ。私はもう降りるよ…これからは3人で…戦つてくれ。」

「いや、おねえさんは僕達には必要なんだ。」

突然、ユートが口を開いた。辺りを見回し、長めの枝を1本拾つてナギサの前に出す。

「これを折つてみる。」

「ユート…」

「いいから。」

ナギサは枝をひつたくり、パキンと折つて渡した。

「よし。次はこれだ。」

そう言つて、コートは次に3本を拾つた。

「折つてみる。」

ナギサはそれを手に取つた。手の中で力を込めるが、枝はしなるだけで折れない。

「……これがなんだつていうんだ? これでは3人だつて十分だろ…」
が、コートはナギサの言葉を遮り、もう1本渡した。

「これも入れてみる。」

ナギサはそうした。そして、ありつたけの力を込めた。
が、折れない。さつきよりもはるかに手強かつた。

「……もう分かつただろ。確かに3人いれば力はすごいよ。でも、4
人が結束すればもっと強くなるんだ。おねえさん、僕達には、お前
が必要なんだ。おねえさんは僕達をいつでも頼つていい。だからお
ねえさんも、必要な時は僕達に頼らせてくれ。」

コートはナギサの目をじっと見つめた。目をそらさず、話し続け
た。

「…コート…」

「サッすがコート、伊達に戦士やつて無いな。」

「分かりやすい話だな。…ナギサ、そう言う事だ。俺達は、もうチ
ームなんだ。」

彼らの言葉を聞いたナギサの顔は、明らかに明るくなつていた。
「みんな…」

レンはナギサの表情を見てから、拳を握つて前に出した。

「グラールとベンタラに。」

「ベンタラとグラールに。」

「ベンタラとグラールに!」

「…ベンタラと、グラールに。」

アレン、コート、ナギサの3人が、レンと拳を重ね合わせた。レ

ンの言葉通りだ。彼らはチームなのだ。

「次はどうする？肩でもお揉みしましようか？」

「ハハツ、悪くないかもな。」

アレンの冗談に、レンが笑いながら答えた。

一方ゼイビアックスの要塞。ブルースの慣らし訓練を終えたクライスが戻ってきた。

「…新兵を募集するのですか？」

彼の眼の先のスクリーンには、親しげな二人の男が映っていた。

「チョウ兄弟だ。愉快な連中だよ。」

「またろくな連中には見えませんが。」

「そうか？だが今度は逆らつたりしないだろう。軽い連中だ。オツムも軽い。だがそこがいい。」

その画面の中では、二人がバイクのチョーンを切っていた。

「やつたな兄ちゃん。ボロ儲けや。」

「そやな。」

「うし、兄ちゃんはそっちを…」

と、その時だった。そのバイクの持ち主と思しき男が、いきなり叫んだ。

「オイ！何してる！」

が、チョウ兄弟は不敵な笑みを浮かべた。そして、兄ちゃんと呼

ばれた男、ダニーがいきなりその男に回し蹴りを叩き込んだ。

「はああッ！」

「つああッ！」

「ほら、なかなかやるじゃないか。」

「…今度は使えそうですね。」

「新兵に、話をつけてくるとこよ。」

アレン達4人は、工場の辺りを歩いていた。

「やる事がある。」

「またコートにチームワークについて熱く語つてしまひつつのへ

「違う。トレーニングだ。早朝からやるんだ。」

「早朝って何時！？」

レンは、にやりと笑みを浮かべて答えた。

「早朝だ。」

アレンは横を見た直後、コートとナギサは同時に答えた。

「了解。」

「ああ！修行ならやるぞー。」

「…りょうかーい。」

アレンが嫌み交じりに言つた。

同じじる、郊外の高架下で、チョウ兄弟が盗んだバイクを物色していた。

「こんな出たで。」

「なんやねん兄ちゃん、もつと金目のパーク取りいや。」「しゃアないやん…」

その時だつた。彼らの前に、一台の黒い車が止まつた。

出てきたのはゼイビアックスだつた。サングラスをかけてスーツに身を包み、例の親しげな笑みを浮かべる。

「チョウ兄弟つてのは、君達かい？」

「誰やねんお前。」

「警察か！？」

「何だね警察が怖いか？悲しいじやないか。君たちみたいな未来ある若者が、コソ泥か。」

「仕方ないやん、恵まれない家庭つてやつや。けビアメリカンドリームを1グラム掴んだる。」

「1グラムつて…すくなッ。」

アルバートの言葉に、ダニーがすさかずツツ「ハリを返す。

「じゃあ、1キロや！」

「1キロ。もつと大きな仕事をしてみないか？」

そして、ゼイビアックスは本題に入つた。

「実は大規模な銀行破りを計画しているんだが、ある連中が邪魔ですね。君達にそいつらを、引き算してもらいたいんだ。成功すれば、1キロとは言わず、掛け算で何倍もの富が手に入る…君達に商売道具を見せよう。」

ゼイビアックスが開けたアタッシュケースには、数千万メセタもの札束と、二つのカードデッキがあつた。トラの紋章が刻まれた青いデッキと、レイヨウの紋章が刻まれたブラウンのデッキ。

「「スゴッ！」」

「ああ、それとこれば、少ないが、経費の足しにしてくれ。…私

達はチームだ。」

翌朝。斬りつけられたコートが、地面に転がった。

「痛い！だから朝早過ぎるんだって！」

「文句を言うな！」

レンが、ウイングランサーをコートにつきつける。

「よし、ナギサと交代だ。」

「お願いします。」

そして、レンとナギサは拳をぶつけ合つた。が、素手の戦いにいまだになれないのか、ナギサはおされぎみだつた。そして、ウイングランサーを叩きつけられ、その体が大きくよろめく。が、すぐに体勢を立て直すと、近くにいたコートの背中を借りて馬跳びの様に飛びあがり、レンに蹴りを放つた。が、あつけなくかわされ、ナギサは地面に突つ込み、コートは段差の角に膝をぶつけた。

「あいつたあ！脛打つた…いつたい…」

「呼吸が乱れてるぞ。いいかナギサ、後の先を取れ。相手の動きを読む事が出来れば、みだりに呼吸は乱れない。」

「ハイ！」

「よし、もう1戦行くぞ。」

そして、再び、二人はぶつかり合つた。ウイングランサーが突き出されるが、ナギサは側転してかわすと、レンの鳩尾に蹴りを叩き込んだ。

「ウアアッ！……良いぞナギサ。今のは良かつた。」

「ハハツ、まだ脳が寝てるのか？いい加減起きろよ。」

レンは、アレンの言葉を無視してメンバーに言葉をかけた。

「よし、今日はここまでにしよう。」

「ハア…まだ朝飯食つてないもんな…」

そしてその少し後、4人は近くのバー・ガーショップで朝食を取っていた。と、いきなり4人の頭に例の気配がした。

「！…近いぞ。」

「あ、あれ！」

ユートが指さした先では、バイクメットをかぶった男が、レッドミニオンに引きずられていた。

「た、助けて！」

ナギサが進み出ると、3人も後に続いた。

「行くぞ。」

「ああ！」

そして、4人は同時にデッキを構えた。

「「「KAMEN RIDER！」」」

そして、変身が完了するや否や、ナギサは駆け出した。

「私に任せろ！」

「あ、おねえさん…」一人は反対側から言つてくれ、後で合流しよう！」

そして、ユートも走り出した。

その後、ナギサはレッドミーライオンを追つてきた。が、誰もいなかつた。

「何処だ…？」

と、ユートが追いかけてきた。

「おねえさん！一人で突っ走るな！」

「ス、すまない…」

とその時だつた。いきなり、目の前に人影が現れた。

クライスだつた。

「エイちゃんにヘビ少年。おひさ。」

「何しに來た！」

「貴方の『テッキ』はもうない。私達とは戦えないぞ！」

「そうかな？」

クライスは『テッキ』を取り出した。水色の、鮫の『テッキ』を。

「KAMEN RIDER！」

そして、『テッキ』を挿入したクライスの体が、鮫の様なアーマーに包まれる。

「あツハツハツハ！さあ、カーニバルだよ！」

第21話 三つの力（後書き）

次回予告

ブルースとなつたクライスが、4人の前に立ちはだかる。圧倒的な力を見せるクライスは、コートとナギサを追い詰める。そして、新たな仮面ライダーも、誕生しようとしていた。

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『仮面ライダーブルース』
命をかけて、守りたいものがありますか？

第22話 仮面ライダーブルース（前書き）

ブルースのアドベント音声はパイロット版の物を想像してください。

第22話 仮面ライダーブルース

「アツハハハ！2対1か。性能テストにはちょっとビコいや！」

ブルースへとその姿を変えたクライスは、左腕に着いた鮫型召喚機アビスバイザーを、二人につきつけるように出した。

「おねえさん、カードデッキって使える人が決まってるんじや…」「どういう事だ！おまえが使えるデッキはストライクだけのはずだ！」

一人は動搖を隠せない。クライスがデッキを奪われたことで、ゼイビアックス側の戦力は明らかにガタ落ちしたとばかり思っていたのに。クライスはと言えば、首をひとつひねりしてから余裕のていで答える。

「使えるさ。だってこれ将軍が作ったデッキだもん。じゃ、おしゃべりはこの位にじよつか！」

そう言ひや、クライスはデッキからカードを引き抜いた。アビスバイザーの口の部分にカードが差し込まれ、右手で押し込むと同時に、他のライダーの物よりもエコーがかかった音声が響いた。

『 SWORD VENT』

クライスの右手に、鋸の様な剣、アビスソードが飛び込んだ。

「コート！」

「ああ！」

コートはベノバイザー、ナギサはエビルウイングを構えてクライスに突進する。が、クライスは手慣れた動きでかわし、コートの背中にカウンターの斬撃を叩き込んだ、続いて繰り出されるナギサの回し蹴りも余裕で回避し、逆に足を掴んで胴体に蹴りを見舞う。

「ハハハッ、なんだこんなもん？コートくんも、もっと楽しませてくれると思ったのに。まいつか。じゃあ、雑魚は寝てろよー！」

『 SHOOT VENT』

クライスの手に、巨大なバズーカ砲、アビスキヤノンが飛び込み、

放された砲弾はユートを正確な照準で捉えた。

「あああっ！」

ユートの体が吹っ飛ばされ、後ろの壁に叩きつけられる。

「……」入つきりになれたね。もつてこいだ！」

ナギサは必死に立ち向かつた。だが、クライスの戦闘技術にブルースの性能が合わさり、その戦闘能力は異常なレベルへと昇華していた。クライスの刃が、ナギサの体を何回も何回も捉える。

「楽しもうじゃないか！」

アレンとレンは、先ほどのレッドミーオンと交戦していた。背中のブーメランを巧みに操り、二人の斬撃をことごとくブロックして反撃の刃を振るう。

「早くナギサとユートに合流しないといけないのに……」

「くそ、ちょこまかと……」

レッドミーオンがブーメランを振りかざして向かつてくる、だが、「やああっ！」

アレンのドラグソードと、レンのウイングランサーが、飛びこんできたレッドミーオンに正確な斬撃を浴びせ掛けた。体勢を崩し、壁に叩きつけられたレッドミーオンが、靄の様にかき消える。

ユートはダメージからようやく立ち直り、クライスに後ろから迫った。だが、クライスはナギサをけつ飛ばし、その隙に新たなカ一

ドを装填した。

「ハツハー、そつはせないよー。」

『ATTACK VENT』

次の瞬間、鮫のモンスター、アビスラッシュジャーがコートを後ろから組みふせた。

「わあっ！」

「アハハハハッ！……で、君はどうした？もう疲れたの？」

「……待ち疲れたのさ。早く来たらうどうだ！」

クライスは刃を振るつて期待にこたえた。エビルバイザーで攻撃をしのぎながら、ナギサは先ほどの訓練を思い出していた。

後の先を取れ。相手の動きを読む事が出来れば、みだりに呼吸は乱れない。

「どうしたのナギサちゃん？掛かってきなよホラホラ。」

ナギサは右胸を抑え、静かに言い放った。

「お前こそどうした。戦いたいならかかるつて來い。それとも、負けるのが怖いか？」

「ハハツ、いいねえ、高まるよー。」

クライスはアビスバイザーを突き出し、鋭い牙状のパーツを叩きつけようとした。しかしナギサは回し蹴りでその攻撃を払うと、もう一度体を反転させ、振り向きざまのローキックでクライスの鳩尾を蹴りあげた。

「がああっ！……なるほど、やるじゅん。エクササイズは卒業だ！」

言つなりクライスは襲いかかってきた。しかし、今まで彼が遊んでいた事は明らかだ。形勢はまたもやひっくり返った。ナギサはビルウイップを叩き落とされ、続けざまの斬撃を叩き込まれて大きくよろめいた。

「今度のはちょっと痛いよ?」

『STRIKE VENT』

クライスの右腕に、アビスラッシュシャーの頭を模した、アビスクローが装着される。すると、コートと戦っていたアビスラッシュシャーは現れたアビスハンマーと合体し、大型のサメモンスター、アビソドンになる。

「はああああ、おりやあ！」

アビスクローが突き出された時に、アビソドンが水流を吐きだす。あまりの勢いに一人は弾き飛ばされ、地面にぶざまに倒れた。

「良いじやん。少しは見直したよナギサちゃん。でも、君はもう息を引き取る。」

クライスがアビスソードを振り上げる。が、その攻撃はコートのベノバイザーに防がれていた。

「アア？往生際が悪いなあ、チビスケが。じゃあまず君から……」

その時だった。いきなり、クライスに斬撃が叩き込まれる。

「があつ！」

レンだった。ウイングランサーを構えてクライスを見据える。続いてアレンもやってきた。

「チツ！またこのバターンかよ。じゃあネ。」

「オイ、待て！」

クライスは近くの鏡を通り去つていった。

「アレン、ナギサとコートだ。」

「そうだな…おい、大丈夫か？」

「ああ、何とか…」

「う…ッ…」

その後、4人は変身を解いて近くの通りを歩いていた。

「なあ…さつきは一人で別行動を取ろうとしてすまなかつた。」
ナギサが、謝罪を口にする。答えたのはレンだった。

「力を合わせるんだ。4人が協力しなければ俺達は勝てない！」
「ああ、もう忘れないさ。許してくれ。」

「分かつてくれればいい。」

ナギサが差し出した手を、レンが握った。
「よし、じゃあ皆でピザでも食おうぜ。」

「了解。」

「そうだな。」

「ホントか？」

「ああ。ただし、ゴートはいい加減、遠慮を覚えろよ？」「アレンが笑いながら答えた。

「分かつた！」

一方その頃、要塞にゼイビアックスが戻ってきた。クライスが、氷嚢を持って座っている。

「新しい仲間を待てなかつたようだな。」

「頭痛の種です。ウイング野郎とドラゴン君、それからゴブランちゃんにまた邪魔された。」

「…だが、その心配は無用だ。紹介しよう。」

すると、二人のライダーがそこに現れた。片方は青いデッキベルトにつけたトラのライダー、もう片方は巻貝の様な角をつけ、肩にファーの様なものがついたレイヨウのライダーだ。

「仮面ライダーアックスと仮面ライダースピアだ。仲良くな。」

「今度は使えそうですね。」

アックスとスピア　　ダニーとアルバートはクライスを見据え、クライスも二人を見据えていた。

第22話 仮面ライダーブルース（後書き）

次回予告

レンの前に現れたチョウ兄弟。だがレンは二人に肉弾戦を挑んで圧倒、素人呼ばわりされたチョウ兄弟はリベンジの炎を燃やす。一方、ナギサは自分の力不足を自覚し始め、苦悩し始めていた。

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『チョウ兄弟』

命をかけて、守りたいものがありますか？

第23話 チョウ兄弟

アレンの部屋にピザが届くのに、そう時間はかからなかった。ちなみに注文したのはソーセージで、耳にチーズが入ってる奴だ。

「ありがとう。」

「ピザ…ピザ…」

眞面目にお礼をを言つナギサと、はしゃぐコート。レンはどういえば、ピザを手にとつてしげしげと眺めていた。

「ベンタラにはこうこうピザとか無かつたのか?」

「ああ、無かつたな。」

レンはコートの問いに答えると、少しニヤリとしてこう付け加えた。

「美味しいピザならあつたんだが。」

その瞬間、アレンとナギサは噴き出していた。

「ふふつ。」

「聞いたか?レンがジョーク言つたぜ。」

「ははは。」

と、ナギサが突然、レンにたずねた。

「そう言えばレン、貴方は仮面ライダーになる前は何をしていたんだ?」

「きっとオニキョウカンだ!」

「犬の散歩屋とか?」

「靴の販売員?」

コート、アレン、ナギサの答えを聞き、レンは少し笑つてから返答を返す。

「実は、ライダー一筋でね。幼いころ、仮面ライダーに選ばれたんだ。」

「そんなときから、なのか?」

「戦士になるつて、両親は反対しなかったのか?」

アレンの言葉を聞いて、思わず不思議そうな顔で返したのはコートだった。

「何言ってるんだ、戦士に選ばれるのは名誉な事だろ?」

「コートの言うとおりだな。ベンタラでは、仮面ライダーに選ばれるというのは、最高の栄誉と、評価を意味する。」

「スッゲエな、俺とは大違いだ。学生の頃はトラブルメーカーだったよ。問題ばっか引き起こしてた。」

「何をしたんだ、貴方は?」

「悪事つてほどはしてないよ。ひどいのは一度、フットボール場でBMXを乗りまわした。チヨー楽しかったよ。」

コート以外は、思わず笑っていた。

「なんだ、そのびーえむえつくすつて?」

「バイクだよ。ホイール付きの。」

「それだけじゃないだろ?」

「ただ、試合中だつただけで。ウチの学校は選手が一人多いって、5ヤードのペナルティ喰らつてさ。」

と、アレンは少しうつむいた。

「正直、退学になるかと思つた。けど、父さんが土下座までして校長に頼み込んでくれたから、助かつたんだ。」

「へえ、父親が、土下座までして…」

「後でゲンコツ3発は喰らつたけどな。でも、父さんが、ピンチから救つてくれたんだ。コートはどうなんだ?なんかやらかした事あるか?」

「無いよ!僕はいい子だつたからな!」

コートの答えはかなり快活だった。と、レンはナギサが少し表情を曇らせてしているのに気づいた。

「ナギサ?」

「ああ…ナギサの過去にはあまり触れないでやつてくれ。」

「あ、いや、いいんだ。…ピザをありがとう。また明日。」

「あ、もう帰るのか。ああ、それじゃアな。」

「

「また明日ー」

「じゃアな。」

ナギサは部屋から出た。閉まるドアの音が、妙に重く聞こえた気がした。

ナギサは、何処を指すでもなく、フローダーを気の向いたままに走らせていた。

相手の動きを読めれば、みだりに呼吸は乱れない。

やるじゃないか、見直したよ。けど、君たちほもつ息を引き取る。

ナギサが思い出していたのは、レンとの訓練、そして、クライスと戦い、ぶざまに負けた記憶。

彼女は近くの公園でフローダーを停め、眼下の街並みを一望できる丘まで来た。ヘルメットを抱え、そつと咳く。

「見ていてくれ、ワイナル。私にも、出来るよな。……やってみせる。」

ナギサが去ったすぐ後、レンは一人に声をかけた。

「ずっと考えてた。俺達にゼイビックスが倒せるかは分からない。仮面ライダーに未来があるかも分からない。だが、もあるのなら、お前達も加わってほしいんだ。」

「え？ どういう事？」

「……正式なベンタラのライダーとして、迎えたい。本物の、仮面ライダードラゴンナイトと、仮面ライダーストライクになるんだ。」

レンの言葉に、二人は思わず耳を疑つた。

「…認めてくれるのか、僕らを？」

「光榮だよ…」

が、レンの言葉には続きがあった。

「決める前に最後まで聞け。この戦いが終わったら、ベンタラに来てもらう。12人のライダーのメンバーとして列せられる。グラ一

ルとはお別れだ。お父さん、村のみんな、リトルウイングの人たち、友達、ほかの人ともだ。」

「……」

「確かに、考える時間がいるぞ……」

「ゆっくり考えるといい。……また明日。」

「じゃあ、僕もそろそろ……」

「ああ、また、明日……」

2人が去つていった直後、アレンの頭には様々な思いが去来していた。棚にある、父の写真に目を向け、言葉を絞り出す。

「どうしよう、父さん……」

レンの言葉は重かつた。戦士としての栄誉か、皆か……

そのすぐ外、並んでいた3台のバイクに乗っていたのは、ダニー、アルバート、そしてクライス。前を走り抜けていくレンのバイクを見て、ダニーがに奴きながらクライスに話しかける。

「アイツやな。」

「そうだよ。」

「なんや弱そうやな、あんた一人で十分とちやうん？」

「アホかアルバート、俺らプロやろ。」

「ほら、みただけやん。」

「一九二〇年」

クライスは、なだめるように言った。

「プロの仕事ぶりを期待してるよ。ハハッ。」

「任しどき、すぐに片したるわ。」

「せや、ついでに後の錢先積んどいてや。」

「アリバート！」

「解いてみた。」

単純な双つdigit。将軍がああ二つの指令かる。

車線が狭いから、料金があるのに、子供が乗る
バイクで走つていったチョウウ兄弟を見送ると、クライスはその顔

に残忍な笑みを浮かべ、思つた。

「オツムは軽いが、そこがいい、か……」

268

ダニーが、アルバートに向き直つたレンの背後からいきなり飛び蹴りを見舞つた。構える暇すら与えられなかつたレンはアルバートの方によろめき、そのまま蹴りを受けて吹っ飛ばされる。しかし、すぐに体勢を立て直して、近づいてくる一人を見据える。

「ほな俺は？知つとんか？」

ダニーがそう言つたのを合図に、一人がデッキを構える。しかし、レンはそのデッキを素早くひつたくつてかざした。

「一人とも知つてゐる。……素人だな。」

「返せや！」

ダニーのパンチを、レンは的確にいなし、体を素早く反転させてアルバートの蹴りをかわす。パンチのふりをしてスピアのデッキを目の前にかざし、アルバートが気を撮られているウチに接近して来たダニーも蹴飛ばす。不意にレンが、スピアのデッキを空中に放り投げた。アルバートはキャッチしようと飛びあがつたが、その隙にがら空きになつた胸に蹴りを叩きこまれ、彼の目の前に落下したデッキはレンに蹴飛ばされて最寄りの窓に突つ込み、ベンタラ目掛けてしまつしぐら。

「弟をコケにしよつたな！」

ダニーがいきり立つてレンを蹴るうとするが、全て軽い身のこなしでかわされる。そして、レンはアルバートをベンタラに蹴り込むと、自らもダニーを押さえ込んで窓に飛び込んだ。

ベンタラに到着したレンは密着していたダニーを蹴り飛ばし、落ちていたスピアのデッキを掴んで走り去つていつた。

「待たんかい『コラあ！』」

兄弟の声がハモる。

「逃がすなや！」

「解つとるがな！」

ダニーはレンをまつすぐおい、アルバートは反対側から迫つた。すぐにレンは挟み撃ちにあつたが、二人の拳と蹴りをかわして横にローリングすると、兄弟を見据えて問いかけた。

「ゼイビアックスに何を約束された?」

「分け前や。史上最大の強盗をやる。」

「そのためには、あんたが邪魔なんや。」

「言つておくが、ゼイビアックスはお前らを騙すつもりだ。出来れば仲間になつてほしいが、何でだらうな、心からはそう思えない。」

「そんなもん知るか!」

「俺もだ。」

と、レンはいきなり一つのデッキを後ろの吹き抜けに放り投げ、構えの姿勢を取つた。肉弾戦に徹するつもりらしい。

「あ。」

いきり立つた兄弟は舌打ちしてレンに飛びかかったが、ダニーはカウンターのパンチを叩き込まれて柱に頭をぶつけ、アルバートは正面から組みふせられて吹き抜けに投げられ、積み上げてあるダン・ボウルの上に落下する。レンはそれを見ると、踵を返して去つていった。

「…素人どもが。」

チョウ兄弟はデッキを回収してレンを追いかけたが、レンはバイクに乗つて去つて行つたあとだつた。彼らも自分のマシンに乗ろうとしたが、2台の車輪が一つに縛られていた。それも片結びで。

「縛りよつた!」

と、窓の中からクライスが出てきた。ビリヤー、監視していたらしい。

「ハハッ、どうだつた? プロのお一人さん?」

「次は仕留めたる。はろてもるた分」

「働くで、きつちり。」

アルバートはクライスを睨みつけ、もう一度繰り返してから去つていつた。

「きつちつや。」

アレンがナギサを見つけたのは、リトルウイング宿舎からそう遠くないところだつた。

「ナギサ、こんなところにいたのか。今平氣？」

「あ、アレンか。あア、平氣だ。……なあ、こないだは、帰り際に気まずくなつて、すまなかつた。」

「良いよ、別に気にしてないし。」

「……ワイナーは、今の私を見たら……」

「きつと誇りに思つてくれるさ。グラールを救うなんて意義のある事だしな。」

「同じ事を考えてた。」

とその時だつた。頭の中に、例の気配が響く。

「……行くぞナギサ。」

「ああ。」

一人はお互に頷き、デッキを近くの窓にかざした。赤とライトレッドの電光が、二人の腰でベルトを形成する。

「「KAMEN RIDER！」」

そして、アーマーが形成され、仮面ライダーへと変身完了するや、窓に飛び込んでいった。

ナギサは、触手の様な物にからめとられ、自由を奪われていた。

敵は鳳凰型の上級モンスター、ガルドサンダー。

突如、アレンのドラグソードが、ナギサにから待つていた触手を切断した。ナギサは身が自由になるや否やガルドサンダーに飛びかつたが、ガルドサンダーは胸から炎を吐きだしてナギサをけん制すると、空中に飛び上がって炎の嵐を爆撃機の様に見舞つた。

「うああっ！」

が、ナギサはすぐに体勢を立て直して、ガルドサンダーに突っ込んでいった。

「待てナギサ！ チームワークだ！」

「私にやらせててくれ！ モンスターに手を焼いていては、クライスには勝てない！」

『COPY VENT』

ナギサの手にドラグソードが飛び込むと、彼女は見事な剣技でガルドサンダーを追い詰めた。数回の剣撃の応酬で、あつという間に形勢が逆転する。

「見ていてくれ、ワイナール！」

『FINAL VENT』

飛来したエビルダイバーに、ナギサが乗る。ガルドサンダーも炎を纏つて突つ込んできたが、ナギサの繰り出したファイナルベント、ハイドベノンはガルドサンダーを直撃し、ガルドサンダーは粉々に吹っ飛んで行つた。

「ハア…ハア…クツ…」

「ナギサ…無茶するからだ。」

「あ、ああ。」

アレンとナギサは、はいつてきたのと同じ窓から出てきた。

「大丈夫？」

「ああ。」

「本当に？」

「ああ、大丈夫だ。」

「そつか、分かった。」

「あ、オイ…」

ナギサは、去つていくアレンの背中を見ながら、自分の力不足を自覚し始めている事に気付いた。

未確認疾患センターの病棟にはいてきたアレンは、ひかれたカーテンの向こうにフランクがいない事に気付いた。

「なあ、父さんはどこー!?」

と、アレンは、空っぽのベッドに何かが置かれている事に気付いた。

それはレリーフの入った丸い金属板だった。凶暴な鮫が描かれた、

丸い金属板。

「クライス……！」

第23話 チョウ兄弟（後書き）

次回予告

クライスはナギサに取引を持ちかけるが、交渉が決裂して戦いへと持ち込まれる。その闘いから途中で逃げた事に自責の念を抱くナギサは、次は皆で挑もうとする。しかし、圧倒的な力を持つクライスと、新たに加わったチョウ兄弟に4人は追い詰められ、そして、ユートに向けてクライスの無情なファイナルベントが放たれる。.

次回 仮面ライダー・ドラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『セン

パーフェイ』

命をかけて、守りたいものがありますか？

第24話 センパー・ファイ（前書き）

この話は僕が原作で一番好きだった話です。

第24話 センパー・ファイ

ナギサは近くの階段に座り、ずっと何かを書いていた。すると、後ろから声をかけられた。

「大丈夫か？ 何だか辛そうだな。」

「コート…？」

ナギサは振り向いた。が、そこにいたのはコートではなく、クライスだった。コートと瓜二つの顔に、わざとらしく友好的な笑みを浮かべている姿は、彼の本性を知っているナギサをかなりイラつかせた。

「クライス…！」

「落ち着け、良いから落ち着けって。戦う気はない。話がある。」

そう言ってクライスはナギサのすぐ横に腰を下ろした。ナギサは、ステイングのデッキを体の後ろで持つて、クライスと向き合った。「君が思うように戦えないのは、欠片を失つたからだろ？…君は力を取り戻せる。」

「何を言つても無駄だ！ゼイビアックスの手下に耳は貸さない。」

「良いから。将軍に、君を騙すのは無理だと言つた。仲間想いの君を騙すのは。そうだろ？」

「そうだ！」

「戦いの本当の意味を説明すべきだった。将軍のテクノロジーについても。」

ナギサは一瞬、その話に関心が向かった。が、彼女に気を変えるつもりはなかつた。

「テクノロジー？ どういう事だ。」

「あの方の技術力を持つてすれば、僕達人間の体なんかどうにでもなる。」

「引き換えは何だ！」

「別に何も。ただ、ウイングナイトをちょっとね。」

「ちょっととはどういう事だ！」

ナギサは、クライスがいつまでたっても本題を持ち出さない事に、内心かなり腹を立てていた。

「アイツともっと、親しくなつて欲しいんだ。気を許して隙が出来たら…」

クライスは懐からブルースのデッキを取り出し、カードを一枚抜いてナギサに見せた。青と金、二つの鮫の紋章が刻まれているそのカードが何かは、すぐに分かった。

「ファイナルベント。晴れて君は力を取り戻せる。」

「それって、世界全体を売り渡せということだらう。」

「気にするな。あっちの世界の話ぞ。」

それを聞くや否や、ナギサが立ちあがつた。クライスに向き直り、話します。

「センパーファイと言う言葉がある。お前は知らなくても無理はないだろうな。ある人が教えてくれた。」

クライスは首をかしげた。言つている事が分からないという様子だ。

「仲間は裏切らない。それが私の信念だ！」

そしてナギサはデッキを取り出し、クライスの方に突きつける様にして構えた。ライトレッドの閃光が迸る。

「はあ、あつそ。」

「KAMEN RIDER！」

ナギサが变身すると、クライスもデッキを取り出した。

「懲りない奴だね。」

クライスのデッキから、青い光が湧き出た。

「KAMEN RIDER！」

デッキがスライド挿入されると、青いリングがクライスの体の周りを回り、ブルースのアーマーを装着させた。

「アッハハハ！さあ、カーニバルだ！遊んであげるよ！」

「来い！」

「あーあ、本気で闘るつもり？」

「他人の心配か…自分の心配をするんだな！」

「ハッ、親切で言ってあげたのにさ！」

そう言うが早いが、クライスはアビスバイザーをいきなり突き出した。口の部分から水流の様な衝撃波が発射され、ナギサの体をまともにとらえた。

「グアアツ！」

その隙にクライスはナギサとの距離を一気に詰めた。かわす間もなく、ナギサの体に幾度も幾度もアビスバイザーの牙が叩きつけられる。

「ハッ、何が信念だ。せっかくあげたチャンスを無駄にしたね、アハハ。」

そして、クライスは一枚のカードを抜いた。先ほどナギサに見せたのと同じカードだ。

「タイムアップだよ。」

が、ナギサもカードを抜いていた。

「じゃあネ、ナギサちゃん。」

『FINAL VENT』

「クツ！」

『ATTACK VENT』

すると、突然飛来したエビルダイバーがクライスに後ろから衝突し、その体を大きくよろめかせる。ナギサはその上に乗ると、凄まじいスピードで遠くへと消えて行つた。

「オイ、戻つて来い！チツ、遊び甲斐の無い奴だ！」

エミリアの家。シズルはエミリアがそこにいるのを見つけたが、
はいるとなると急に気がくじけ、外の窓から見ていた。

一方エミリアは、携帯の着信履歴がかなりたまっていたのに気づいた。

「シズルだわ。」

そこにいたクノーは、シズルがエミリアに対してかなりいら立つ
ている事を知っていた。

「まだ、エミリアの事を怒っているのか。」

「あたしはただ分かつてほしいだけ！無理を言つてるのも分かる。
実際見てなければ、あたしだって信じられないし。」

「それでは、アレンに頼んで田の前で変身してもうえばどうだ？」

「アレンは見世物じゃないの。」

「それは、そうだが……」

と、その時だった。アレンが血相を変えて飛び込んできたのは。
レンが、それを置きかけて、やはり入ってきた。

「父さんが病院からいなくなつた！…さらわれたんだ！」

「さらわれたって、誰にだ？」「

レンの問いに対し、アレンは鮫のレリーフ入りの金属板を机に
叩きつけた。

「クライスか……」

丁度見ていたシズルは、あきれた様子で壁にもたれかかる。
「ハア……」

「2度も誘拐されるなんて…。敵の基地に乗り込んで、カタをつけ
ないと！」

その時、ナギサが、コートに支えられて入ってきた。

「私も賛成だ。作戦があるのならやうづ。皆で。」

「僕も同じだ。その方がいい！」

が、レンは否定を表わした。

「クライスとゼイビアックスだけでも手ごわいが、新しいライダー

が増えた。仮面ライダー・アックスとスピアだ。一度に相手をするのは無理だ。」

と、その時。二人の人間が、部屋に入ってきた。片方は単発で、もう片方はニット帽をかぶっている。

「カード遊びでもどや？」

「望むところだ！」

いきり立つナギサを腕で制止し、レンが説明した。

「仮面ライダー・アックスと仮面ライダースピアだ！」

「父さんは何処だ！」

アレンが問うたが、チョウ兄弟は失笑しただけだった。

「家出でもしたんか？」

「それは手のかかるオトンやな。」

「でも、ここじゃ迷惑だな。大体、狭いし。」

最初に動いたのはレンだつた。シズルが見ている窓の前に立ち、そこに突っ込む。シズルは思わず顔を腕でかばつたが、ベンタラに飛び込んだレンが、シズルとぶつかる事は無かつた。

「…え？」

そして、アレン、ナギサ、ユート、ダニーも続く。そしてシズルは、彼らが消滅 実際はベンタラに移動しただけだが するのを見届けた。

最後はアルバートだつた。既にデッキを取り出していたアルバートは窓の前でデッキを構えた。茶色の電光が、アルバートの腰ベルトを形作る。

「KAMEN RIDER！」

ゆっくりとスライド挿入されたデッキが回り始める。そして、エネルギーのリングが出現して回転し始めると、その衝撃で本棚が揺れ、立てていた本や飾っていた小物が、ビサビサと音をたてて床に落ちる。

「ほな、行くで！」

そして、スピアとなつたアルバートもまた、窓に飛び込んだ。

「……嘘、だる…」

シズルは、その場を立ち去つた。見ではならないものを、見てしまつたような気分だつた。

部屋の中は、棚から落ちたものでひどく散らかっていた。

「変身するといつもこいつなるの。はあ、おっさん叱られる…」

アレンは、同じ窓から出てきたライダーがいない事を確認すると、仲間を探して走り出した。

「何処行つた？」

するといきなり、丸い角を持つレイヨウの様なモンスターが、アレンを組みふせた。

別の所から出てきたナギサは、不意に誰かの気配を感じ取った。物陰に隠れ、様子をうかがう。拳を握りしめて飛びだがしが、そこから出てきた誰かはナギサの腕を抑えて壁に押し付け、腰に刺さつたレイピアを引き抜いてナギサの首筋に突きつけた。レンだつた。

「ちょ、ちょっとレン！私だ！」

レンは、相手がナギサだとすぐに気付き、武器を納めてナギサを手招きした。

「アレンとゴートを探そつ。」

一方アレンは、そのモンスター、マガゼールを追い詰めていた。キックを一撃放つてマガゼールをカメに叩きつけると、ドラグバイザーを開いてカードを挿入する。

「さつさとけりをつけるぞ。」

『FINAL VENT』

そしていつも通り、飛びあがつたアレンをドラグレッダーが炎で押す。ドラゴンライダー キックを叩きつけられたマガゼールが粉々になり、爆炎と共に消し飛んだ。

「ハア。」

と、その時だつた。

「次はこっちや！」

『SPIN VENT』

ドリル状の角がついた手甲型武器、ガゼルスタッフを振りかざしてアルバートが飛びかかってきた。後ろからの奇襲攻撃をかわしきれなかつたアレンに、さらなる追撃が叩き込まれる。

「クソッ！」

『STRIKE VENT』

腕に装着されたドラグクローラーを、アルバートに直接たきつけた。続いて横から一撃お見舞いし、近くの柵に押し付ける。

「兄ちゃんが黙つてへんで！」

「お前ら兄弟か！？」

「兄ちゃん！助けてや！」

「俺の弟に手え出すなや！」

近くにいたダニーが飛びかかつたが、間一髪のところでコートが立ちふさがつた。

「行かせない！」

ダニーとアルバートは一人揃つと、早速相手に襲いかつた。

ついたつきの攻勢がウソの様だった。チョウ兄弟は単体では素人

同然かもしれないが、二人揃つたとたんに力が幾倍にも増した。

「ウチらチョウ兄弟をなめんなよ！」

「アルバート、ストライクの小僧はどうでもいいけど、ドラゴンナイトは適当にあしらうだけにしどき。ブルースの言いつけや。」

「お田畠汚しくらいええやん！」

その時、いきなり飛びかかったコートが、アルバートを抱えて橋から飛び降りた。二人はもつれあつたまま斜面を転がって行つた。そしてアレンは、ダニーの振るう戦斧、デストバイザーの一撃を喰らつて吹っ飛ばされた。

「ほらほらどうした？」

武器を召喚する暇すら『えられず、アレンに重い攻撃が叩き込まれた。

「ええ加減にせえや、ボン。」

「待て！」

レンと、ナギサがいた。駆けつけたのだ。ダニーはそれを見ると、黙つてカードを抜き、デストバイザーに挿入した。ベントイン

『STRIKE VENT』

ダニーの腕に、トラの腕の様な武器、デストクローナ装着された。それを振り回し、勇躍レンとナギサに飛びかかる。

避けるのはさほど難しくは無かつたが、不意をつかれた一撃はとてもなく重かつた。レンが吹っ飛ばされ、ナギサも思わず膝をつく。

「さあ、じつちの番だ！」

『SWORD VENT』

アレンの手に、ドラグソードが飛び込む。それをダニーの背中に振り下ろすと、予想通りダニーはアレンを追つてきた。

「じつちだ！」

そのまま、離れた所まで移動したアレンは、ダニーと戦つていた。が。

ダニーの攻撃は、落ち着いてみればあきれるほど単調だった。避

けるのは拍子抜けするほど簡単で、攻撃の後の隙もかなり大きい。大振りの一撃をかわし、アレンはダニーに切りつけた。そのまま何度も何度も斬撃を叩き込み、止めたフルスイングでダニーを壁に叩きつける。

「グあああ！」

アレンはドラグソードを左手に持ち替えると、カードを抜いた。そこには、ドラゴンナイトの紋章が刻まれていた。

「ハア…ハア…ハア…」

しかし、アレンはカードを持った手が止まっているのが分かった。そして、それが震えているのも。

「ハア…ハア…やるんだ…止めを刺すんだ…ハアッ…やるしかないんだ…」

が、結局アレンには出来なかつた。カードを戻してドラグバイザーを閉じると、そこに背を向けて駆け出した。

レンとナギサは、アルバートと戦うコートを見つけた。

「ハツ、何やハンサムばっかりやな。」

「これは正義の証だ！」

コートの拳が、アルバートを捉えた。

「加勢するぞ！」

「ああ！」

「ところが。

「何すんねんアホ！」

『ATTACK VENT』

アルバートが、膝のアーマー型召喚機、ガゼルバイザ―にカードを挿入すると、近くの窓から、様々なレイヨウのモンスターがついyaうじや現れた。

「ナギサ、お前は止めておけ。」

「やらせてくれ。」

「これは命令だ、下がつて！」

「私がやる！」

レンの命令も聞かず、ナギサは突っ込んでいった。

『COPY VENT』

レンの手の中のウイングランサーを「ペーーー」、ナギサはレイヨウ達を相手取つて戦い始めた。が、やはり数の優位を覆すのは並大抵ではない。

「ナギサ！逃げる！」

「私は一度、クライスとの戦いから逃げた。2度も同じ事をする気は無い！」

「逃げるナギサ！ベントされるぞ！」

「私にやれる事は、やつておきたいんだ！」

その時だった。コートがナギサのもとに駆け寄り、ベノサーベルを振りかざしてレイヨウを次々斬り倒した。

「おねえさんから離れる！」

締めたとばかりに、ナギサがレイヨウをウイングランサーで切りつけた。が、蹴りを受けてよろめいたナギサは、すぐ近くでアドベントの音声を聞いた。

『STAN VENT』

次の瞬間にナギサが感じ取つたのは、体中がしびれるような感覚だつた、鋭い電撃の様な感覚が背中をかけあがると、ナギサは動けなくなつた。

「雑魚はそこで寝てな！」

クライスだつた。

「よお、遅かつたな。」

コートはクライスを切ろうとしたが、衝撃波を次々に叩きつけられ、近くの高くなつた花壇に叩きつけられた。

「コート！」

アレンはそこにたどりつき、割つて入るうとした。だが、そこにはダニーが立ちふさがつた。

アレンはそこにたどりつき、割つて入るうとした。だが、そこには

「通さへんで！」

「またお前か、どけえ！」

そういうしている間に、クライスはカードを抜いた。青と金のエンブレムが刻まれている。

「もつと楽しませてほしかつたよ、ユートくん。アハハハハハ！」
ナギサは、その光景を見ながら、体を起こそうとしていた。

「…立て…」

『FINAL VENT』

「よせ、止める！」

「ナギサあああ！」

アレンとレンの叫びも空しく、カードは挿入(ベントイ)された。

「立つんだナギサ…早く…」

「君とはもつと遊びたかったよ。じゃ～あね～！」

現れたアビスハンマーとアビスラッシュジャーが合体してアビソドンとなり、飛び上がったクライスが、その変形した頭部に合体する。

「お前の信念は何だ… 皆を守るんだ… 友達を… 大切な… 大切な人を！」

クライスが水流を纏つて、ユートに突進する。

と、その時だった。ナギサがコートの前に立ちはだかり、腕を広げて彼を庇つた。

そして、必殺の突進攻撃、『アビスマダイブ』は命中した。

「グあああああ！」

「ナギサ！」

「おねえさん！」

ナギサは大きく吹き飛び、地面に叩きつけられた。

「ハア…ハア…クッ…ワイ…ナー…ル…」

恐怖、不安。何故かナギサの声から、そのような感情は読み取れなかつた。むしろ、安らぎや、安堵すら感じる。

「ワインール…私…やれたよな… やつと守れたんだ… 私は…」

「おねえさん止める！ 行っちゃ 駄目だ！」

ナギサはゆっくりと立ち上がった。その声は、幸せそうだった。
ユートはベノサーベルを投げ捨て、ナギサのもとに駆け寄ろうとした。
た。

「ありがとう……みんな……こんな……私に……ワインアル……みんな……」「ダメだ！ダメだ！」

ナギサは右拳を握つて左胸に当て、敬礼の姿勢を取つた。そして、その体が、粒子化してゆっくり消滅する。

そして次の瞬間、ナギサはそこにはいない。

も…重かつた。

「ながめ」

チミウ兄弟は近くの窓に飛び込んでいた。ケライスはすでに退散している。

「おねえさん　おねえさん

コードは膝をついた。そして、変身を解き、テッキを拾い上げた。彼は、涙をぽろぽろといぼしていた。

アレンとレンも変身を解く。レンは涙じそ流していかつたが、その目には深い悲しみが見えうれていた。

「ナギサを取り戻せないのか！？」
「つか取り戻すんだ 絶対

3人は、コートがナギサにチームプレイの大切さを諭した時を思い出していた。そして、拳を合わせ、4人で決意を固めた時のこと

『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』

ベンタラとグラールに。

第24話 センパー・ファイ（後書き）

次回予告

ナギサを失い、悲しみにくれるコートは、ナギサが残した手紙を見する。一方、さらわれたフランクの事を思い出して探そうとするアレンに、チョウ兄弟が立ちはだかる。そして、クライスからHニアに、フランクの居場所が伝えられた…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『前線からの手紙』

命をかけて、守りたいものがありますか？

第25話 前線からの手紙

エミリアは、散らかった部屋を片付けていた。

「クノーさん、ぼーっとしてないで手伝って！」

当のクノーは、しばらく茫然とした表情をしている。

「…信じられない。仮面ライダーは本当にいたんだな…」

「当たり前でしょ！…あたしの話、信じてなかつた？」

「それは！もちろん信じてはいたが…やはり実際に見ると違う。まさにここで変身したんだから。」

と、その時だつた。レンとアレン、そしてコートが入つてきた。
3人とも平静を保とうとしていたが、エミリアは何かがあつた事を
すぐに見抜いた。3人の表情が、いつになく重かつたからだ。

「アレン、レン、コート。大丈夫？」

そしてエミリアは、一人が欠けている事にも気付いた。

「……ナギサはどうしたの？」

「……ベントされた…」

答えたのはレンだつた。幾ら冷静にならうとしても、その声から、
悲しみを見逃すことなど出来ない。

「…ベント…？死んだという事か？」

「…考えようによつてはそれよりひどい。別次元に閉じ込められて、
そして二度と出られない。」

「…クライスは僕を狙つてた。でも、おねえさんが僕を庇つたんだ
…僕のせいなんだ…僕のせいでおねえさんが…」

「俺のせいだ！俺がアックスをベントしてれば、割つて入れた！ナ
ギサもコートも二人とも助かつたんだ！…俺は仮面ライダーにふ
さわしくないんだ…」

「アレ、コート、自分を責めるな…全責任は俺にある。」

それだけ言い残し、レンはその場を後にした。その姿は、誰が見
ても痛々しかつた。

「…ナギサは自分を犠牲にしたんだね……」

ゼイビアックスの要塞。クライス、そしてチョウ兄弟が転送機から出てくる。彼らが何をしたかは、その場にいたゼイビアックスにも何となく分かった。チョウ兄弟がお互いの拳を合わせる。「さて、いい知らせかな？」

「一人倒しました。チョウ兄弟が援護してくれたおかげです。」「役に立つやろ？」

「次は俺らにもやらせてーな。おいしいところをクライスに持つてかれたからな。俺らはまだ切り札を切つとらへんのや。」

意気込みながら、アルバートが喋る。

「君たちの意気込みは素晴らしいが、ルールナンバーーを忘れてはいられないかな？」

「『ウイングナイト』とストライクを倒すまでドラゴンナイトには手を出すな。』」「

「よろしい。」

ダニーの言葉は少し棒読みっぽかっただが、ゼイビアックスは聞こえなかつたことにした。

「アルバートくん？」

「ああ、わかつとるがな。」

ゼイビアックスは、自分の後ろをちらと見た。そこには、車いすに乗せられ、うつろな目をしたフランクがいた。

「そろそろ次の罠を張らなくてはな。」

「了解。」

クライスがにやりと笑い、ケータイを手にして立ち去つて行つた。

「俺らには何やらしてくれるん?」

「君達には、ドラゴンナイトを見張つてもいい。」

そして、ゼイビアックスはここだけ強調して、付け加えた。

「ただ、見張るだけだ。」

「ああ、わかつとるがな。」

「止めとけアルバート。」

そしてチョウ兄弟が出て行つた後、ゼイビアックスはフランクの方を向き、嘆息を漏らした。

「ハア、やれやれ、フランク。」

ユートは、自分の部屋に戻つていた。そこには、昨日まで泊まつていたナギサの荷物がまだあつた。その中の鞄から突き出している棒を抜いてみる。ユートがナギサにチームワークの大切さを諭した時の、木の棒だった。と、ユートは、便箋が鞄から突き出しているのを見つけた。

「…手紙?」

「…ワインアルへ。お前がいなくなつてから…」

お前がいなくなつてから、もう随分経つな。手紙と言つものは、もらつたら返事を書かねばいけないという事を知つたので、返事をかくことにした。でも、出す相手のお前は、もういないからな。だから、これは、出さない手紙だ。

お前は分かつていたのか？私が再び、戦いに身を投じることになると。分かつていたから、私に、あんなによくしてくれたのか？…いや、すまない、忘れてくれ。

私はある男に出会つた。その時、チャンスをつかんだと思つた。このグラールをもう一度救い、お前に恩返しするチャンスを。けど、私は良いように使われ、もてあそばれていただけだった。その時は、私は、道化に過ぎなかつたんだ。

でもそんなとき、私に真実を教えてくれた人たちがいた。どんな言葉よりも、彼らは行動でもつて示してくれた。真実と勇気と、そして真心を。皆は寛大だつた。どんなに私が足を引っ張つても、どんなにぶざまな戦いしか出来なくとも、私を必要としてくれた。私は、生涯で一番大切な物を手にしていた事に気付いたんだ。心から信じあえる友達を。どんな犠牲を払つてもいいほどの友達を。

昔、お前が教えてくれた言葉、その意味が、ようやく分かつたよ。

センパーファイ 常に忠実であれ

私は彼らを裏切らない。絶対に。

私はせめて、誰かの役に立ちたかった。私と言う人間がいた事に、少しでも意味を持たせたかったんだ。でも、そんな事はどうでもよ

くなつた。ヒロインになんてなれなくてもいい。だつて、自分の命を投げ出しても、守りたいと思える、友達が出来たんだ。それは全て、お前のおかげだと思っている。お前とあえたから、そしてお前が私に色々な、生きていることの楽しさを、大切な人といふことの喜びを、教えてくれたからだ。

ヒロインになれなかつたとしても、今、私はとても幸せだ。だから、私はお前に感謝している。

お前に会えてよかつた。眞と会えてよかつた。そして私は、生まれてきて、よかつたよ。

私の一番の友達へ

ナギサ

「……おねえさん……何でだよ……何で……僕はちつとも……幸せじゃないのに……」

またしても、彼は泣いていた。

ナギサは、自分達が思っていたよりもはるかに、仲間を想つていた。だからこそ、こみ上げる涙が止まらなかつた。こんなにも自分達を想つてくれていたナギサを、守れなかつた。自分のせいで、失つてしまつた。だから涙が、止まらなかつた。

「…君はヒロインだつたよ……おねえさん…」

ポケットの中の、ナギサのデッキを握りしめ、泣きながら、ナギサを想つた。守りたかった、でも守れなかつた人を。

レンは、ビルの屋上の、パイプの上に腰かけていた。

「…俺のせいだ…リーダーの器も無いのに…俺は…」

逃げろと言つたんだろ。

「…?」

反射的に横を見たレンは、近くの鏡の中に、自分の姿を見つけた。もちろん現実には存在しない。だが、彼はそれに歩み寄つた。

「十分じゃなかつた。無理矢理返すべきだつた！」

彼女も戦士だ。危険は承知の上だ。

幻影は話した。その声は、幾重にも響いていた。

「俺が命令めいた事を言つから、戦士気取りになつただけだ！」

指揮官が犠牲をためらつてどうする？戦争なんだ。

「俺は指揮官じやない、成りたいとも思つた事は無い！そんな役割は御免だ！」

他に誰がなれる？お前しかいないんだ。

「やめる事は出来ないのか？」

影はかき消えた。

「おい。……オイ！」

いきり立つたレンは、拳をその鏡に叩きつけようとした。だが、デッキを持するレンの拳は、鏡を突き抜けただけだった。

バイクで走っていたアレンは、後ろから追つてくる2台のバイクに気付いた。やがてそれはアレンに追いつき、片方のドライバーが声をかけてくる。

「よお、ボン。」

「クソつ、お前らか！」

「ヨウ兄弟だつた。」

アレンはマシンを加速させ、一人を巻いだとした。

「回れ！」

「了解！」

ダニーの指示で、アルバートが別ルートに抜ける。

アレンはそれに気付かずに逃げていたが、いきなり前方からやってきたアルバートに逃げ場を奪われ、マシンを降りる。

「なにやってんねんや。お子ちゃんは一人で出歩くもんやないで。」

「俺は二十歳だ！……お前らなんか、怖くない。」「…いちびんなや。」

すると、いきなりダニーが言いだした。

「ベントされたのは誰やつたかいな？あの、眼帯でナイズバディの『テコマ子ちゃん？お前なんかイチロロやー。』

「お前ら腐ってる。」

「友達が恋しいんかいな？確かに、あのお穂ちゃんもベントされる時はピーピー泣いてはつたなア！」

すると、いきなりアレンがダニーの顔面に本気の拳を見舞った。ダニーは勢い余って吹っ飛ばされ、近くの花壇のすぐ横に倒れる。

「…あの時ベントしどきやよかつた。……もう迷わない。」

ダニーはアルバートの手を借りて起き上がった。そして、アレンを指さしたアルバートは挑発するように言った。

「こいつ、兄ちゃんを殴りよつたな。」

「えらいこいつちや。暴行を加えよつた。攻撃的で、反社会的つてやつちや。」

「て事は、こいつをいてもうても正当防衛やな。」

アレンは一人を見据え、落ち着いた口調で返した。

「カードゲームが好きだつたな？」

3人は、テッキを一斉に構えた。

そしてベンタラ。ダニーがアレンに殴りかかる。前回の様にあしらおうとしたが、どうやらこちらの攻撃パターンはある程度読まれている。前に比べると、その実力は拮抗しているように見えた。

「さあ、授業の始まりや！」

「兄ちゃん、先行くで！」

アレンは狭い路地に二人を誘いだした。ここなら、数が多い敵は戦いづらいはずだとおもつたからだ。が、とんだ誤算だった。どうやらチョウ兄弟はこういう場所での戦いに慣れているらしい。追いつめられるのはアレンの方だった。

「どうしたあ？」

「俺らをベントするんやなかつたか？」

「ウイングナイトとストライクがあらなあかんのか？」

「さあ…どうだろうな！」

アレンがカードを抜いたのを見て、ダニーとアルバートもカードを抜き、そして3人はそれぞれの召喚機にカードを挿入^{ベントイン}した。

『SWORD VENT』

『STRIKE VENT』

『SPIN VENT』

3人の手にそれぞれの武器が飛び込む。そして、アレンは一人に斬りかかった。しかし、冷静さを失っては、ジンゴウムの如くふたりで戦うチョウ兄弟に太刀打ちできるわけがなかつた。二人の連携が取れているのに加え、おそらくアックスとスピアは組んで戦うことを前提に作られているのだろう、お互いに足りないところを補いながら、相手を追い詰め、逃げ場をなくし、そして次々に攻撃を叩きこむ。そして、デストクローを手に飛び込んだダニーの一撃がアレンをまともにとらえ、彼は吹っ飛んで後ろの資材の山に叩きつけられた。

「けつ、ボースカウト小僧が！」

ダニーの言葉が合図になつたように、アルバートが、レイヨウのカードを抜いた。

「俺ら兄弟をおちょくりよつたからには…」

「止めえ！ アカン。契約はおわつとらん。」

「…クソッタレえ！ …まあいいわ、示しはつけたっちゅうこっちゃ。」

「

アルバートはその場を立ち去った。ダニーもアレンを一瞬だけ睨みつけ、去つていった。

「…待て…決着はまだ…逃げるな…」

アレンは地面に這いつぶばつたまま拳を握りしめた。こんななんじや、ナギサの敵など討てない。

「クソ……！」

大体同じころ、シズルは近くのオープンカフェでコーヒーをすすつていた。だが、味など分からなかつた。

「…全部本当の事だつたのか……エミリア、本当に『」めん…」

その時、彼は近くに歩み寄つて来る人間を見つけた。ルミアだつた。

「あら、シズルじゃない。どうかしたの？」

シズルは咳払いし、平素の自分がいれるようにした。

「何でもないよ。何か用かい？」

「あら、エミリアから私の悪口聞いてるみたいね。」

「そんな事は無いさ、事実だけだ。」

すると、ルミアはシズルの席の向かいに腰を下ろし、少し身を乗り出して言つた。

「エミリアは眞実を知らないのよ。良い？怒らないで聞いて。エミ

リアの身の安全が心配なの。…誰に話したらいいかわからなくて。危険な男と付き合つてゐる、そうでしょう？」

とたん、シズルは口を開いた。そして、自分が見た者の話をブチまけた。

「そ、そだよ！エミリアを突き離したら、その後、僕の目の前でひとり、マシナリーみたいな姿に変わった！」

するとシズルは黙り込んだが、ルミアは落ち着かせるように話しかける。

「いいのよ、全部知つてるから。だからあなたに話しかけたの。エミリアには助けがいるわ。」

「君のかい？」

「貴方の、よ。危険な目に遭わせたくないでしょ？」

「もう遭つてるかもね。僕とした事が、彼女を一人で置いてしまつたんだ。」

「心配無いわ。ところで、エミリアは何処まで知つてるの？」

「全部知つてるんじゃなかつたのか？」

「細かい事は別よ。」

「だつたら、君が聞けばどうだ？」

「エミリアは最近私を避けてるわ。でもあなたは、友達でしょ？そして、研究仲間もある。」

「だからって、急に根掘り葉掘り聞き出したらかなり変だろ？」

ルミアはイスに身を預け、顔をしかめて行つた。しかし、悩ましげな言葉の割には、その声は想定の範囲内と言つた感じだった。

「確かにね……エミリア、日記は付けてる？」

「それだ！パソコンで。……ちょっと待て、エミリアのパソコンを盗めって！？」

「友達を守りたいでしょ？」

「僕は人の物は盗まない！まア……女の子は別だけど。」

「盗むなんてそんな馬鹿な。」

そう言うと、ルミアはナノトランサーから何かを取り出した。ど

うやらHSBメモリらしかつた。

「これを挿すだけでいいの。」

シズルはそれを受けとり、じつと見つめた。

エミリアは、そんな話がかわされているとはつゆ知らず、自分の部屋から出てきた。

「エミリア、大丈夫か？」

「ええ……」

そこにいたユートの問いにそう答えた直後、アレンが入ってきた。疲れた顔で、肩を上下させる彼に、エミリアは思わず声をかけた。

「アレン！？どうしたの？」

「アックスとスピアさ。ベントしようとしたけど。」

「二人共か？たつた一人で？」

クノーが、驚いて問い合わせる。

「俺があにつらをベンチしてこれば……」

「今ベントしても、ナギサは戻つてこないわー。」

「俺のせいだから…償わない」と

その時だつた。部屋の電話が鳴り響いた。

「ハイ、ミュラーです。」

エミリアが電話に出た時だつた。

「……………クライス！？何の用なの！？」

アレンは驚きに一瞬固まっていたが、よくよく考えると、エミリアはクライスの正体を知らなかつた頃、彼に電話番号もメールアドレスも教えていた。エミリアは素早くスピーカーにした。

『ヤツホー。アレン君に、お父さんの居場所を教えてあげ

カスティ東地区のローズディール工業団地だ。すぐに行かない

お父さんの身が危ないって言つてあげなよ。そこには僕がいるとも

ね！良いかい？ローズデイール工業団地だよ！それじゃあね～ハハ

八八八！

「……行かなくちゃ。」

「待てアレン！僕も行く！一人じゃ危険だ！」

「あたしも行くわ！」

H//コアの言葉にて、アレンは思わず止めようとした。相手はライダ

だ。おそらく、3人の。

「ちょっと待て！エミリアこそ危険だ！」

「お父さんをバイクで運ぶ気?」

「……分かつた、行こう。」

「クノーリーさん、レジが来たら、行き先を教えて聞いて！」

「あ、ああ！」

そして、アレンはエミリアを後ろに乗せてバイクで走りだし、ユートもナギサの物だったフローダーで後を追った。

「... 気をつける...」

第25話 前線からの手紙（後書き）

次回予告

工場にとらわれたフランク。そこに現れたクライスはアレンに取引を申し出るがアレンはそれを拒否、コートとエミリアにフランクを逃がすよう頼むと一人で戦い始める。そして、そこでアレンは迷いを振り切つてしまつ。

そして、戦いが激化するグラールに、最強と言われた女戦士が舞い降りる…

次回 仮面ライダー・ドラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『兄弟の最後』

命をかけて、守りたいものがありますか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1608w/>

仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士

2011年12月1日17時45分発行